
新 “ネギまと転生者”

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新 “ネギまと転生者”

【Nコード】

N 7 2 6 4 Y

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

これは、以前『ネギまと転生者』を新しくして、一からやり直したものです。

物語は原作開始の約1000年程前から始まります。

アンチになるかどうかは書いていかないと分かりませんが、原作ブレイクにはなりません。

始まり（前書き）

これは以前上げた“ネギまと転生者”を一新にした作品です。

物語の始めは原作開始から約1000年前からの始まり、つまり、魔法大戦前からのお話です。

主人公は変わらずの“蒼騎 真紅狼”ですが、生い立ちや能力を多少変更しております。

始まり

.....。

「これ！ 起きろー!!」

「おう!？」

頭を杖で叩かれた..... 硬い所に当たって凄い痛い。

「ここは どこだ？」

「..... 神様が居るところじゃ」

「へえ〜〜 神?!」

「ようやく状況に追い付いてきたか.....」

「えっとじゃあ、アンタは神様なのか？」

「そうじゃぞ」

「で、ちよつとばかり記憶が吹っ飛んでいるんだが、俺はなんでココに居るんだ？」

「..... お主の体の中に存在してるモノが危険だったため、超法規的措施によりお主を殺したんじゃない」

「..... マジで？」

「まじでまじで」

いきなり言われてもそれは困るな。
いや、マジで。

取り敢えず、前向きに生きるか。

「で、殺した理由は分かった。その他に用があるんだろ？」
「うむ。神様の中にもルールがあつてな。お主の場合特別だったんじゃが、基本神様って言うのは、人間界に触れないようにしてるんじゃない。だが、儂より下の下級神様……所謂、『見習い』がたまーに“うつかり”人を殺してしまう時があるのじゃ。そうなつてしまった時に、その者達を転生させるんだが、何故かマンガの世界に転生させるのが流行つておつてな、その世界に生きる為にチートになつて転生させているのだ」

ふーん？ 神様業界つてのも大変なんだな。
一つ気になつていたので聞いてみた。

「^{ジイサン}神、アンタさつき“儂より下”つて言つてたけど……位高いの？」
「儂はこれでも最高神じゃ。といっても、本当に人間界には触れておらんぞ？ お主のような例外以外とかはな。本来はそういう部署があるのでそちらに一任しておるのじゃ」
「色々あるもんだ。……ん？ ということは俺もマンガの世界に転生するつてことか？」
「まあ、そうじゃな」

転生か…… 人生なにがあるか分からないものだな。

「一応聞くけど、行き先は？」
「今だと……『ネギま！』という世界らしい。まあ、ファンタジ

「じゃな」

「フアンタジーってことは“魔法”とか？」

「その解釈で間違っていないな。まあ、餞別代りにそれなりの特典付けてやるぞ？　しかし、お主は何故か、その『ネギま！』の魔法が使えないらしい」

「何故に？」

「そういう体質らしいの……」

「そっかー、体質ならしかたがないよねー」

「H A H A H A ！（。。。）」

「気にしろよ！！」とか言われそうだけど、無視しよう。
深く関わっちゃいけない気がする。

「んじゃあ、F F 5と6（アドバンス）の魔法と青魔法、暗黒魔法が使って、さらには召喚獣は6ので。あとはK O Fのオズワルドの“カーネフェル”だろ、鋼殻のレギオスの“鋼糸”の技と剋技を全部で“剋”の量はアルシェイラと同じぐらいで。あとは戦国B A S A R A 2の“前田 慶次”、“長曾我部 元親”、“織田 信長”の最終武器で、ただし、慶次の武器だけ“第七武器”も付けてくれる、アレを使ってみたかったんだよね。D・G r a y - m a nのクロス・マリ안의“断罪者”^{ジャッジメント}を。最後に、メルブラの“蒼崎 青子”のマジックガンナーと“軋摩紅摩”の灼熱をでいいッス」

「随分とまた付けたな。まあいいだろう。そうしておこう。そうじゃ、こちらの特典みたいなものなんじゃが……：“直死の魔眼”と『七夜』の体術、そして不老不死が付いておる」

「なんでまた？」

「こうしないとお主の体が耐えられないらしい。お主の体の中の存在が原因らしい」

「ふ〜ん？ まあ、貰えるモノは貰っておくよ。あとさ、ちよつとした改造をしてもらってもいい？」

「内容によるが、言ってみろ」

「いや、“蒼崎 青子”のマジックガンナーでFFの魔法も撃てるようにすることと“断罪者”^{ジャッジメント}の弾丸もFFの魔法を込めた“魔法弾”を追加して欲しいのと、俺用の色に変えて、“断罪者”^{ジャッジメント}から別の名に変えることなんだけど……………」

「まあ、いいだろう。そう手配しておくぞ。ああ、注意点だ」

「んー？」

「不老不死じゃが、体に馴染むまでは一年ちよつとかかるから、その間気を付けることじゃ」

「分かった。んじゃ、世話になったな神」^{ジイサン}

「飛ばされる時間軸は、約1000年程前からじゃから、貰った能力の研鑽にでもあててるのじゃな」

「うい」

そう返事すると、次第に足元から薄くなっていっただ。そうして、俺は意識を失った。

「さらばじゃ」

蒼崎 真紅狼よ」

始まり（後書き）

新しくなって、やり直しました！

以前“ネギまと転生者”を読んでいた皆さまがまた付き合っ
て頂けたら嬉しい限りです！！

次回はキャラ設定です。

キャラ設定

キャラ設定

主人公 蒼騎 真紅狼 《あおき しんくろ》

年 今現在 20歳

身長 175cm 180cm

体重 61kg 65kg

誕生日 4月29日

容姿は鋼殻のレギオスのリテンスをイメージ。だが、無精髭は無いし、煙草も吸わない。ただ、眼の色は真紅。

裏設定

両親は二人とも他界している。10歳の時に交通事故により死亡。その後、10年間一人で切り盛りしながら、暮らしているが20歳の時、神に超法規的措施により殺されて、能力をもらい転生する。
ジイサン

能力

能力は基本的に“ネギまと転生者”と一緒にですが、ちょっとばかり能力の入れ替えをしました。

昔は

BLAZBLUE CSのハザマの能力、“碧の魔導書”を保有。
武器 二本のバタフライナイフ ドライブは『ウロボロス』

KOFのオズワルドの戦闘術 “カーネフェル”を使える。
武器 トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の剋技も使用可能）

武器 リンテンスの鋼系と刀の天剣

戦国BASARA2の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。
各武将によって、「吸収・半減・無効・弱点」できる属性がある。

FF5の暗黒魔法と6の魔法、青魔法＋召喚獣が使える。

『七夜』の体術と“直死の魔眼”が使える。

『紅』の“崩月流”と角あり。
そして、不老不死。

でしたが、“新 ネギまと転生者”ではこうです。

KOFのオズワルドの戦闘術 “カーネフェル” 使える。
武器 トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の劉技も
使用可能）

武器 リンテンスの鋼糸と刀の天剣

FF5の暗黒魔法と6の魔法、青魔法＋召喚獣が使える。

戦国BASARA2の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。
各武将によって、「吸収・半減・無効・弱点」できる属性がある。

前田慶次

吸収 風 半減 地 無効 雷 弱点 炎

長曾我部元親

吸収 炎 半減 雷 無効 水 弱点 地

織田信長

吸収 闇 半減 炎 無効 地 弱点 光

不老不死。

までは一緒です。

ここからが新しい部分です。

メルブラ

“蒼崎 青子”の通称『マジックガンナー』の能力が使える。
破壊特化

“軋間 紅摩”の灼熱
鬼の肉体

D・Gray-man

クロス・マリアンジャッジメントの主武器である“断罪者”
ちなみに“断罪者”ジャッジメントは真紅狼verに变えます。
以上です。

減ったのは、“ハザマ”の能力と、BASARA2の“伊達 政宗”と“真田 幸村”の武器と技、そして『紅』の“崩月流”です。

結構“魔術”よりにしてみました。

最後にアンケートなんですが……

“断罪者”^{ジャッジメント} 真紅狼verについて、なにか良い名前はありますか？
あと、配色やどんなモデルなどもなんですが……

原作のクロス^{ジャッジメント}の“断罪者”は銃身に十字架のデザインがありました
が、真紅狼はどのようなデザインがいいですか？

ご意見お待ちしております。

キャラ設定（後書き）

出来たら、今日中にもう一話上げたいです。

そして、アンケートの方よろしく願います!!

意外なお友達・・・

（真紅狼 side）

目が覚めたら、大森林の中に居た。

いや、冗談無くマジで。

取り敢えず、体が自由に動くかどうか確かめてみたら、ちゃんと動いた。…………というより、以前よりも軽やかに動く。

不意にポケットの中に何か紙らしきものが入っていたので取り出してみるところ書かれていた。

『真紅狼へ

お主が目を覚めた時にはこれを読んでいるだろう。お主が居る場所は“魔法世界”と呼ばれる場所で地球ではない。そこは本来の火星の表面に“上乗り”させた状態の“魔法世界”じゃ。地球に行きたかったら、その世界にある“ゲート”を使えば、行ける様になっておる…………覚えといてくれ。最後にこれを消しといてくれ。

神より』

ここは火星なのか……。

初めてだ、転生していきなり地球以外の星に降り立つなんて…………取り敢えず、メモは消去つと。

『ファイア』

ボツ！

指先から小さな炎が出て、メモを燃やした。

「さて、体が不老不死になるまで貰った能力の把握と力を馴染ませえとな……………」

そこから、俺は長い年月を掛けて、力を体に馴染ませた。

キングクリムゾン！！

軽く201年はすっ飛ばす！！

はい、真紅狼だ。

今、年は221歳だ。

最初の一年は大人しく隠れ住んでいたよ。

大森林の奥にそれなりの城が在ってな、そこを拠点にしてた。

周りは自然が創った石壁とかだったから、人はまず来れないし、猛獣が来ようとしても他の強者がうろついてるから、そちらも問題は無かった。

その後、体が不老不死になって、力も馴染んだ後、周りに居る猛獣共と殴り合いしてた。

いや、凄いだよ。

人じゃないのに魔法障壁張っててさ。

魔獣パネエ……………

で、殴り合った後何故か仲良くなった。
意志疎通がそれなりに出来るようになって、まあ、楽しく過ごしていたよ。

今日はこの森に住んでいる猛獣（友人）たちを集めた。

「話があつてな。ちょっと世界を見て回ってくるから、その間留守を頼みたいんだよ」

まあ、コイツ等に言っても人語で返事が返ってくる筈ないのだが、そこは長年住んでいる者達のコミュニケーションで返事が返って来た。

「……ゴオアアアアアアアアアア……！！！！！！」

どうやら、良い返事だったらしい。

「じゃあ、行ってくるから………後を頼むぜ？」

森を出ようと外に向かおうとしたら、一匹の若い竜が首を垂らして「乗れ」と言っているみたいだったのでそいつに乗って森を出た。

「態々、見送り有難うな」

「……グルルウ」

「おう。またな」

ブアア！

俺を乗せた若い竜は数少ないやり取りをしたあと、再び森の中に去っていった。

そこから、街のある方に歩き始めた。

情報を収集しながら、街の名前などを覚えたりした。

どうやら、俺が居た森は、エリジウム大陸の“ケルベラス大森林”と呼ばれる場所だったらしい。

その他にも、自由交易都市“グラニクス”や魔法学術都市“アリアドネー”、共和国“メガロメセンブリナ”それに対立する大帝帝国“ヘラス”、そして、この世界が出来た当時に創られた王国“オスティア”などがあるらしい。

そして今現在、俺はその“オスティア”に居るんだが、浮いてるんだ土地が。

浮遊国かよ、ここ。

とまあ、歩いていたら何かダンジョンっぽいところに来てしまったんだが、何ココ？

取り敢えず、俺を後ろから見ている黒いフードを被ってる人に聞こう。

「なあ、アンタ。ここがどこか分かるか？」

「!？」

そう問いかけると姿を現した。

……………結構出来そうだなあ。

「貴様、何者だ？」

〈真紅狼 side out〉

「???? side」

私はいつも、ここから望遠鏡を使って墓守りの宮殿を覗いていた時、人の気配がしたのでフードを被り、気配を消して近づくとな妙な感じがした。

この世界の者でもなく、ましてや「人間」でも無い存在だった。そこに不意に声を掛けられた

「なあ、アンタ。ここがどこか分かるか？」

「!？」

気配はちゃんと消していた筈なのに、いつどこで分かったのか？と自問自答していたが、答えることにした。

「貴様、何者だ？」

「あらら、俺は“場所”を聞いてるのに、そちらは“名前”を訪ねるのかい？」

「もう一度、聞く。貴様、何者だ？」

「人の名を聞きたいなら、自分から名乗れ。それが出来ないなら、俺はお前を無視するし、答える気も無い。邪魔したな……………」

そういうと彼は去っていかうとしたので、私は必死に引きとめた。

「待つて！ 待つてください〜〜〜！！ 名乗りますから、行かないでください〜〜〜！！ 私の話し相手になってください〜〜〜！！」

彼の腰にしがみつきながら、必死に引きとめた。
そうすると彼は突然のブレイクに驚きながらも、止まってくれた。
よかった〜〜。

「……………えーっと、名前は？」

「えっと、レーネ・アルカディアと言います。ライフメーカー“造物主”とも呼ばれています。貴方のお名前はなんて言うんですか？」

「蒼騎 真紅狼だ」

「蒼騎 真紅狼さんですか……………、“旧世界”の方ですか？」

「“旧世界”？」

「えっとですね。こちらの世界を“新世界”といい、“ゲート”の向こう側を“旧世界”と言うんです」

「じゃあ、一応旧世界出身だな」

何か含みのある言い方ですが、触らない方がいいですね。

「それですね。初対面の方にこんなこというのもどうかと思うんですが、私と友人になつてくれませんか!？」

「別にいいぞ？」

「いいんですか!？」

「うん、まあ。何か困ることでもあるのか？」

「いや、だって、皆、私の正体を言つと逃げたり、怯えたりするの
で……………」

「俺はそんなの知らんし、関係無いね。うっくん、呼び名は“レーネ”でいいか？ ちよつと安直過ぎるが……………」

「じゃあ、私は“真紅狼”って呼びますね!」

「おう。よろしくな、レーネ」

「はい。よろしくです。真紅狼」

「で、レーネ、頼みがあるんだがいいか？」

「なんですか、真紅狼？」

「俺、“旧世界”に行きたいんだが、“ゲート”を開いてくれないか？」

「え？ うっくん、まあ、良いですよ」

そういつて、真紅狼をゲートまで案内してゲートを開いた。

「また、逢おう、レーネ」

そう言つて、真紅狼は消えた。

「はい。また、いつか……」
レネ side out

とまあ、ゲートで移動したんだが目覚めたら、多分日本(?)の土地の関東に居たんだよ。

意外なお友達・・・（後書き）

はい、いきなりキャラブレイクです。

造物主はフードを被ると威厳が出ますが、脱ぐと普通に少女です。あと、レーネにはもう一人の人格者がいますが、それがライフメーカーです。

つまり、レーネの体を借りることで現界出来るわけです。

条件は『フードを被ること』です

そして、この当時はまだ、セクトウム達は居ません。創られておりません。

キャラブレイクに「ええ~~~~~!!」という方も居るかもしれませんが、それが狙いだったり（笑）

話の進みが早いと感じてしまいましたが、魔法大戦時に長ーくやりそうなので、パパッと進めます。

また、キャラの構成が出来ましたら、載せます。

お次は、あの人が登場。

真紅狼と吸血姫（前書き）

連日投稿だー！！

真紅狼と吸血姫

（真紅狼 side）

どうやら、ここは“麻帆良”という土地らしい。

調べてみると、それなりに霊脈やら魔力のパイプラインがあるので、この土地を丸ごと俺が買い取った。

というより、そこを治めている領主に頼んだら、すんなり土地を分けてもらった。

「貰うの無理じゃね？」とか思う人が居るかもしれないが、いやね？ 転移した後、人が襲われていたから助けたら、この領主の娘さんだったらしく、その後家まで、送ってあげたんだよ。そしたら「お礼がしたい」っていうから、「じゃあ、土地をくれ」って言ったら、「どうぞ、好きなだけ貰ってください！！」と言ったから、「“麻帆良”という土地を全部くれ」って二言返事で分けてもらったのさ！！

と言うわけで、今、俺は家を建てている。
かなり奥の方に創った。

武家屋敷だが、火事や自然災害などになっても崩れない特殊な造りにしてあるので大丈夫だ。ついでに奥行きがある家にしたみた。

門までしっかりとした物を造つてある。

門をくぐると大きな屋敷が見えるんだが、そこは客人用みたいなもので、母屋はさらに奥に造った。

あまり、人目につかないようなに場所に造つてある。

なんせ“魔法”とか使うしね。

その後、俺の所有している土地全体を封印した。

これから世界を見て回るし、勝手に入られても困る。

俺の土地に入ろうと近づくと、急に違う事を思い出したように遠ざかっていくような精神干渉のような境界を張った。
ただ、これは俺が許可した人達はすんなりと入れる。
まあ、今のところ一人もないけどね！

「さて、欧州辺りに行ってみるか……………」

俺は召喚獣を呼び出した。

呼んだのは“ジャンプ”でおなじみの『ケーツハリー』

俺はすぐさまケーツハリーに乗り、欧州に行ってみると……………冬でした。

「雪が降ってる…………… まあ、冬なら当然か」

ケーツハリーに茂みが多い所に行ってもらい、そこで降りた。

そこから、俺の世界と同じの“欧州”なのか歩き回った。

だいたい、約204年ぐらいの月日をかけたよ……………

ということで今俺は445歳だ。

見て回った結果は、全く同じだった。

冬の時期にドイツに行って麦酒を飲んだんだが、うめー、麦酒マジうめー。

つか、この時代ってまだ城とかあった時代なんだよなあ。

で、もう夜です。

最悪野宿になるかなあーと思っていたら、無人の小屋があったからそこに今夜は泊まることにした。

ちかくに湖があったから、そこで魚と水を採って、森からは竹を探した。

二、三本を持って帰り、即席の皿と箸、コップを造った。

火をおこし、魚を焼いて、真水を煮沸させた後、食事をした。

その時、近くで「ガサツ！」という物音がしたので、そこに行ってみると裸足で走って来たと思われる小さな女の子がいた。

「えーっと、どうしたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

困った。じーっとこちらを見てくるだけで、喋ってくれないのは困る。

その時、その女の子の腹から「ぐー」という音が聞こえたので……

「……………食べるか？」

「……………（コケン）」

「よし、ちよっと待ってろ」

魚を調達しに行き、その場で内臓を取り出して綺麗に洗い、じっくり焼いた後その子に渡して上げた。

「アツいから、気をつけて食べるんだ。あと骨にも気をつけてな」

「………ありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

よほど腹が減っていたのか、三匹採って来た魚の内、二匹を食べてしまっていた。

そして、腹が満たされた後、女の子はこちらを見て口を開いた。

「食べさせて有難うございます。私はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルと言います。そして………」

「俺の名は蒼騎 真紅狼だ。言いたくなかったら言わなくてもいいぞ？」

「……………そして、私は吸血姫です」

「いやはや、コイツは参ったね。」

「真紅狼 side out」

「エヴァ side」

明日は私の誕生日で、城の中に居るメイド達は明日の為の準備に忙しかった。

明日の誕生日を楽しみながら、ベッドに入り寝ていたら、急に体が熱くなったのを感じたので起きてみると、私の部屋に変な男が居て、なにやら歓喜していた。

「やった！俺は実験は成功だ！！」

「ねえ、私の体に何をしたの！？」

「キミはねえ、もう人間じゃないんだよ！ 人の血を啜り、永遠に生きる“吸血姫”になったのさ！！」

「……………え？」

私は“人”じゃない？

地面をみてみると、先程まで生きていた筈の父と母が首から血を流し、息絶えていた。

私は自分が何をしたのか、分からなかったが、この男を殺してやりたいという気持ちはあった。

男は背を向けながら歓喜していた……………

地面にあったナイフをそつと持ち上げて、その男の背中を刺した。

「……………！？　があ！！」

男は倒れた後、私は城を出て、ただ、ひたすら走った。

その時、森の中から煙が上がっていたので、そこに向かってみると、一人の若い（？）男が焼き魚を食べていた。

こっそりと移動しようとしたが、その時に不意に物音を出してしまい、その男が近づいて来た後、お腹から「ぐぐぐ」という音を出してしまった。

そしたら、男の人が新しく魚を採ってきて、焼いて私に渡してくれた。

「アツいから、気をつけて食べるんだ。あと骨にも気をつけてな」

「……………ありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

この人は見知らぬ相手なのに、ここまで優しいのが分からなかったが、今は食べることに集中した。
お腹がいっぱいになったので名乗ることにした。

「食べさせて有難うございます。私はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルと言います。そして……………」

「俺の名は蒼騎 真紅狼だ。言いたくなかったら言わなくてもいいぞ？」

「……………そして、私は吸血姫です」

あの男が言っていたことを言ってみた。

私も“吸血姫”がなんなのか位は本で知っていた。
死ぬこと無く、人の生き血を啜る、化物

「この人もどうせ、私を恐れるんだろう」と思っていたんだが、反応は違った。

「へえ〜、この時代にも吸血姫っているんだ」

「……………へ？」

「ん？ どうしたんだ？」

「え、えと、私、吸血姫ですよ？ 人間じゃないんですよ？ 怖くないんですか！？」

「いや、俺の方が結構化物だと思うぞ？」

「……………はい？」

「俺、不老不死だし。鬼だしなあ」

「えと、失礼ですけど何歳ですか？」

「今年で445歳」

「…………ポカーン（。。）」

私は年齢を聞いて唖然としてしまった。

4…………445歳、凄い年だ。

「まあ、俺の年はどうでもいいとして、エヴァはどうしたいんだ？」

「え？」

「吸血姫なんだろ？ 一箇所に留まることは出来ないし、バレたら人間達に何されるか分からない。…………どうする？」

「……………」

真紅狼さんの提示は私の未来を示していた。

「それに吸血姫とバレたら、エヴァを討伐するという輩も出てくるだろう」

「…………真紅狼さんについていきます」

「俺についてくるのか？」

「はい。真紅狼さんと一緒に居たいんです。…………ダメですか？」

返答が不安でしようがないが本音をぶつけてみた。

「それなりにキツイことになるが、それでもか？」
「はい」

「分かった。よろしくな、エヴァ。あと俺の事は、真紅狼と呼び捨てでいいぞ」

「ありがとう！ 真紅狼！！ あ、あとね、恥ずかしいんだけど……」

「……」

「どうした、改まって？」

「周りに人が居ないときや二人っきりの時は私の事を、“エヴァ”じゃなくて“キティ”って呼んで欲しいの／＼／＼」

「ん、分かった、キティ。………これでいいか？」

「うん／＼／」

「そろそろ、寝るか。寒いから、俺のコートを着て寝な。キティ」

「真紅狼が風邪ひくから、一緒に寝よ」

「別に俺はいいんだが………」

「………お願い、一緒に寝て」

「………「バサッ」」

真紅狼は、手招きしたので私はその中に入り、二人で一緒に寝た。

暖かい。

くエヴァ side outく

さて、キティに生き残る術でも教え込まないとなあ。

真紅狼と吸血姫（後書き）

ということでエヴァが仲間と言うより、家族になりました（？）
まだ、真紅狼にとってはエヴァの事を“恋人”とかじゃなくて、
妹”みたいな存在としてみていますので、ご注意ください。

つか、エヴァのキャラブレイクしてるような気がする。

次回は、初戦闘だー！！
人がいっぱい死にます。

真夜中の戦闘

（真紅狼 side）

キティと旅を共にしてからは、魔法を覚えるようにさせた。

俺はこの世界の“魔法”が使えないけど、FFの魔法は使えるのでそちらを覚えてもらった。

覚えてもらったんだが、キティの要領の良さが凄まじく泣きそうだ。もうすでに、『フレア』まで覚えているんだぜ？

マジで、あり得ねえって。

……………これは、『暗黒魔法』を覚えさせてもいいんじゃないかな。相性よさそうだし。

「あ、真紅狼！ 私、『アルテマ』まで撃つ事が出来るようになったよー！」

「もうそこまでいったのか……………」

「ねえ、真紅狼……………“いつもの”やって？」

「ん？ ああ、ほい（ナデナデ）」

「……………」

“いつもの”とは昔、魔法が撃てるようになったときに頭を撫でてやったのが、気にいったらしく、それ以降出来る度にやってあげている。

でも、撫でてあげた後のキティの笑顔が可愛いからこっちも好きでやってんだけどね。

「キティ」

「なに、真紅狼？」

「……『暗黒魔法』に興味はないか？」

「『暗黒……魔法』？」

「簡単に言えば、闇の眷属が使えるような魔法の一つだ」

「ということは、基本属性は“闇”なの？」

「そうだ。あとは魔法によって変わるな」

「私、覚えてみたい！」

「じゃあ、教えよう。でも、今日はここまでにして、もう寝ようか」
「うん。いっぱい覚えて、いっぱい動いたから疲れたよ」

宿……というより、無人の小屋があつたのでそこに泊ることにした。

その後ろにある岩の隙間からお湯が出ていたので、碎いて掘ったらお湯が出て来たんだ。
だから、温泉を創ってあげた。

風呂シーンは各々、“心の眼”で見てください。

風呂に入った後、キティはすぐさま寝てしまったので毛布を掛けてあげた。

羊の毛で作られた毛布を何枚か、近くの村で譲ってもらった。
その後、そつと抜け出した。

小屋の周りには、『マデイン』と『カブトレパス』を召喚して、護らせた。

「さて、そこに居る集団はなんか用かな？」

小屋から離れた丘でたった俺は、下で首に十字架を下げている集団に言い放った。

＼真紅狼 side out＼

＼聖騎士 side＼

私達は今、ある少女を追っていた。

その少女はなんでも“吸血姫”らしく、男を従えているらしい。

そこで教会は私に討伐任務を与えた。

部下や武装神父など総勢50名を連れて、出発した。

そして、その二人組を見たという目撃情報を聞いて、小屋の近く来た時、丘の上から若い男が出てきた。

「さて、そこに居る集団はなんか用かな？」

「私達は、教会から派遣された聖騎士と武装神父です！ その先に居る少女を渡して頂きたい！！」

「…………理由を聞きたい」

「理由は、少女が“吸血姫”だからです！！ あなたも救われます

！！」

「“救われる”か…………」

「そうです！ 神は貴方をきつと許してくださる！ だから、さあ！！」

「…………くく、ハハハ、アハハハハハ！！！」

「なにがおかしいんですか？！」

「お前、まさか俺が少女に操られていると思ったか？ バカじゃねえの？ 悪いが断らせてもらうぜ」

「くっ…………、なら仕方がない。貴方には死んでもらいます」
「…………やってみろ」
「行くぞ！！」…「ブシャアアアアアアア！！」…………え？」

気が付いたら、半分の武装神父と部下たちが首を吹き飛ばされて死んでいた。

「え？　へ？　ええ？？」

私は状況に追い付くことが出来なかった。

その間にさらに5人の首が吹き飛んで、血が吹き出ていた。
男は動いていないのに、次々と部下たちが死んでいた。

気が付くと既に私一人だけになっており、鎧は部下の血で汚れ、血の海が出来ていた。

そして、彼は丘から下りてこっちにゆっくり近づいてきた。

「くそがあああああああ！！！！」

私はやぶれかぶれになりながら、剣を振るったが、いとも簡単に避けられて、首を掴まれ……………炎が私の体を焼いた。

（聖騎士 side out）

（真紅狼 side）

「吸血姫^{キティ}を渡せ」と言ってきたので断ったら、思い通りに挑んでき

男は悲鳴を上げながら、草原に転がっていった。

「オイ、逃げるなよ。お前にはまだ役目があるんだよ」

「や……役……目だと……？」

「そ、役目。「俺達を追ったらこうなりますよ」っていう体を張った警告をやってもらわないとね」

そういうと必死に逃げだそうとしていたが、俺は容赦なくある魔法を放った。

メルtdown！！

ボオ
アアアアアアアアアアアア！！！！

「ギヤアアアアああA A A A A A ! ! !」

黒炎が辺り一帯を燃やしつくし、あの男の体の一部の肉体が溶けていた。

しばらく燃え続け、鎮火した後は男だった者の片腕が残ったり、武装神父や部下たちの死体が残しておいた。

「俺も寝よ」

その後、そうつと帰り、キティに寄り添って寝た。

（真紅狼 side out）

俺はあの後、『紅蓮の殲滅鬼』と言われるようになった。

真夜中の戦闘（後書き）

様、感想有難うございます。

ご意見にもあつたんですが、“造物主”については、ちょっとしたオリジナル設定になりますのでご注意ください。

次回は“断罪者”真紅狼verが出ます。

考えていただいた、裂きやん様、ケルベルス様、読むのはいいけど様、ご意見有難うございました！！

再び『魔法世界』へ・・・

＼エヴァ side＼

どうも、こんにちわ、エヴァンジェリンです。

真紅狼と旅を続けてから、もう5年が経とうとしています。

最初は“吸血姫”の特徴が嫌という程出てきました。

定期的に“血”を吸わないといけなかったのを真紅狼が受け持ってくれた時は最初は嫌だったけど、真紅狼が「吸わないで、キティが発狂する方がもつと嫌だ」と言ってきたので甘えることにしました。それから一年が経つと吸わなくても過ごしていけるようになり、だいたいこの体にも慣れてきました。

あとは、真紅狼の秘密も知りました。

真紅狼は元々“転生者”みたいだったらしく、別の世界で暮らしていたところを神様に殺されたらしいんだって。

「それなりの“理由”があつたらしく、しょうがなかった」っていう風に言ってた。

さらに、ここ最近は教会の人達の追撃がなく、自由な暮らしが出来ます。

今は、真紅狼の家に向かっています。

なんでも、極東にあるそうです。

「まあ、ここだな」

「この土地全部が真紅狼なの?!」

「貰ったんだがな……………」

「お家、大きいね!!」

真紅狼の家はとても大きかった。

目の前に見える、お屋敷が客用だと知った時は、空いた口が塞がらなかった。

そして、しばらくの間だいたい300年ぐらいそこに住み、その間私もだいぶ強くなった。

300年後……

真紅狼に教わった『暗黒魔法』も全て覚えたとし、魔法は一部の魔法のみ全部覚えた。

ん？ 口調が変わってる？

300年も経てば、変わるものだ。

最近、真紅狼が「『魔法世界』^{△ンドゥス・マギクス}に行こうかねえ……………」と呟いていた。

『魔法世界』^{△ンドゥス・マギクス}か……………、話では何度か聞いていたが、どんなものか興味はあるな。

そうだ、聞いてくれ。私は真紅狼に教えてもらった『暗黒魔法』^{ティオーネ}を“兵装”として、取り込んで戦う術式……………『闇の魔法』^{マギア エレベア}を創ったぞ。

真紅狼にも使って欲しかったが、まあ、『使えない』ので諦めた。

「真紅狼」

「なんだ、キティ？」

「あまりその名で呼ばないで欲しいんだが、まあいいか。話はいきなり変わるんだがいいか？」

「おう」

^{△ンドゥス・マギクス}

「『魔法世界』^{△ンドゥス・マギクス}に行ってみたいんだが……………」

「『魔法世界』^{△ンドゥス・マギクス}に？」

「そうだ」

「奇遇だな、俺も行こうか迷っていたんだが、キティが行きたいなら行くしかないな。ということで準備しろ」
「分かった」

そうして、私達は『魔法世界』△ンドウス・マギクスに行くこととなった。
くエヴァ side outく

く真紅狼 sideく
キティが「『魔法世界』△ンドウス・マギクスに行きたい」と言ってきたので、行く準備をした。

「準備はいいか？」

「ああ、いいぞ」

「さてと、来い！ 『ケーツハリー』！！」

ケーツハリーを呼び出し、飛び乗った。

そして、飛び乗る前に例の如く、封印を張り直しておいた。

今回はグレートブリテンから行く方法にした。

麻帆等からでも“ゲート”はあるんだが、アレはあちら側から開いたので行けたがこちらからではまだ無理だ。

そして、向かう最中に……

「あ、キティ。向こうの世界に行ったら、無闇に力は振るわない事な？ めんどくさいことになるから」

「何故だ？ そこの連中に負ける筈がないのに……………」

「向こうの世界では“悪者”ってのは若い者にとっては自分の名を上げる為に良い餌だからな。そこに俺達が行けば……………どうなるか、分かるな？」

「なるほど……………。私達が行けば、それなりの悪名があるからすぐに喰いついてくると？」

「そういうことだ。出来るだけ相手を威圧させていくような戦い方法を身につけてくれ。俺もそうするからさ」

「分かった」

「さて、着いたな。あとは“ゲート”まで歩くだけか……………ローブを被つとけよ？」

「そういう真紅狼も仮面付けておくんだな」

「ハイハイ」

俺達はそれなりに『悪名』が高い為か、行く先々で戦闘が起きたりしてる。

その為か、変装することで無用な戦闘を避けていた。 がバレるものはやはりバレる。

しかも、その俺達の異名の名が『魔法世界』△ンドゥス・マギクスに流れている可能性がある。なので、注意を払っていた。

とまあ、“ゲート”についた時にはちょうどいいタイミングで転移し、だいぶ新しくなったメガロメセンブリナに着いた。見てみた感想は、なんとというか将来の上海みたいだな。

「さて、エヴァ。こちらの拠点に向かうか」

「そんなところあるのか？ 紅赤主（変装時の呼び名）」

「あるぜ、普通の人じゃ入れねえ場所にな」

その後、メガロを出た俺達は少し離れた場所で再びケーツハリーを呼び、ケルベラス大森林に向かった。

ちようど、城の真上だったのでそこで降りて、ケーツハリーは魔石に戻った。

「ここが俺の城だ」

「ここが真紅狼の城………」

「壁とかは自然が作ったものだから、おいそれとは壊されないし、この奥まで来るのに他の猛獣を避けなきゃならないから、まず人は来ないと思うぞ？　来るとしたら、俺達を討伐しに来たアホ共ぐら
いか………」

そんなことを言っていたら………

『その中に居る、“紅蓮の殲滅鬼”に“闇の福音”出て来い！！』

なんてことを言われた。

「真紅狼、早速来たようだぞ？」

「これが“フラグ”ってやつか………チクショウorz」

「真紅狼はなにでいく？」

「俺は……この“クリムゾン 真紅の執行者”アドミニスターで行くか」

右腰のホルスターから銃身は銀でさらに牙を剥いた狼の彫刻が彫つてあり、色は真紅、眼は水晶になっている。眼の水晶は撃つ弾丸によって色が変わり、彫刻も変わる。実弾時は口が閉じた狼で眼は黒になり、魔力弾時は牙を剥いた狼で眼は蒼になる。

銃のタイプはリボルバー仕様でこれも実弾と魔力弾ではリロードの仕方が変わる。

実弾時は、空の薬莢を抜くだけで自動的にセットされる。

魔力弾時は、薬莢を抜かなくても、空になった薬莢に撃ちたい魔法を込めれば良いので連射能力がとても高い。

「私は、『暗黒魔法』を放つか」

「威力抑えるよ？」

「分かっている、課題の一つだからな」

俺が教えた魔法は全て詠唱が無い。

その為か、常に全力で放てる状態だとすぐに気を失ってしまうので少ない魔力で放てるように課題を出した。

そして、今も課題に取り組んでいる最中だ。

『さっさと出て来い！ 出てこないと大規模魔法を放つぞ！？』

お客さんが痺れを切らしかけているので向かう事にした。

「少し黙れ、バカ」

「全くだ」

「へへっ、俺達に恐れを成して、震えていたと思ったぜ!」

と、まあバカが吠えてます。

敵はだいたい2、30人で雰囲気からして『自分たちは強い!』と思っ込んでいるバカ共だった。

「やる気しねえ……………が、何度も来られても迷惑だから、追い払うか」

「準備はいいか、紅赤主?」

「いつでも」

「では……………『ヘルウィンド』!」

「!?! 全員避ける!」

前に居た数人はかろうじて避けることが出来たが、武器が石化していた。

その後の後ろに居た数十名は避けることに失敗し、中途半端な魔法障壁を張っていたので、一瞬で石化するよりも悲惨なことになった。右または左半分だけ石化された者、下半身が石化した者、首だけ石化した者と酷い状態だった。

エヴァはそのまま『サンダガ』や『ブリザガ』を片っ端から放っていた。

俺もやらないと……………

ふむ、『カオスドライブ』装填^{セリト}！！

ドン！ ドン！ ドオン！

三発の魔力弾が生き残った者達を追撃する。

「そんな弾、簡単に避けてやる！」

男たちは避けて、こちらに向かってきていたが男たちは知らなかった……………。

この銃から放たれる弾丸は全て“対象に当たるまでどこまでも追いかける”ことを。

事実、後ろから向こう側にいつてしまった弾が戻ってきていた。そして

ダアーン……………

バリバリバリイイイイ！！

「「ガアアアアアアアアアア！！！！？」」

「何故、撃たれたか、分からない」って顔だな？」

「……………え……………あ……………あ……………」

「コイツから放たれる弾は全て追撃性能があつてな、どこまで逃げ

ようが対象に当たらない限り、止まらないんだよ。まあ、弾自体を消せば、逃げられはするがな」

「真紅狼、コイツ等はどうするんだ？」

コイツ等は先程『カオスドライブ』をふんだんに浴びている為、体が麻痺していた。

「ちょっと離れた場所に放り投げとけ。痺れがとれば、逃げるこ
とが出来るし。出来なかったらこの森にうろついてる猛獣たちに喰
われるだけさ」

聞こえるように話すと、男たちは震えだしたが俺はそんなことは知
らない。

クリムゾン アドミニスター

“真紅の執行者”をホルスターに戻して、まだ生き残っている15
人を出口に近い森の方に放り投げた。

「さて、バカ共一掃できたし。休むか」

「真紅狼」

俺の名を呼び、「じー」とこちらを見ていた。
ああ、アレね。

「ん……………（ナデナデ）」

「~~~~~」

「……………寝ますか」
「うむ！」

そうして、△ンドゥス・マギクス『魔法世界』の初日が終わった。
く真紅狼 side outく

どうやら生き残った者が居たらしく、ケルベラス大森林は別名“鬼の棲む森”と魔法世界に広まったらしい。

再び『魔法世界』へ・・・（後書き）

そろそろ、魔法大戦にはいろうかな〜と思ってます。

そして、エヴァは『マギア エレベア闇の魔法』を習得。

これは二つの“アルマティオーネ術式兵装”があります。

一つは“ネギマ”の術式兵装。もう一つは“暗黒魔法”の術式兵装です。

基本的に性能とかは同じですが、追加効果が違うだけです。

そして銃の名前が決まりました。

考えてくれた裂きやん様、ケルベルス様、感謝します！

名は“クリムゾン アドミニスター真紅の執行者”です。

お次に性能は読むのはいいけど様が考えてくれました。
少しばかり、いじりましたがほぼ一緒です。

驚愕の新事実・・・

「真紅狼 side」

うい、真紅狼だ。

最近寝ていると、キティが潜り込んでいて対処に困ってる………と
いうのか？

キティ曰く、「真紅狼は暖かいから、一緒に寝たい」とのことだ。
先程、上で「困ってる」と言ったが、俺も寝ている間にキティを抱
き寄せて“抱き枕”にしているのでお相子だと思ってしまう。

そして、最近は噂が広まったせいかバカ共の対処が一層めんどくさ
くなった。

さらに、遠い地から魔族やら亜人どもが「俺達の主になってくれ！」
と頼み込んでくるから、丁重におかえりしてもらってる。
つか、魔族が人語喋ってんのにびっくりした。

コンコン・・・

畜生、またか。

ゆっくりとベッドを抜け出し、入口に向かった。

「はいはい。どちらさまで？」

「やっぱり、真紅狼さんですか！ 帰ってきてたんですねー！」

「えーと、どちら様で？」

そこには爽やかそうな青年が立っていた。

「あ、この姿じゃ分らないですよ、ちょっと外に出てください」
「ん、ああ。……この姿？」

そう言って二人は外に出た後、青年は姿が変わっていた。
なんと、竜だった。

「お前、俺を乗せてくれたあの若い竜か！？」

「……グルウ」

「え？　なんで言葉喋ってんの？　つか、人の姿に成れんの！？」

「だって、あれから500年経ってるんですよ？　ふとしたきっかけで出来ました」

「え、マジ？」

「マジです。ちなみにこの森に居たあの当時の猛獣たち、今皆違う種族と結婚してます」

「ハア！？」

本日驚愕二回目。

「え、じゃあ、何？　俺以外、全員妻帯者？」

「ええ、居ないといったら新しく入って来た若いヤツラぐらいですかね」

「え、ちよつとさあ、洒落にならんがな！」

「真紅狼さんも結婚したらどうですか？」

「やかましい！ 俺が今なんて言われてるか知ってんだろ！？」

「ええ」

「知つてて言つたのか？！ ああ！？」

「はい（笑）」

「リア充、爆発しろ」

「まあ、今回は挨拶とかだつたのでこれで失礼しますね〜」

「二度とくんな」

「だが断る！」

ボタンッ！

城の扉を思いっきり叩きつけた。

俺以外全員結婚してんのかよ。

なんだ、この虚しさは。

気分を紛らせる為にキティを抱き枕にして二度寝をしよう。

（真紅狼 side out）

（エヴァ side）

目覚めてみると、真紅狼と密着した状態で寝ていた。

また、真紅狼は私を抱き枕にしたのか……………

まあいいけどね。

というか、体をぎつちりと抱え込んでいるせいか抜け出せない。

真紅狼の方を向くと顔が目の前にある。

少し動けばキスが出来る程近かった。

……………。

キスぐらい、してもいいよな？
というより、ファーストキスは真紅狼以外は絶対しない。
いや、それよりも今してしまつか。
真紅狼は寝てるし、まともに見ながらやるなんて私には無理だ／／

「（起きるなよ、真紅狼）」

あと1cmつてところで真紅狼は突然眼を覚ました。

「……………」

「何やってんの、キティ？」

「……………キスをしようとしてた」

「それは唇か？ ほっぺとかじゃなくて？」

「……………唇／／／／」

「キティ」

「なんだ、真紅狼？」

「結婚すつか」

「え？ ええ？！」

「いや、だって俺達もう長い間一緒に居るだろ？ 結婚してもいい
ぐらいって言う程共にしてるし」

確かに……………。

真紅狼とはもう305年の付き合いだ。

秘かに私も真紅狼との“結婚”は考えてはいた。
だが、言いだせる機会とそこまでの信念が無かった。
だけど、真紅狼から言ってきた。

「真紅狼はいいのか？ 私でも？」

「それはこっちのセリフだ。といっても切りだした本人が言うのも
変か」

「全くだな。……………末長くよろしくお願いします、真紅狼／／
／／」

「こちらこそよろしく頼む……………我が妻よ」

その言葉を聞いて、胸が熱くなった。

その後は恥ずかしくて言えん／／／

＼エヴァ side out＼

＼真紅狼 side＼

ということ、結婚しましたよ。

名前とかはまたあとで考えることにした。

まあ、夜になって、寝る前にキティが……………

「真紅狼、この世界を見て回りたい」

と上目づかいで見てきた。

アルデマウエボン
ヤバイ、これは最終兵器だ！！！！

「じゃあ、明後日から見て回るか」

と速攻でOKを出した。

その後は二人で一緒に寝た。

いつも通りだと思う奴もいるかもしれないが、言っておくがお互い
“全裸”で寝てるからな？

＼真紅狼 side out＼

寝顔はやっぱり可愛いなあ。

驚愕の新事実・・・（後書き）

また、すっ飛ばしますが許してください。

あと、数話でナギ達登場します。
登場すれば、魔法大戦開始です。

魔法使いの街

「真紅狼 side」

うい、真紅狼だ。

いつも通り、キティとは仲良く二人で寝てるよ。

今日はこの魔法世界を見て回る日なので、いつもよりも早く起きた。いつもなら大体、午前11時ぐらいに起きてるんだが、今日は9時起きた。

「真紅狼！ 早く行こう！！」

「はいはい」

俺はパパッと軽く掃除をした後、城を出た。

そしたら、この前出会ったエイビスが居たので声を掛けた。

「エイビス」

「なんですか……………って、こちらのお嬢さんってもしかして“闇の福音”ですか？」
エヴァンジェリ

「ん？ ああ、良く知ってるな」

「そりゃ、私達、週に二回は街に出かけてますからね。その時に情報をお聞きしたんですよ」

「街まで行ってんのかよ……………」

「で、今日はどうしたんですか？」

「ああ、エヴァが魔法世界を見て回りたいって言うから、ちょっと旅行に行くてる」

「分かりました。ちゃんと城は守っておきますよ」

「悪いな。俺達を討伐しに来た魔法使い共が来たら、たっぷりとお出迎えをしてやれ」

「ええ、それはもちろん。フルコースでお出迎えですよ」

これは……………死んだんじゃなかるうか？

まあ、いいや。

放っておこう。

「じゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

そうして俺達はケルベラス大森林を出て、まずはヘラス帝国に向かった。

＼真紅狼 side out＼

＼エヴァ side＼

今日は待ちに待った、世界旅行の日だった。

だから、私は早く起きて準備した。

そして、まず向かったのが世界で最も大きかった国、ヘラス帝国を目指した。

まだ、この当時はそれほど殺気だってなかった。

この国は基本的に亜人や獣人と言った人間がいない国だった。

連日、お祭り騒ぎで喧しかったよ。

そこから、数十年掛けて他の国々や都市を回り見た。

真紅狼はその行く途中で、龍やら魔獣やらに仲良くなっていたがな。メガロメセンブリナに着いた時には、すでに130年経っていたよ。そして、メガロメセンブリナのホテルに突然、来訪者が来た。

『すみません、こちらは“紅赤主”がいる部屋でしょうか？』

「ああ、どちら様で？」

『メガロメセンブリナの移住担当係の者です』

「まあ、中に入ってくれ」

『失礼します』

「で、要件は？」

「単刀直入にいいますと、貴方様が持っている旧世界の“麻帆良”と言う土地に「魔法使い達の都市」を創りたいんですが、許可を貰いに来ました」

「……別に構わないが、条件がある」

「何でしょうか？」

「一つ、あくまでも“俺の土地の上”に建てるという事を忘れるな？ 俺があそこの土地の所有者だからな。」

「一つ、俺達をメガロ所属にしないこと。俺達は“フリー”の魔法使いだ、どちらも所属はしない。」

最後に、俺達を余計なことに巻き込むなよ？ それさえ守ってくれたら別に建てても構わないぞ」

真紅狼は多分、「飛び火を受けたくないし、帰った後の面倒を背負いたくない」からこの三つを言ったんだろうな。と私は思った。

男は「分かりました」と言って、帰っていった。

その後、メガロには2週間程滞在し、最後にオステイア王国に向かった。

オスティア王国はどうやら天然の魔法で浮いてる土地の上に国があるみたいだった。

私が言うのもアレなんだが、歴史を感じるような古都だった。

ここ、最近南のヘラスと北のメガロの小競り合いが増えていて、小規模な戦争が起きていた。

私達も巻き込まれたが、真紅狼がそいつらに向けて殺気を放って、気絶させて強制的に終息させた。

それ以来、北の連合と南の帝国には“注意人物”と認識されたい。

「真紅狼」

「んー？」

「そろそろ宿を探そう」

「そうだな、そうするか」

「そう言えば、色んな国の食事をしてるけど、やはり真紅狼が育った国の食事が一番だったな」

「エヴァは日本食好きだね」

「だって、美味いからな」

「帰ったら、また創ってやるよ」

「約束だからな？」

「ああ、約束だ」

そうして、宿も無事に見つかり、その日のオスティア観光を私達は終えた。

（エヴァ side out）

そして、俺達が次の日、朝目覚めると、ヘラス帝国が今まで小規模な戦闘が大規模な戦闘に変わり、第一次魔法大戦が始まった。

魔法使いの街（後書き）

すみません、バイトで忙しく、投稿できなかったです。
もう一話、この後上げます。

魔法大戦、勃発（前書き）

さあ、魔法大戦の開幕です。

魔法大戦、勃発

「真紅狼 side」
ドゴオーン！！

目覚めると、いきなり轟音から朝が始まった。
外を見てみると、ヘラス帝国の艦隊が精霊砲をオスティアにぶっ放してた。

「何事？」

「うゝゝん、うるさくてかなわん」

「まったくだ、取り敢えずキティ。着替えような」

「ああ」

俺とキティは着替えた後、部屋を出て、近くの人に状況を聞いた。

「すまないが状況を教えてくれないか？」

「状況もないさ！ 帝国が突然攻めて来たんだよ！！ アンタ達も早く逃げな！！」

ヒュゝゝ、ドシューーン……………

空からなんか降って来た。

つて、鬼神兵かよ。

ん〜、この戦いは俺達には関係はない……………、が！！

ちよっとうるさいので八当たりしてこよう。

そうして、準備をするとキティも俺がしようとする事が分かったらしい。

「真紅狼、やるんだろ？」

「よくお解りで……………」

「私は真紅狼の……………つ……………妻だからな／＼／」

顔を赤くしながら言うキティ、ああもう可愛いなあ。

「取り敢えず、艦隊とかその辺を叩き落とすぞ？」

「分かった」

俺は魔力を足に込めて空中に足場を造り、キティは浮いた後、
『闇魔法』で自身の身体強化を行っていた。

俺は、全身に『剋』を通し、鋼糸を展開した。

「じゃあ、行くぞ！！」

俺とキティはたった二人でヘラス帝国の艦隊に喰いかかった。
（真紅狼 side out）

くエヴァ side

轟音の後、真紅狼は窓の外を見ていた。

多分、ちよつかいを出すな、これは…………

真紅狼は機嫌が悪い時にその原因を作った奴を見つけると、本人は気が付いていないが嗤っているのだ。

その時はたいてい、そいつ等が酷い目に遭うんだがな…………。

それ故か、私はこの後の行動に予測がついたため、準備をした。

「真紅狼、やるんだろ？」

「よくお解りで……………」

そりや分かるものだ。

なんせ私は今…………

「私は真紅狼の……………つ…………妻だからな／＼／」

…………やはり、口に出して言うのは恥ずかしいな。

その後、真紅狼に教わった『暗黒魔法』の一つ、“ダークフレア”を取り込んで、身体強化を図った。

この“ダークフレア”の特徴は“相手の魔法障壁、または物理障壁を突破して直接、本体に攻撃を叩き込むことが出来る”のが主な特徴である。H I T時に爆発が相手を襲うことだった。

これで、艦隊の障壁など関係なく、叩き潰せる。

そして、私達は帝国に喰いかかった。
くエヴァ side outく

く真紅狼 sideく

俺はまず、地上で動いてる鬼神兵二体を相手にした。

キュル……………ピンツ！

鋼糸で編んだ杭を鬼神兵のど真ん中に刺した。

ドスンッ！

「グオオオオオ！？」

鬼神兵は突然の攻撃に悶えながら、刺さってる杭を抜こうとしたので俺は鋼糸で編んだ杭を手で解いた。

天剣技

“ 繰弦曲 跳ね虫 ”

ズババババア……………

手で解かれた鋼糸は鬼神兵の体内から切り裂かれて、バラバラとなった。

「!？」

帝国の艦隊の一つがこの現象を見て、驚愕した。

鬼神兵は俺を掴みかかって来たが、動きが鈍い為、いとも簡単に避けることが出来た。

その後、もう一匹の鬼神兵の周りに鋼糸を巻き付け、そのまま絞め潰した。

グシャ・・・

先程まで地上を制圧していた鬼神兵が、たった一人の男の攻撃によりひっくり返された帝国は艦隊を真紅狼の方に向けた。
その時、横っ腹から強烈な爆音と衝撃が襲った。

バゴオン!!

グシャ……………バキベキ!!

ボオン!!

キティが横蹴りを放ったのが分かった。

「おーおー、暴れてんなあ」

キティはすでに巡洋艦を一機、駆逐艦を二機潰していた。だが、後ろにはまだ巡洋艦が五、六機あったのでめんどくさくなってきたので、召喚獣を出すことにした。

「エヴァ、戻って来い！！」

そう叫ぶと、空中で敵の攻撃を回避していたキティは俺の元まで戻って来た。

「紅赤主、どうかしたのか？」

「後ろにまだあんなにいるから、一気に潰すよ。あと、凄いモン魅せてやる」

「ほう、それは楽しみだ」

「俺より前に出るなよ？」

「うむ」

さて、じゃあ、やりますか！！

『戦場の戦神よ！ 今ここに来れ！！ 汝、我に仇なす者たちを劔にて両断せよ！！ 来い！ 戦神 オーディン！！』

その後、帝国艦隊の前に急に崖が出来た。
その時、突然馬の鳴き声が聞こえた。

ヒヒイン！！

帝国艦隊は動きを止め、第三者の方に向いていた。

そこには鬼神兵と同等の大きさを持つ、騎士がいた。

その騎士が、自身の左籠手から炎を吹き出しながら、巨大な劔を取
だし掲げた。

馬は「行くぞ！」と言わんばかりに足を上げ、そして、崖を下った。

ガラガラガラ・・・・・・
ドンッ！

スレイプニールは主を乗せて、敵の元まで駆ける。
そして、オーデインは帝国艦隊をすり抜ける瞬間

一閃！！

“ 斬

鉄

劔”
！！

オーデインはすでに消えており、崖も消えていた。
帝国艦隊はしばらくしてから、全て真つ二つに斬られて瓦解した。

「おおー！！ カッコいいな！！」

「だろお？」

「私も呼べるのか！？」

「呼べるんじゃないか？ 今度やってみるか？」

「ああ！」

二人が空中で喋っていた間、下の王国では戦闘に勝ったことを喜び、この戦いの殊勲者である二人を探し始めた。
だが探しても見つからず、噂話が国中を収まることなく、世界に広まった。

こうして、帝国はオステイア攻略に失敗した。

＼真紅狼 side out＼

あの後、俺達は姿を変えていたのでバレることなく、静かに過ごせた。
だって、遠くからで姿がばやけていたしね。

魔法大戦、勃発（後書き）

召喚獣エフェクトはFFCCでお願いします。

召喚獣の詠唱は出来る限り、創ります。

もし「こんなのを考えた」ということがありましたら、感想にてお送りください。

お待ちしております！

真紅狼と王女と姫巫女と組織

「真紅狼 side」

最初の戦いからもう95年も経ってるよ。

それなのに戦争は終わらないよ、よくやるね本当に……
お互い、いい年ですよ。

俺は975歳、キティは510歳。

あの戦いの後、ちよくちよくと帝国は攻めて来てるが、前の戦いで警戒心を持ったらしく、艦隊では攻めてこなくなった。
むしろ、魔法攻撃が主力になって来た。

あの時はうるさかったので手を出したが、ここ最近は手を出してはいない。

というより、手を出す前に魔法攻撃がなんか勝手に消滅してる。
周りが大森林で囲まれた湖の塔に当たると、必ず消える……。

「……真紅狼、あそこ何かあるんじゃないか？」

「……行ってみるか」

『バニシュ』

自身を透明にして、背景と同化することが出来る魔法だ。
潜入とかに超便利。

ただ、物音とかは消えない為、完璧とはいえないが……まあ、問題は無いだろ。

バレたら、『サイレス』掛けちまえばいい。

と言っわけで、塔の最上階まで来たんだが………女の子が居た。

女の子が居るのにはなんら問題は無いんだが、ただ 異様だった。手足を鎖で繋がれ、下には何かの魔方陣が書かれており、最悪なのは自我が微かにしかない。

「・・・・・・・・・・ダ・・・・レ・・・・？」

「！？ 真紅狼、魔法が解けてるぞ？！」

「え、ウソ！？」

自分の体を見ると、透明になっていた筈の自分の体が見えている。

「コイツ、まさか完全魔法無効化か！？」

「ということは、この子が今オスティアで噂されている“黄昏の姫巫女”か！！」

この子がねえ、『ライブラ』でこの子を見ると、なんか色々薬を飲まされている。

認識阻害とか年を取らないように、成長を遅らせたりする薬とかが検出された。

「・・・・アナ・・・・タ・タチ・・・・ハ・・・・ダレ？」

俺の名が覚えてくれるかどうかは怪しいが、一応名乗ることにした。

「俺の名は蒼騎 真紅狼だ」

「私の名はエヴァジェリン・A・K・M・蒼騎だ」

「キミの名は？」

「・・・ア・・・ス・・・・・・ナ」

下から、足音が聞こえてくる……………。

それも結構な数だ。

二、三人なら『サイレス』で対応できるんだが、数十人なら去った方が無難だな、これは……………。

「アスナか、覚えてぞ。いずれまた助けに来てやる。それまで俺達の名を忘れるなよ？」

「・・・・・・（コクリ）」

「よし！ エヴァ、逃げるぞ」

「…………… ああ」

俺は鋼糸を適当な建造物に巻き付けて、キティを抱え込んで逃げ、途中で『バニシュ』を掛け直した。

「ここまで来れば大丈夫だろ」

「…………… いいのか、真紅狼？」

「何をだ？」

「本名を教えてしまつて……………」

「キティだって、教えてただろ？」

「真紅狼が言つたなら、私も言わなきゃマズイだろう？」

「さて、帝国が陸から攻めて来れないようにある噂を流すか」

「……………噂？」

「ヘラスとオスティアの間には砂漠があつたろ？ そこにはアイツが居るからな……………。商人を伝つて噂が広まると思つぞ？」

「ああ、アイツか」

砂漠に奴が居たんだよ。

うん、アレはみんなビックリと思う。

＼真紅狼 side out＼

＼???? side＼

今、オスティアとヘラスの間を通る者たちの間ではある噂が流されている。

その噂とはこうだった。

旅の商人の間で、ひとつの噂があつた……

「地より出ずる水晶には、近づくな」

しかし、「それは強欲を戒める教訓のようなもの」だとある者は言つた……

誰もがそう思っていた。

だが、それを無視した商人たちは、その水晶を手に入れようと砂漠に出たまま帰ってこなかった・・・

唯一、生き残った者が途絶えながら遺言を残した・・・

「水晶を尻尾にした巨大な蠍が出た」

それを聞いたある者はこう名付けた。

アカラ・ヴァシム
“尾晶蠍”と。

という噂が流れておるのじゃ。

本来なら、このような魔獣（？）は討伐するべきだが、こやつが砂漠に居る為かヘラスは陸から攻められないのもまた事実であり、頭

を悩ましておる。

「アリカ〜、お忍びでお買い物に行きましよう?」

「またですか、姉上?」

姉上のアルマは妾が難しい顔をしてると、気を紛らすことをしてくれるが多かった。

姉上なりに気遣ってくれているのが嬉しかった。

「だけど、たまにはいいですね」

「じゃ、行きましようか」

「うむ」

そうして、上手く衛兵の目を盗んで外に出た。

しばらくはそれなりに楽しめていたが、途中から後ろに怪しい奴等が付いてきたのが分かり、姉上を先に帰らせた後、私は一人路地裏に入った。

「お主たち、何者じゃ?」

「……答えるつもりは無い。貴女はウェスペルティア王国、次期継承者第二王女のアリカ・アナルキア・エンテオフュシアか?」

「そうじゃ……」

「悪いが貴方には死んでいただく」

妾はその言葉を聞いた時、後ろに下がろうとしたが……すでに敵が回り込んでいた。

「では……………」

ヒュ~~~~、ドガアアアアン!!!

リーダーらしき男が手を上に上げると周りの者達が襲いかかって来た……………と思つたら、何者かに燃やされながら吹き飛ばされていた。

「……………必定!!!」

「な、何者だ?!」

「……………」

乱入して来た男は答えることなく、リーダーらしき男の方を見ていた。

「いや、まさか! 貴様は“紅蓮の殲滅鬼”!?」

「……………」

“紅蓮の殲滅鬼”と言えば、一時の間、賞金稼ぎの間では噂されていた男ではなかったのう?

確か……………もう一人の賞金首と共にしていると……………。

「……………（ガシッ!）」
「ぐっ! 離せ、貴様!」
「……………貴様等は何者だ?」
「誰が……………ぐう!? ……………答えるか!」
「……………答えなければ、先程の様になるが?」
「『完全なる世界』だ」
「……………組織名だな?」
「そうだ。言っただから離せ!」
「……………（ブンッ!）」

“紅蓮の殲滅鬼”は男を放り投げ、妾を一通り見た後去ろうとした。
なので、疑問をぶつけることにした。

「何故、賞金首の貴様が妾を助けた?」
「……………」
「黙っていないで答えよ!」
「……………きまぐれだ」
「そうか……………。助けてくれたことに感謝する」
「……………王女よ、護衛も付けずに勝手に出歩かないことだ」
「忠告感謝する」
「……………フン」

そう一瞥し、とんでもない跳躍力で去っていった。
“紅蓮の殲滅鬼”と言われて割には、何故かはわからんが優しい感

じじゃったな。

「姉上が心配しておるし、早く帰らなければ」

そうして、姿を隠しながら、城に戻った。

＼アリカside out＼

＼真紅狼side＼

噂を広めた後、オスティアの屋根の上で休憩しながら、周りを見ていたらある二人に目が付いた。

なんと、この国の王女である、アルマ第一王女とアリカ第二王女が姿を変えて街に護衛も付けず出ていた。

最初はただのお忍びかと思っていたので気にしなかった。

「真紅狼、何を見ているんだ？」

「いや、この国の王女たちがお忍びで護衛も付けずに街に出ているのを見て、度胸があるな。と思ってるね」

「どの辺だ？」

「あそこで賑わっているところ」

そう言っ指を指した。

「よく見えるな……私には若干ぼやけてしか見えない。……おい、真紅狼」

「……ああ、集団で付けてる奴らが居るな」

「お、二手に分かれたな」

「集団は、路地裏に行った方を追いかけたな」

「どうするんだ、真紅狼？」

キティは答えが分かりながら、意地悪く聞いてくる。

「いいか、キティ。これは居心地が悪くなるだけだからな！？ 勘違いするなよ！？」

「はいはい、分かってるよ」

「旦那モ素直ジャネーナ」

「うるせえよ！！」

とキティの隣で声を出してきたのはチャチャゼロである。

このオスティアに来る前にケルベラス大森林の隠れ家で創ってたらしく、キティの従者でもあるらしい。

魔法は使えないが、暇な時に俺と戦闘していた為か剣術とかその他諸々が色々強化されてる。

ちなみに俺もちよつとした特殊な武装を作成した。

特定の敵のみにはとてつもない効果を発揮する武器だよ。

しかし、そろそろ俺も契約しようかね。

もちろん、キティとだが……………。

それはともかく
閑話休題

ちょうど、アリカ王女の後ろに居るローブやら黒い服の男たちが
けて軋間のラストアークをぶっ放した。

「断獄

必定！！！！！

」

当たった者達の血が飛び出たが、そんなモノ俺の炎で全て蒸発した。
その後、生き残った男から情報を聞き出した。

『コズモ エンテレケイア
完全なる世界』ね

また一癖も二癖もありそうな組織名だな。

後は掴まれている癖にやたらと調子に乗ってるバカを思いっきり放
り投げ、帰ろうとしたら、案の定アリカ王女が問いただしてきた。

「何故、賞金首の貴様が妾を助けた？」

見てました。なんて言ったら深く聞かれそうだから、まあ…………

「…………きまぐれだ」

こう答えておけば、深くは聞かれないだろう。

「じゃあ、失礼する。それでも賞金首なんだ、長居はしたくない。それと護衛も付けず勝手に街に出るかないことだ」
「忠告感謝する」

忠告で言っ たつもりはないんだがな……………

バキンッ！

そうして、再びキティの元に帰った。

「ただいまー」
「おお、おかえり」
「旦那モ ヨクヤルナ」
「さいですか……………。帰るか」
「そうだな」

今日の出来事が遭ってから、俺の賞金首はさらに駆けあがり、300万ドラクマに跳ね上がった。

それと、オスティアの国中にまた噂が流れた。
なんでも“アリカ王女には想い人がいる”なんて噂らしい。
動きにくくなつたなあ。

（真紅狼 side out）

その二週間後、第二回オスティア攻略が行われた。

真紅狼と王女と姫巫女と組織（後書き）

次回はナギ達が登場！……………多分。

ラカンとかゼクトとかガトウ達の出会いはカットです。
申し訳ないです。

ちなみにチャチャゼロはまだ100歳ぐらいです。

艦隊殺し

「真紅狼 side」

「うい、真紅狼だ。」

「今俺はちよつとばかり、戦闘後だった。」

「そして、今はまたオスティアがヘラスによって攻められています。」

「あんの戦闘バカ国はよお……………」

「で、現在、アスナの元に移動中……………」

「あまりアイツを苦しめたくないしな。」

「……………真紅狼、アスナの周りに男が三人居るぞ」

「よし、軽くブチのめせ！」

「分かった」

「エヴァが塔に向かい、俺は塔に向かって鬼神兵五体を相手に大暴れを開始した。」

「最初の一体は鋼系でなんなく裁断することは出来たが、次第にめんどくさくなったのでアレを放つことにした。」

「アスナのいる塔まで下がることにした。」

「その時、右側から赤毛の少年と白髪の少年、大太刀を持った青年、ローブ姿の男がこちらを向かって飛んで来ていた。」

「よう、アスナ。俺の事覚えてるか？」

「シ…………ン…………クロ…………ウ？」

「おお！覚えてたか。よかったよかった」

「ぐ…………あ…………。その子に何をする気だ!？」

「何もしねえよ？　ただ、能力をもう使わせないだけかな？」

「その子がいないと鬼神兵たちや艦隊の攻撃を防げないぞ？　どうやって防ぐ気だー!!」

「今から、その鬼神兵をブツ飛ばすんだよ、良く見てろ！　よっしゃ！　ギアを上げるかアー!!」

「あー、それが。真紅狼」

「ああ、アレですよ？」

エヴァは分かったようです。

長い間一緒に居れば、そりゃ分かるか。

塔の少し前で浮かび、『マジックガンナー』の準備を始めた。魔法は………アルテマでいいや。

「さて

スヴィア!!」

まず、右手で一発放った。

直線状に居た鬼神兵の数体は直撃した瞬間、あちこちで爆発し始めた。

ズバァアァン!!

ポボポォン!!

「ブレイク!!」

次に左手で二発目を放ち、さらに追撃を掛けていく。
追撃を食らった鬼神兵たちの体はすでにボロボロとなり……………

「スライダー……………!!!」

最後の止めである足から放つ攻撃を、通常なら縦だが左から右に扇を描くように薙ぎ払った。

ゴオオ……

ドオオオオオオン!!!!!!

ゴゴゴゴゴゴゴ………!!!!!!

「まあ、こんなモンかねえ」

爆発が未だにあちこちで起きているが、気のせいだ。
そうして塔に戻り、アスナの鎖を外した時、後ろから怒号が飛んで来た。

「アンタか!? さっきのハタ迷惑な魔法を放った馬鹿は!?!」

ところどころ、ボロボロの赤毛のガキがキレていた。

……………なんだ、このクソガキは?

「真紅狼 side out」

く???side

俺の名は、ナギ・スプリングフィールドって言うんだ！

今、俺達は【紅き翼】^{アラルブラ}っていうチーム名でNGO団体の『悠久の風』

に所属してるんだが、メンドクサイ説明は飛ばす！！

で、今は、魔法世界全土で起こってる戦争を終わらせる為に、オスティアに向かう最中、帝国が二回目のオスティア攻略を始めた後に俺達は来たが……

「くそっ！ 一足遅かったか！！」

「おい、ナギ！ あそこを見る！！」

詠春が視線で場所を示すと、鬼神兵たちが団体で湖の塔に向かった。
いた。

「……おそらくあそこに“黄昏の姫巫女”が居るのでしょう」

「“黄昏の姫巫女”！？ まだガキだつて聞けぞ？！」

「仕方がないでしょう、この国は小国です。なにかし………？」

「どうしたんだ、アル？」

「あそこに人がいますね」

俺達は移動中の最中、塔の前で一人で鬼神兵の一体を両断していた。

「オイオイ、マジかよ」

「どんな武器を使ったのかしらないが、あの鬼神兵を一発で両断してる」

「……詠春、出来そうか？」

「……難しいな」

「ですが、やはり一人じゃ厳しいようですね……」

遠目からだか、多分男。その男は少し後ろに下がり鬼神兵との距離を取った後、目の前に魔法球（？）らしきものを形成したあと、右手をその中に突っ込んだ瞬間、一筋の光線が鬼神兵たちを襲った。俺達はようやく塔の近くまで来ていた時、男が何か言ってるのを聞きたれた。

『……………ブレイク!!』

次は左手を魔法球の中に入れて、もう一筋の光線を放ち、最後の攻撃に俺達は度肝を抜かれた。

『……………スライダー……………!!!!』

男は右足を左から右に薙ぎながら魔法を放っていた。

「……………なあっ!?!……………」

その後襲ってきたのは、爆発の連鎖だった。

「死ぬ死ぬ死ぬ!!!?」

「………… ナギと同じぐらいデタラメですね」

「なあ、アル。魔法使いつてのは足から魔法を放てるのか?」

「………… いや、それはちよつと私には…………」

「………… あやつ、どこかで見た気がするのぉ?」

「んなこと、どうでもいい!! 俺は取り敢えずアイツに一言言つてやる!!」

ハタ迷惑な魔法を放った本人の姿は、黒髪で真紅の眼で黒いコートとズボン、右腰には真紅の銃をホルスターに入れていた。

もう一人は金髪で多分10歳ぐらいに見えるが、どこか偉そうな態度のチビだった。

最後に、魔方阵の真ん中に居るのがおそらく“黄昏の姫巫女”と呼ばれる少女だと思う。

「アンタか!? さっきのハタ迷惑な魔法を放った馬鹿は!?!」

「うるせえ、バカ」

「なんだと、テメエ!!」

「お前はこういう教育を受けて来たんだ? 初対面の相手に罵声をぶつけるなんて教育でも受けたのか?」

「そういうアンタ達は何もんだよ!?!」

「人の名を知りたきゃ、お前から名乗れ」

「なんd………… 「ナギ、彼の言う通りだ」………… 詠春」

「失礼した、俺は『神鳴流』剣士の青山詠春と言つ」

「私はアルビレオ・イマと言います」

「ワシはフィリウス・ゼクトじゃ、よろしく頼む」

俺以外の他の三人はサラツと自分の名を上げていた。

「チツ、俺の名はナギ・スプリングフィールド！ またの名を『千
サウザンド・マスターの呪文の男』だ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の名を知って、ビックリしてんのか？

いやー、有名人はっ「「ダレ??」「……………はい？」

「エヴァ、知ってるか？」

「いや、知らん。紅赤主は？」

「俺も知らん」

「俺の名を知らないのか!？」

「全然知らん」

この異名は魔法世界全土に知れ渡ってる筈なのに!？

「ナギ side out」

「真紅狼 side」

どうやらこの赤毛のガキは“ナギ・スプリングフィールド”って言うらしくて、またの名を『千の呪文の男』と皆から言われてるらしいんだが、はつきり言おう……………

「ダレだ？」

「……取り敢えず、そのバカは放っておいて、貴方達の名を聞きたいんですが？」

ローブ姿の男は名前を聞いてきた。

《どうする、真紅狼？》

《本名は教えなくていいだろ。無用な戦闘は避けたい》
《分かった》

キティと念話をして名を名乗ることに。

「俺は『紅赤主』だ」

「私は『女王』と言われてる」

そう答えた時、街の方で爆発音がした。

振り向くと、帝国の艦隊が何隻も攻め込んでおり、先程の爆発は艦隊の一つの精霊砲が街に当たったらしい。

「『女王』。ちょっと艦隊を潰してくる」

「分かった。俺達も行くぜ！！」

「……一応言っておく、巻き込まれるなよ？」

「……………どういう意味だ？」
「すぐに分かる」

そう言つて鋼糸を街の方に飛ばし、飛んでいった。

スタツ・・・

俺は適当な高さの屋外に居た。

そこからある特殊武器をイメージした。

その武器は『長曾我部 元親』の第八武器『長槍 鬼神』だが、あの部分が一つだけ違う。

それは、碇の部分がとてつもなくデカイのだ。

大きさは軽く15mを超えている。

しかも、碇と柄は鎖で繋がれている為、ブン回すことも可能である。

「さて……………と フンー！」

俺は近くに居た空中母艦を狙い定めた後、その槍をブン投げた。

ブンッ！

ドォン！！

刺さつた槍は、見事に空中母艦の中心を捉えていた。

本来ならそこで撃墜して終わりだが、俺はそんなことでは終わらせなかった。

むしろここからが、この槍の本領発揮だった。

柄を掴んだ俺は、剛力で突き刺さったままの空中母艦をブン回しながら他の艦隊に叩き付けた。

「オラァー!!」

「……………は????????」

ドゴォォン!!

戦場に居る者全てがこの光景が信じられなかった。

艦隊が艦隊を潰すという、まるで『共食い』してるような光景に理解が出来ていなかった。

その内にすでに三隻目が墜ちていた。

オスティア国内の国民は墜ちる度に歓喜の声を上げ、代わりに帝国の艦隊は怒号と恐怖が入り混じった声が飛んでくる。

「あらかた喰い尽くしたし、あとはアイツ等に任せればいいや」

俺はエヴァとアスナの元に帰った。

「ただいまー」

「……………（啞然）」

「おい、キティ？」

「なんだ、あれは？」

「はい？」

「真紅狼！！　なんだアレは！？」

「まだ名前は付けてないけど、アレが前言ってた特殊武器」

「真紅狼はつくづく、規格外だな」

「名前どうしようかな……………」

「そのまんまでいいんじゃないか？」

「じゃあ『艦隊殺しの大槍』で」

その後は、ナギ・スプリングフィールドが率いる【紅き翼】によって戦いは終わった。

俺とエヴァ、そしてアスナを連れて塔を出ようとしたが、目の前にナギ達が現れ足止めされた。

（真紅狼 side out）

戦いが終わったんだから、帰らせてくれよ。

艦隊殺し（後書き）

ナギ達登場。

真紅狼は二週間の間にとある魔族と喧嘩しました。
そして、エヴァの別の名は『女王』です。

前のあとがきでラカンやゼクトやガトウ達の出会いをすっ飛ばすと言いましたが、よくよく考えてみたら、二回目のオスティア攻略ラカンと出会い グレートブリッジ奪回とガトウ登場でした。

なので、次々回あたりにラカンが出てくるかもしれないです。

千の呪文の男と紅赤主

「真紅狼 side」

戦いが終わり、アスナを連れて出ようとしたら、ナギ達が往く手を阻んだ。

「なんか用か？」

「貴方、彼女をどうするんですか？」

「無論、このまま連れだして助けるが？」

ここに居たって、苦しめるだけなんだからそれなら助けた方が良かったらうしな。

「……………そんなことさせると思えますか？」

そういつてアルビレオ・イマの言葉と共に青山詠春、フィリウス・ゼクト……………そして、ナギ・スプリングフィールドは構えていた。

「はぁ~~~~。まったく、疲れてるんだよ。一人だけ相手してやるから掛かってきな」

「なら、俺が行くぜ!!」

ドンッ!

バ力は高く叫んだ後、瞬動で距離を詰めて俺の横腹にボディープローを叩き込もうとした瞬間……………

「ジャックポット」……………」

トランプが俺の周りで展開されて、ナギを思いつきり吹き飛ばした。

ズバアアアア！！

「なあっ！？」

吹き飛ばされたナギを追い、そのまま右から左にとトランプを素早く振り、ナギの体勢を整わせずに追い詰めていき、足元を崩させた。

「……………ヤベ！」

「終わりだ……………」

ナギの顔を掴んで、壁に叩き付けて少し離れた後、袖からトランプを取り出した。

「見せてやるよ、カーネフェルの真髓を!!」

そこから52枚のカードがナギを襲った。

ズ・ババババババババババ!!!!

「があ!　ぐがあああああ!!」

急所は外しているが、至る所にトランプで出来た切り傷が体中に出ていたが、どれも浅い。

物理障壁でそれなりに緩和してるってところか…………。

「…………仕方の無い人ですねえ」

「「ナギッ!」」

「これで分かったろ?　小僧、テメエじゃ俺には勝てん」

「…………く…………そ…………っ!」

「…………じゃあな。いくぞ『女王』、アスナ」

「ああ」

「……………（コクリ）」

俺達が出ていこうとした時、あちら側から多分王国の衛兵らしき者達が団体さんで来てた。

「チツ！ アスナ、すまん。また連れだすことが出来なくなっちゃった」

「イ……イ……イ……」

「すまないな。侘びと言っちゃなんだが、このネックレスをやるう」

そのネックレスは^{アキラ・ヴァシム}尾晶蠍と友人になったときにヤツの水晶を譲ってもらって造った首飾りで、特殊な効果はない。
ただのアクセサリーとして首にかけていた。

「イ……イ……ノ……?」

「貰つとけ。さて『女王』、近くに来てくれ」

「分かった」

「さて、【紅き翼】の諸君。俺達はこれで失礼する。……『バニシュ』」

「消えた!？」

連中が探してる間に、俺達はすでに鋼系の力で街の中に消えていた。

〈真紅狼 side out〉

〈詠春 side〉

ナギが『紅赤主』に挑み、最初の瞬動まではナギのペースだったが、そこからはずっと『紅赤主』のペースだった。

紅赤主の武器はどうやらただのトランプだったが、二人の戦いを見ていて俺は思ったことがあったが、その時にはナギがボロボロになっていた。

「『ナギっ！？』」

ナギはボロボロになって息も切れかけていたが、紅赤主は息も切らすことなかった。

その後、紅赤主と女王は何かしらの魔法を自身にかけて姿をくらませた。

「くそっ！ あの野郎！！」

「……もしかしたら、あの技、暗殺術の一つかもしれないな」

「……どうということじゃ？」

「紅赤主の武器は“ただ”のトランプだった。だが、そのトランプでナギを吹き飛ばしたり、切り刻まれていたんだ。……何かしらの使い手だと思った方がいいだろうよ」

「そうですね。ナギ、貴方も良い勉強になったでしょう。人々が貴方を『千の呪文の男』と言っている、上には上があるという事です」

「……そうだな。今回は俺の慢心だったかもしれない……。だが、次会ったときは必ず俺が勝つ！！」

そう言って、ナギは倒れながらも吼えていた。

その後、この国の衛兵たちがやってきて帝国の攻撃を防いでくれた人物たちだと勘違いしたのか、一躍有名となった。

だが、あまり嬉しくなかった。

本当にやったのは俺たちじゃなくて、あの二人組だからだ。

（詠春 side out）

くエヴァ side)

今、私達はオスティアで泊っていた宿を解約して、取り敢えずメガロメセンブリナに向かう事にした。
理由は簡単。

あのバカ男たちに会ってしまったからだ。

この国は小さい為、ひょんなことから出会ってしまったら、面倒なことになるのだけは勘弁してもらいたいものである。

「キティとチャチャゼロ、準備はいいか？」

「ああ」

「大丈夫ダゼ、旦那」

「なら、メガロに行きましょうかね？」

そうして、私達は街に出た。

今私は、10歳の姿じゃなくて20歳の姿で真紅狼の隣を歩いてる。
もちろん、腕を組んでな。

その為か、私達を通り過ぎると振り向いて私達の噂をしてる。

男は私を見て、女は真紅狼を見ていた。

《キティをそんな目で見て欲しくねえ》

《嫉妬か？ 真紅狼》

《違いよ。ああ、そう言えば言ってなかったな。俺、独占欲が強いんだよ》

《なんだって？》

《だから、独占欲が強い。つまり、キティは俺のモノなんだけど、他の男にああいう目で見られているのが嫌いなんだよ》

《安心しろ、真紅狼。私は真紅狼一筋だよ》
《嬉しいこと言ってくれるじゃないか》

そんな風に念話をしていると、この国とメガロを繋ぐ『グレートブリッジ』が見えてきた。

「グレートブリッジか……」

「どうした、真紅狼？」

「いや、帝国が連合の目の前まで大規模転移なんてして、こんなところまで来たら、連合はかなりキツイ戦いになるんだろうな。って思っただけ」

「まあ、確かになあ。だが、これからは大丈夫だろ。私達に変わって、アイツ等がやってくれるさ」

「それもそうだな」

そうして私達はゆっくりと旅をしながらメガロに移動した。
（エヴァ side out）

まさか、真紅狼の言っていたことが現実になるなんてな……

千の呪文の男と紅赤主（後書き）

すみません、やっぱラカンは出しません。
というか、書くのをめんどくさくなりました。

最初の冒頭は入れるかもしれませんが。
傭兵稼業の商談は多分、入ります。

グレートブリッジ奪還作戦（前書き）

グレートブリッジが終わったー！ー！！

あゝ感想有難うございます。
ゆや様

これからもよろしく願います！！

グレートブリッジ奪還作戦

「????? side」

とある酒場にて……

「この三人の男とこの少年だ」

「なんだよ、まだガキじゃねえか!」

「あまり舐めてかからないことだ。この者達のせいで前回の“オスティア攻略”は失敗した。それから精鋭部隊や討伐隊を送りこんでいるが悉く返り討にされている」

「………前回? ということはその前にももう一度やったということか?」

黒服の男はさらに内胸ポケットから、二枚の写真を取り出した。

「最初の一回目の“オスティア攻略”時に邪魔された者達だ」

「オイオイ、コイツは………」

「そうだ。最高賞金首3000万ドラクマと600万ドラクマの二人だ。男の方は“紅蓮の殲滅鬼”、女の方は“闇の福音”だ。キミが望むなら部下や他の傭兵を……「いらねーよ」……」

「コイツラなんか、俺一人で充分だ」

そう言っていた俺は、一週間後には何故か【紅き翼】のメンバーとなつて戦争を終わらせる方の立場となっていた。

「????? side out」

一週間後……

（真紅狼 side）

無事にメガロについて、のんびりしてたら『グレートブリッジ』で言ってたことが実現するとは思わなんだ。
これは、俺のせいなのか？！
ということで現在orz状態です。

「冗談で言っただけなのに……（涙目）」

「まあ暴れようじゃないか、真紅狼」

「じゃあ、アイツ等の恐怖の代名詞とも言える『艦隊殺しの大槍』で行くか」

「初っ端から手加減なしか……なら、私も容赦なしに魔法を放つか」

ということで、俺は仮面を着け、エヴァは本来の姿でグレートブリッジに赴いた。

出向いた時にはすでに中盤戦に差し掛かっていた。

何故なら、遠くからだか【紅き翼】のメンバーが見えたからだ。

「おーおー、ナギ達が暴れてんなあ」

「あのガキ共か……」

「こちらも暴れ出しますか！」

「そうしよう」

そこから、お互いに戦場に向かった。

俺は素早く『艦隊殺しの大槓』出現させ、狙いを定めてブン投げた。

「
オラアッ!!!」

ドオン!!

刺さった獲物はどうやら空中母艦が二機だった。
そこから、鎖で繋がれた碇を外して回し始めた。

ブン・・・・・・・・ブン・・・・・・・・

そうして、他の獲物目掛けて襲いかかった。
まさに『共食い』をするように……………

（真紅狼 side out）

（エヴァ side）

真紅狼は既に『艦隊殺し』で五機も潰していた。

私も『闇の魔法』で身体強化。

今回は敵も数も多い為、暗黒魔法のなかでも一番威力のある『パニッシュレイ』を装填した。

『パニッシュレイ』は攻撃時に一瞬だけ私の姿を消す……………という

より、何かしらの攻撃を放つ際、相手の五感を機能させないことにするのが特徴だ。

これは機械にも通用する為、一瞬の間があれば詠唱無しの魔法を放つことが出来るのである意味、必殺の構えだ。
私の最初の相手は巡洋艦だった。

「さて……………」

そう呟いた後、巡洋艦の艦首の上に立った。

『!?!?!?!?!』

「ハロー」

おお、驚いてる驚いてる。

そのまま、驚いてる奴らにプレゼントとして、拳を振るった。

カッ……………!!!!

昏い光が全員の感覚を機能させなくした一瞬の内に、零距离『闇の吹雪』を五発叩き込んだ。

ドドドドドオンー!!

ピキ……ペキ……バゴオンー!!

一点に集中して放ったから、最後の五発目の『闇の吹雪』で見事に貫通して、高度が下がり始めたので、私は近くに居た駆逐艦の艦首に乗り移り、同じことを繰り返した。

あ、真紅狼はもう十機も落としてる……………負けられん!!
くエヴァ side outく

くラカン sideく
俺達は“グレートブリッジ奪還作戦”に参加している。
俺達の活躍により、帝国の艦隊も半分以上が沈められた後の時だった……………

メガロの方向から、帝国の艦隊が次々と撃墜されていく音が俺達の方に響いた。

「なんだ!？」

「……………まさか、あの碇は!!」

「アル、知ってんのか？」

「あんな武器を使う者なんて、この世界に一人しかいません!」

どうやら、アル達は知ってるようだった。

そして、帝国の艦隊はその者を倒そうと残ってる艦隊を全てそちらに回していた。

「オイオイ、艦隊が向こう側に行っちゃったぞ!？」

その時、硝煙と爆炎の隙間からその物体が見えた。

それは漆黒の碇に見事に貫かれていた超弩級戦艦が無残な姿になっていた。

所々凹み、艦首は叩き折られていて艦尾はすでになかった。

そして、その漆黒の碇はまるで生きているように、他の帝国艦隊を喰いに掛かる。

ドゴォーン！！

「アレは帝国にとって恐ろしいモノじゃねえ……………“死”そのモノじゃねえか」

「今思えば、あの者が敵じゃないことに安堵してますよ」

「そう言えば、アル。そいつは一体何者なんだ？」

「……………貴方の元ターゲットの二人ですよ。私達を除いて……………ね」

「……………ってことはアレが“紅蓮の殲滅鬼”か！！」

「……………どうやら終わったようですね」

帝国の艦隊は三分の二が“紅蓮の殲滅鬼”ともう一人の奴に墜とされ、俺達は残りの三分の一と“グレートブリッジ”を取り戻す成果を上げた。

そして、夜明けが来た。

「……………俺の故郷がある旧世界では超強力科学爆弾が発明されているがこれほどまでの大戦は起こらないそうだ……………。何せ、始め

ちまったら最後は皆滅んじまうからなんだってよ」

そつ感慨深くナギは言っていたが、俺にはどうでもいいことだな。

「だが、この戦はいつになったら終わる？ ヘラスを滅ぼすまで終わらないのか？！ まるで………」

「まるで、誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようなのですか？」

「……案外その通りかもしれないぞ？」

「……ガトウ」

そこに現れたのは白い服を来た男　ガトウとその少年タカミチだった。

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出た。　やはり、奴らは帝国・連合の双方の中枢に入りこんでいる。　秘密結社『完全なる世界』だ。悪いがナギ、後日本国まで来てくれ。アル達も頼む」

「何故ですか？」

「会って欲しい協力者が居るんだ」

そうして、俺達はグレートブリッジを後にした。

＼ラカン side out＼

＼真紅狼 side＼

艦隊もほぼ喰らい終わり、グレートブリッジも【紅き翼】の連中が奪還したらしく、戦いは終わりを告げた。

「女王もお疲れ」

「紅赤主も暴れまくったな。何機喰らった？」

「おおよそ 超弩級戦艦：1 空中母艦：12 巡洋艦：8

駆逐艦：11 強襲艦：3だな」

「総計35艦も墜としたのか……」

「墜ちた数なんかどうでもいいさ。はやく帰って寝たい……というより女王で愉しみたい」

「なっ！？ こんなところで言う事無いだろ！？ 別にイイケド……
／／／／」

そういう恥じらう所がまたいいんだよねあゝ。

そうして宿に帰った俺達は夜を愉しんだ。

内容は言わねえよ？

次の日……

いやー、愉しんだ愉しんだ。

それはもう、疲れが吹っ飛ぶぐらいにね。

隣で寝ているキティは未だにお休み中だ。

髪を撫でてやると、「んっ……」と呟いていた。

もう少し寝ようと思ったその時……扉の叩く音がした。

コンコン・・・

俺は素早く着替えて、クリムゾン アドミニスター“真紅の執行者”に手を掛けながら、キティを外にいる奴ら聞こえないように起こした。

(キティ、起きてくれ)

(んう？ しんくろう？ なぁに？)

(……メンドクさそうな客が来たから、着替えてくれ。素早くな)
(…………分かった)

コンコン・・・

再びノック音、普通この後に名乗る筈だが、相手はいつまでも名乗らない。

その後すぐにノックの外れる音が聞こえ、俺とキティは奥に引つ込み迎え撃つ準備を始めた。

ガチャ・・・

コツ・・・コツ・・・

《真紅狼》

《ああ》

「「だれだ!!」」

首元に銃を突きつけ、チャチャゼロは相手の心臓の辺りにナイフを突き付けていた。

「わ、私はマ、マクギル元老院議員の部下っ、部下です!」

「……………それで?」

「紅赤主様と女王様に来て……頂くようにと仰られて……迎えに上がりました!!」

「……取り敢えず女王、チャチャゼロを下がらせろ。コイツは嘘を言っていない」

「……………フン」

そう言ってチャチャゼロはナイフを閉まった。

「どこに行けばいい?」

「夕方にこの場所に……………」

場所をメモされた紙を受け取った俺は、そいつを帰らせた。

「一応、招待には応えてやるが二度と無断で入ってくるなよ? 次は容赦しないし、外に居る連中にもそう言っておけ!」
「は、はいいいいいい!!!!!!」

マクギルという男の部下は腰を抜かしながら、颯爽に出ていった。

「紅赤主……気付いていたのか？」

「まあな、多分応じなかったら、無理矢理連れて行くという感じだったんだろうよ。寝込みを襲えば、勝てると思ったのかねえ」

そうして時間が過ぎ夕方となり、紙に記されてる場所に向かった。

はつきり言おう。

行ったらマジ後悔した。

なんでコイツ等が居るんだよ！！

＼真紅狼 side out＼

＼ナギ side＼

俺達はガトウに呼び出され、本国まで行きある場所で“協力者”に会いに行った。

「で、その“協力者”ってのは？」

「……マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方達だ……ウエスペル
タティア王国第一王女のアルマ王女とその妹君で第二王女のアリカ
王女だ」

そう言つてマクギル元老議員が向いた方を見ると、銀髪のアルマ王女と金髪のアルマ王女が静かに歩いて来ていた。

「…………マクギル元老院議員、貴方の言う“協力者”とはこの者達ですか？」

「いえ、アルマ王女、あともう一組居ますがどうやらおk・・・」
来てやったぞ、マクギル元老院議員殿？」…………今、来ました」

もう一組はコイツラだったらしい。

「紅赤主！！」

「…………チッ！ メンドクさいのが集まりやがった上に極めつけはアンタかよ」

そう言つて紅赤主はアリカ王女を睨みつけた。

「なんでコイツ等を！？」

「…………この者達と貴方達は『帝国』と『連合』に属していない人達だからです。お願いです、私達に…………この戦争を終わらせる為に
お力を貸してくれませんか！？」

真摯に訴えるアルマ王女に対して俺達は快くOKを出したが…………

「……俺達のメリットは？」

「おい、紅赤主！？」

「何を驚いてやがる？ 俺達は賞金首、つまり悪党だぞ？ それなりのメリットがなきゃ動かねえよ」

「テメエ……！！」「……賞金首の取り消しなどどうじゃ？」

「それだけか？」

「今のところ、それだけじゃ」

紅赤主はしばらく考えた後、結論を出した。

「まあ、いいだろう。今のところはな……？」

そう含みのある笑いを出した。

その時、俺はアルマ王女を見つめていた。

アリカ王女は紅赤主の方を見つめていたが……

くナギside outく

さっきからアルマ王女を見ていたが、なんでか視線がずらせねえな・
・・なんでだろ？

グレートブリッジ奪還作戦（後書き）

最後は無理矢理ねじ込んだ。

次回からナギ達と行動を共にするかも……です。

当方、非常に足癢が悪いモノで・・・（前書き）

毎度、ゆや様

ご感想有難うございます。

当方、非常に足癖が悪いモノで・・・

ナギside

紅赤主と共闘するのは分かったが、今やりたいことが一つある！

「紅赤主と女王の共闘は分かったが、姫さん達よちょっと時間を貰ってもいいか？」

「「なんですか（じゃ）？」」

「今ここで紅赤主の実力を測りたい」

「「…………ハア？」」

予想通りの答えが返って来た。

だが、それは予想済みだ。言葉を発する前にこちらが畳みかければ

…………

「実力も何もおm…………「ジャック、アンタもコイツの実力を知っておきたいだろ？」…………オイコラ、話聞けよ」

「確かにコイツの実力は知っておきたいかもな、ナギ、その提案乗ったぜ！」

「……………そうですね。紅赤主様、ココで実力を少し見せてくれませんか？」

「ココでか?!」

「はい……………」

「はあゝゝ、やればいいんだろう！ やればよ!？」
「ええ」

アルマ王女は確信犯の笑みを浮かべていた。
この人、エゲつねえな。

「よっしゃー！！ この前の借りを返してやるぜー！！」
「あんまり、派手なのは……………！？」

何か言っていたが、ジャックの拳と俺の拳が奴の顔に入った！！
筈だった…。

「おい、聞けよ。……………ガキ共！」
「「なあっ！？」」

紅赤主は右足一本でジャックと俺の拳を止めていた。
そのまま、左回し蹴りで俺をジャックの方に吹き飛ばし、受け止めていた右足で俺達を蹴り飛ばした。

ドガッ！

「このクソガキ共が……………」

紅赤主は懷から小さな短刀を取り出した。

「ハッ！ そんな小さな短刀で俺達とやろうってか？」

ジャックは挑発した。

その挑発に応えるように紅赤主は応えた。

「運が良かったな。大凶にあたるなんて、選ばれた人間の証だよ」

そう言った後、紅赤主が水平に飛びながら蹴りを繰り返していた。
どつという体の構造してんだ！？

「ナギside out」

「真紅狼side」

ナギのちよつとした一言により大バカ二人と戦闘するハメになりました。

二人は俺が言い切る前に先制してきた。

いい度胸だな、クソガキ共！！

ガァン！！

俺は右足一本で二人の拳を受け止め、そのまま器用に二人纏めて蹴り飛ばした。

『七夜』の体術を使えるようになってから、俺、足癖悪くなったんだよね。

ラカンが調子に乗ったことを言ってきたのでこちらにも反撃に出た。

「運が良かったな。大凶にあたるなんて、選ばれた人間の証だよ」

閃走・一鹿

地面と水平に飛びながら蹴りを繰り返した。

「でえい！」

「くっ！」

「どういつ体の構成してんだ、アンタは!？」

「こつという体の構成だよ、クソガキ共!!」

避けられて、ラカンはアーティファクトの大剣で俺をぶった切ろうとしたが、俺は地面に着地した瞬間、そのまま姿を消してラカンの背後……しかも、上空に現れた。

閃鞘・八穿

「……させるか！」

「チッ！」

ガシッ！

ナギが俺の姿を見て、横から割り込んだ。

そして、俺は大バカ二人と距離を取った。

距離を取ったことをいいことに、大バカ二人はナギは『魔法の矢』サギタ マギカをラカンは大剣を次々と投げてきた。

このバカ共は話を聞いていなかったのかな？

「派手なのは止める」と言った筈なのだが……
しょうがない、使うか。……『直死の魔眼』を。

真紅の眼から蒼い眼に変わり、“モノ”の死を見れるようになった俺は放たれているモノたちの“点”を見た後、全てを“殺”した。

バキキキキ……ン！！

「そちらの攻撃は終わりか？　なら……」

閃鞘・水月

素早くナギ達との距離を詰め、そして、そのまま『閃走・六兎』に繋げた。

「蹴り穿つー！　けや！」

一度俺は地上に降りた後、もう一度『閃走・六兎』を叩き込んだ後、追撃のサマーソルトを繰り出した後、今度は空中で『閃走・一鹿』を放ち、下に叩き付けた。

ドオン！！

スタツ・・・！

「しかし下手だね、どうも」

「くう！ テメエ、もう一度勝負しやがれ！！」

「やだよ、バカ。油断したお前が悪いに決まってんだろ？ これでいいかい、王女様？」

「ええ。十分な実力があると分かりました」

「……………お主、相当足癖が悪いの」

そう言ってくるアリカ王女、なら俺はこう答えるべきだな。

「すみません、王女様方。当方、足癖が非常に悪いモノで」

そう敬まいながら、御辞儀をした。

「なら、いつか私と踊るまでには直しておくのじゃ」

「出来る限り、善処します」

「……………ところで貴方たちの名前を聞いていなかったのですが、教えてもらえますか？」

そう言ってくるアルマ王女。

本名は晒したくねえな。

「俺の名はナギ・スプリングフィールドだぜ、姫さん」

「私の名は青山 詠春と申します」

「私はアルビレオ・イマです」

「ワシの名はフィリウス・ゼクトじゃ」

「私の名はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。こちらの少年はタカミチ君です」

「は、初めまして……………」

「俺はジャック・ラカンだ。よろしく頼むぜ、姫さん方？」

「自己紹介、有難うございます。私はアルマ・アナルキア・エンテオフュシア。こちらは私の妹のアリカ・アナルキア・エンテオフュシアです」

「それと、ラカンさん筋肉達磨はもうちょっと礼儀をってください知れ」

お二人さん、ラカンだけにはスゲエ冷たいな。

多分、波長が合わないんだろうな。

で、俺達を見に来る。

「貴方達の名前も教えてください」

「あんな、姫さんよ。俺達、賞金首なんだよ。だから、こんなところで本名バラして、それが漏れたりしたら被害は俺達に向かうんだ

よ。ということとで名乗りたくないわけ、お解り？」

「……………では、すまないが【紅き翼】とこの二人、あと私達はしばらくの間、離れてくれ」

「しかし、殿下!？」

「……………頼む」

「分かりました」

そう言つて、マクギル元老院議員と姫さん達の付き人をこの場から遠ざけた。

「さて、改めて名を聞こうかの」

視線がいたーい。

その時、キティから念話が来た。

《どうする？ 真紅狼》

《答えるしかないんじゃないか？》

《非常に言いたくないがな……………》

《安心しろ、俺も言いたくねえよ》

「では、まず私からだな。…………一度しか言わんぞ？ 私の名はエヴ

アンジェリン・A・K・M・蒼騎だ」

「じゃあ、俺か…………俺の名は蒼騎 真紅狼だ。これでいいか？」

名を名乗ると俺達以外のメンバーは固まる。

コイツラ、気付くの早くね？

「もしかして、貴方達は……………結婚されておられるのですか？」

「あー、うん。まあ」

「失礼ですが、年の方を伺っても？」

「私は510歳だ」

「……………510……………だと！？」

キティの年で驚いたら、俺の年はもつとヤバいな。

「……………それなら、お主は何歳じゃ？」

「今年で975歳。来年で976歳だな」

「……………ポカーン（。）」

「言っておくが俺は不老不死で鬼の肉体だし、エヴァは吸血姫だからな？ 変な勘ぐりはやめろよ？」

「……………ハア！？」

コイツラ、おもしろえー。

そうして、俺達はアルマ・アリカ王女、【紅き翼】と共闘すること
でこの戦争を終わらせる為に動き始めた。

（真紅狼 side out）

休暇ねえ……、何しようかな？

当方、非常に足癖が悪いモノで・・・（後書き）

連続投稿をします。 っといつてもキャラ設定ですけどね。

キャラ設定 その2

主人公 蒼騎 真紅狼 《あおき しんくろう》

年 今現在 975歳

身長 180cm

体重 65kg

誕生日 4月29日

容姿は鋼殻のレギオスのリテンスをイメージ。だが、無精髭は無いし、煙草も吸わない。ただ、眼の色は真紅。

能力

KOFのオズワルドの戦闘術 “カーネフェル” を使える。
武器 トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の劉技も使用可能）

武器 リンテンスの鋼糸と刀の天剣

FF5の暗黒魔法と6の魔法、青魔法+召喚獣が使える。

戦国BASARA2の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。
各武将によって、「吸収・半減・無効・弱点」できる属性がある。

前田慶次

吸収 風 半減 地 無効 雷 弱点 炎

長曾我部元親

吸収 炎 半減 雷 無効 水 弱点 地

織田信長

吸収 闇 半減 炎 無効 地 弱点 光

不老不死。

メルブラ

“蒼崎 青子”の通称『マジックガンナー』の能力が使える。
破壊特化

“ 軋間 紅摩 ” の灼熱
鬼の肉体

『 七夜 』 の体術、及び “ 直死の魔眼 ” 使用可能
短刀 『 七ツ夜 』

“ 断罪者 ” ならぬ “ 真紅の執行者 ”
クリムゾン アドミニスター

特殊武器
『 艦隊殺しの大槍 』

“ 長槍 鬼神 ” の姿だが、碇の部分がメチャクチャでかい。
鎖によって、碇と柄の部分が繋がってるため、切り離して回すこと
も可能。

異名

『 紅蓮の殲滅鬼 』 、 『 姫を護りし紅き鬼 』

変装時の名前
くれないせきしゅ
『 紅赤主 』

ヒロイン その1

名前 エヴァンジェリン・A・K・M・蒼騎

年 今現在 510歳

身長 132cm

現在 吸血姫（誤字ではなく、こちらのオリジナル仕様）

10歳の時に見知らぬ男、後に造物主となる。

その男に吸血姫にされ、小さな復讐した後、真紅狼と出会いその後は永い間を一緒にになり、300年後に突然結婚する。

それからは名前の最後に『蒼騎』を付けることになる。

ネギまの魔法適性は 闇、氷

FFの魔法適性は 光以外はオールオツケー

暗黒魔法に『パニッシュレイ』の属性は“闇”・“光”だが、“闇”がある為、“光”がダメでも放つことが出来る。

『闇の魔法』でによる戦闘が主だが、使わなくても真紅狼に鍛えら

れているので、強い。

闇の魔法には二つの型がある。

一つは…『闇き夜の型』

もう一つは暗黒魔法を取り入れた型…『永久の闇夜の型』
です。

付加効果は発動時に随時書いていきますので、もう少しお待ちください。

全部出たら、リストにして記載します。

異名

『闇の福音』、『不死の魔法使い』、『紅き鬼を従えし者』

変装時の呼び名

『女王』

従者はチャチャゼロ

名前 チャチャゼロ

年 今現在 100歳前後

エヴァの従者

武器は主にナイフ

真紅狼と時折、戦闘をするので太刀筋が真紅狼に似て来ている。

異名

『殺戮人形』

補足

造物主についてですが、こちらはまったくもってオリジナル設定となっております。

さらに、ややこしいのでお気をつけください。

まあ、まだ登場しませんかね……………（笑）

では、失礼します。

キャラ設定 その2（後書き）

また、随時設定が決まり次第、記載しておきますのでお待ちください。

幹部、襲来（前書き）

御感想有難うございました。
読むのはいいけど様。

ようやく物語が魔法大戦の後半に行けそうです。

幹部、襲来

（真紅狼 side）

うい、真紅狼だ。

現在、姿を隠しながら、アリカ姫と妻のキティとショッピング中だ。はつきり言おう……………どうしてこうなった？

原因なんて分かってるんだけどね……………

アルマ・アリカ姫が御登場。

アルマ王女はナギに、アリカ王女は俺に『買い物に付き合え』と言ってきた。

断ったら、王家の魔力でビンタを貰ったので、応ずるハメとなった。ナギも同じ目に遭ったらしい……………

そしたら、キティもついていくという事になった。

そして、キティは変装して大人姿になっている。

左にキティ、右にアリカ……………所謂“両手に花”状態だ。 今ココ

ちなみに詠春、ゼクト、アル、タカミチ少年、ガトウは『完全なる世界』について調査中だ。

出来れば、俺もそちらに行きたかったが面が割れている為、行けないことに気付き断念した。

「……………遅いぞ、紅赤主」

「……すみませんね、両手に荷物を山のように持つてゐるためか、前が見えづらいんですよ」

「……少し、持とうか？」

「ああ、別にいいぞ。女王。こういう役目は男がやるもんだ」

そうして、今日は何事も無く終わるのか。と思っていたら、突然魔法をぶつ放された。

『リフレク』

ズ、ズン！！

当たる直前に二人にリフレクを掛けたが、俺は間に合わず直撃した。

「ゴホッ、ケホ………！！ 周囲を気遣わずに撃ちやがって！！」

「紅赤主、大丈夫か！？」

「……おそらく、『完全なる世界』の刺客じゃろう。一応追跡魔法を掛けておいたのじゃ」

この姫さん、全くもって動じねえ。

肝が据わってやがる。

というか、俺の耳にはもう一箇所で爆発音があったぞ？

「もう一箇所で爆発音がしたな……………」

「姉上のところであろう……………妾が狙われたら必然的に姉上のところにも刺客がいても、おかしくはない」

「取り敢えず、ナギのところに行く前に……………」

シユル……………

俺は腰の“クリムゾン アドミニスター真紅の執行者”で六発全弾、実弾で襲撃者に向けて撃った。

ダンッ！……………ダダダダダーン！

その後、すぐさま薬莢を排出してホルスターに収めた。

カランッ！

カラン……………カラン……………

ガチャン！！

薬莢が地面に当たり、音が響き渡る。

「女王と姫さんよ、俺に抱きついてくれ」

「分かった」

「……………何故じゃ？」

「そうじゃないと、移動しにくいんだよ」
「……どうやって移動するのじゃ？」
「いいから捕ま……れ!!」

ビュンッ!

鋼糸をナギ達の近くまで飛ばして、後は引つ張られる要領で飛んでいった。

＼真紅狼side out＼

＼ナギside＼

今、現在アルマ王女とショッピング中だったが、『完全なる世界』の刺客が突然襲ってきた。

「こんな街中で堂々と魔法を放ちやがって!! 姫さんは大丈夫か!?!」

「ええ。ここが襲われたってことはアリカの所にも刺客が向かってるでしょうね」

「心配か？」

「心配ですよ、妹なんですから……」

「大丈夫だろ、あちらには真紅狼とエヴァンジェリンが居るんだし。そして、ようやく奴らの尻尾を掴んだぜ、このまま敵の本拠地を潰してy……」
「待ちなさい」……ぐえっ! な、なんだよ!? 姫さん!?!」

「私も行きましょう。ナギだけでは不安ですし、私の魔法は役に立つのを忘れたのかしら?」

「…………ハッ！　良いぜ！！」

そうして、姫さんを抱えて奴らを追跡しようとした瞬間、空から真紅狼達が降って来た。

「無事、到着！！…………なわけないか。オーイ、アリカ王女、大丈夫か？」

「…………けが」

「なに？　聞こえない」

「こんの戯けが！！」

バチーン！！

「痛い！！　魔力込めんな、マジで痛えんだよ！！」

「なら、もつと優しく飛ばんか！！」

「そんなこと言っていたら、何時まで経っても飛べねえだろーが！！」

バチーン！！！！

「だから、痛いって！！」

「取り敢えず、落착けよ、二人とも」

「…………ああ（うむ）」

息を落ち着かせた二人はいつもの表情に戻った。

「真紅狼のところにも来たか？」

「来たぜ、アリカ王女が追跡魔法を掛けたから俺が“真紅の執行者”で追撃弾を放ってある」

「なら、敵の本拠地を潰しますか!!」

「ああ。どうせ、女王もアリカ王女も一緒に来るんだろ？」

「「当り前だ（じゃ）!!」」

そうして、俺達五人は敵の本拠地を壊滅させにいった。

「ナギside out」

「真紅狼side」

敵の本拠地についてても下部組織の本拠地を潰して、アリカ王女とキティで朝帰りしたら、詠春がメツチャ怒ってる。

「……で、貴様と真紅狼は買い物をしたまま、両殿下を連れまわした揚句、敵の下部組織を壊滅させてきたのか!!」

「しょうがねえだろ、詠春。あの場合、ああするしか方法が無かったんだからよー」

「姫さん達はノリノリだったな」

「やかましい!!」

「そんなに怒っていると血圧上がるぞ？」

「誰のせいだと……」「詠春さん!!」……どうした？」

そこにタカミチ少年とゼクトが来た。

「あの冷血なお姫様と天然のお姫様が笑ってました！！ あ、しかも真紅狼さんとナギさんにお礼を伝えてくれって………確かに笑いましたよね！？」

「うむ、驚いたのじゃ！」

「ほら………しかも、ナギ」

「おう。これを見る」

そこには『完全なる世界』と繋がっている現在のメガロメセンブリナのナンバー2の証拠映像だった。

「では、それがあれば戦を終わらせることが出来るんですね？」

「まあ、多分な」

「では、貴方達に任せます」

「アルマ王女、アンタもよくやるな。こんなボロい船で帝国の第三王女に会いに行くなんて………」

「それは、私を心配してるんですか？ ナギ？」

「へ？ 心配？ なんの？」

マジボケしながら、答えるナギに対して、アルマ王女は表情一つ変えずに両頬にピンクを叩き込んでいた。

うわー、すげえ痛そう。

「…………お主も妾の事を心配してるのか？」
「まあ、それなりには……………」

バチンッ！

俺も叩かれた。

理不尽じゃね！？

少なくとも、ナギよりかはマシな答えを出したはずだろ！？
チクショウ、あのビンタ姫め……………（泣）

「大丈夫か、真紅狼？」

「エヴァが抱き付いてくれたら、治る」

「…………じゃあ、膝の上に乗ったら？／／／」

「瞬間回復だな！」

エヴァが乗った瞬間、頬の痛みとかその他諸々が回復したよ！！
色々と補給も出来た。

その後、ガトウがマクギル議員に連絡して、俺とキティ、ナギ、ガトウ、ラカンを連れて、証拠品を持ってくるように言われた。

何故に俺とキティも呼ばれるんだ？

次の日の夜……………

俺達はマクギル議員の執務室に来たが、なんか感触が違う。

「御苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ……………^{ブラエルトル}法務官はまだいらっやいませんか」

「法務官は……………来られぬこととなった」

「……………ハ……………？」

ガトウは間をおいた返事をしていたが、俺とキティはアイコンタクトでサインを交わした後、俺は“真紅の執行者”に『ファイラ』を装填して、撃った。

ダンッ！

ブオウア！！

「ちょ、真紅狼、おま、議員の顔を撃ってどうするんだよ！！？」

「よく見る、ガトウ。奴はマクギル元老院議員じゃねえ」

炎の中から出てきたのは、白い髪 of 青年だった。

「……よく分かったね、“紅蓮の殲滅鬼”。こんなに簡単に分かるなんてもう少し研究の必要がありそうだな。本物のマクギル元老院議員なら、メガロ湾の底だよ」
「てめえ!!」

ナギは飛びかかるが、二人の男に行く手を阻まれる。

「くられ」

「通しませんよ」

ドウッ!!

渋そうな男は炎を操り、冷めた男は水を操っていた。

「……チッ！ 奴ら強えぞ!!」

「だが、生身の敵だ。政治家とかそういう奴らよりかは、万倍!!!!
やりやすいぜ!!!!」

「さつさと黙らして、こいつらの首謀者を吐かせるか、手足無くても首さえありや問題ないな」

「真紅狼、もうちょっとオブラートに包むことは………出来るわけないか」

「さすが、俺の妻。分かってるね」

「二人とも集中してくれ……」

白髪青年は電話を持っていた。
あ、ヤバーイ。

「う、うむ！ わしだ！！ 奴らに暗殺されそうになってる！！
奴ら、スプリングフィールド、ガトウ、ラカン、紅赤主、女王は帝
国の手先だった！！ 今も狙われておる！！ 軍に連絡を……………！
」

あちゃあ……………

「やられたな」

「ガトウ、撤退するぞ」

「そうしよう」

「キミたちは少しやり過ぎた。退場してもらおう」

そういった白髪青年は“地”の呪文を唱えて、建物ごと潰したの
で、俺達は海に飛び込んだ。

「昨日まで英雄呼ばわりが一転して、反逆者か。人生は波乱万丈じ
やねえとな！」

「俺達は賞金首が上がりそうだな……………」

「タカミチ君たちは上手く脱出できただろうか？」

「……………姫さん達がヤバいな」

そうして、俺達は帝国にも連合にも追われる身となった。って俺と
キティは以前から追われていたか……。
移動中、アルマ・アリカ王女は古代遺跡が立ち並ぶ『ノクティヌ・イン・トウス夜の迷宮』に
幽閉されたらしい。

（真紅狼 side out）

世話の掛かる姫さんのことで……………

幹部、襲来（後書き）

真紅狼のサラツと言う一言が時に恐ろしくなります。

この時の真紅狼ははつきりいつて容赦がないです。色んな意味で……

次回はアルマ・アリカ姫救出です。

選択肢は慎重に選ぼう（前書き）

裂きちゃん様、御感想有難うございました！

いいシーンなのに最後がおかしくなった。

選択肢は慎重に選ぶ

＼真紅狼 side＼

ドゴーン!!

バゴ! ドガァン!!

ゴ、ゴゴン……

ガラ……ガラ……

いきなり、うるさくて悪いね。

今、俺達は『ノクティヌヒンリントウス夜の迷宮』で救出中だ。

ある親友と共にな…………。

『迷宮』って言うぐらいだったから、壁が多いと踏んだ俺はキティと旅をしていた時に仲良くなった竜を連れて、突撃させてる。

竜の名は“グレンゼブル”…………、また二つ名を『暴突』って言われてる。

コイツの特徴は何と言っても、頭の先にある角だ。

というか、リーゼントよりかは若干短いがその突撃力と言ったら、目の前に障害物があっても、紙のように貫いていく。

手当たり次第に、壁をブチ抜いていったらお探しの人物達を発見した。

「お邪魔しまーす」

「“お邪魔しまーす”はないと思うぞ？」

「いや、ナギ。一応王女だからさ。言っておかないとマズイと思っ
て……」

「まあ、そんなことどうでもいいんじゃない？ 迎えに来たぜ、アル
マ姫？」

「遅いですよ、私の騎士」

「そうじゃ、遅いぞ！ 我が騎士よ」

「騎士じゃねーよ！……」

そんな軽い口の叩きあいしながら、俺達は『夜の迷宮』ノクティ&ベリンントウスを脱出し
た。

その際、帝国の第三王女もついでに助けた。

帰りも“グレンゼブル”は大活躍。

脱出出来た後、“グレンゼブル”にお礼をした後、棲家に帰ってい
った。

〈真紅狼 side out〉

〈アル side〉

私達がアルマ・アリカ王女を助けに行く前に真紅狼は、どこかに行
ってました。

「エヴァンジェリン、真紅狼はどうしたんですか？」

「真紅狼なら、おそらくアイツを呼びに行ったと思うぞ？ 何せ、
これから行く所が『迷宮』だからな……」

そう言ったエヴァンジェリンは何が来るのか、分かっていました。
そこから、3分後……彼はあるモノに乗ってやってきました。

「……………おい！」

「遅えぞ！ 何をやっていて……………！？」

「悪い、悪い。コイツを呼びに行つてたんだよ」

そこには頭がやたら尖っている竜だった。

「真紅狼、この竜は……………？」

「“瀑突 グレンゼブル” って言えば分かるよな？」

あのグレンゼブル！？

障害物をモノともせず、その突撃力は商人どころか魔法使い達や新米の傭兵にも恐れられている、あの！？

「何故、このような竜が貴方を乗せてんですか？」

「俺とコイツは親友みたいなモンだから」

真顔で答えられました。

さらにエヴァンジェリンが追撃で言いました。

「ちなみにココだけではなく、世界中の魔獣達のほとんどが真紅狼と友人だからな？ オステシアとヘラスの間の砂漠に居る“アクラ・ヴァシム”も友人だぞ」

真紅狼の友人関係は、一体どうなってるんでしょうね？

「オイ、真紅狼。俺達その“アクラ・ヴァシム”と戦ったんだが、アイツ、メチャクチャ強いのにどうやって倒したんだよ!？」

ナギや詠春は質問していた。

アレには驚きました。

何せ、造り出した水晶を食べて回復してましたし……………。

「素手でガチンコ勝負してたが?」

二人はorz状態になっていました。

正直、私も心が折れそうです…………… あんなに苦労したのに…………… それを素手でなんて……………

そんな話をしながら、私達はアルマ・アリカ王女と帝国の第三王女を救出して、

私達の隠れ家のある『オリンポス山』に帰りました。

彼が言うには、そこにも友人がいるそうです。

（アルside out）

（真紅狼 side）

【紅き翼】の隠れ家はそれなりに広い家だった。

まあ、場所が場所の為、土地は余っているからだな。

後ろが崖で建ち場所は大地と大地の間……所謂、溝みたいな場所だったからな。

後ろの方で、第三王女とラカンが何か言い合ってるけど、無視しよう。

「さーで、姫さん。助けてやったけどここから大変だぜ？ 連合に

も帝国にも、そしてアンタの国の味方は一人もいねえ」

「恐れながら事実です。両王女殿下……しかも、最新の調査ではオスティアの上層部が最も「黒い」……という可能性させ上がってきてます」

ナギが語り、ガトウが続けて現在の状況を詳しく説明していた。

「そうですか……私の騎士よ」

「だから、俺は騎士じゃなくて、「魔法使い」だって……」

「だって、貴方はもう連合にも帝国にも属していないんですから、私のモノです」

理不尽な命令、ココに極まりだな。

ナギも可哀想に……

「……ナギに憐みの視線を送っているようじゃが、お主も妾のモノだからな？」

ナンテコツタイノ（ハ　ハ）ノ

「連合に帝国、そして　オスティア。世界全てが私達の敵と言う事ですが……　貴方と貴方の【紅き翼】、そして“双対の鬼”は無敵なんでしょう？　なら、私達が世界を救いましょう」

“双対の鬼”と言うのは、アルマ・アリカ王女がつけた異名だ。また異名が増えたなあ…………

「私の騎士　ナギよ！　我が盾となり、剣となれ！！」
「ハア、俺は魔法使いだって言ってるんだが…………ま、いいかい、俺の杖と翼　あんたに預けよう」

そう言っただけでナギはアルマ王女に跪いた。
その時、アリカ王女がこっちを見ていた。
おい、まさか…………

「我が騎士よ」

マジかよ。

これはやらないといけないのか？
……… 凄いプレッシャーがひしひしと伝わってくる。

《キティ》

《なんだ、真紅狼？》

《一時的だが、許してくれ》

《……… まあ、真紅狼だし、しょうがないか。いいぞ、真紅狼。許す》
《すまないな、キティ》

「分かったよ、アリカ王女」

「我が騎士 真紅狼よ！ 我が盾となり、我が剣となれ！！」
「アリカ王女。俺の覚悟と誇りで 貴女を護ろう」

という儀式みたいなモノを終わった後、ガトウに聞いてみた。

「ガトウ」

「なんだ、真紅狼？」

「『完全なる世界』の首領つてのは分かってるのか？」

「ああ………、どうやら奴らの構成員からは“造物主”ライフメーカーと、また一部の者たちからは“始まりの魔法使い”と呼ばれてるらしい」

「ライフメーカー “造物主”………か」

レーネが率先してやる訳はないから、多分、もう一つの宿ってる方の奴がやってんだろうな。
となると、レーネも救わねえと………

アレ？ 俺、救う人多くねえ？

レーネ、アリカ、アスナとこの世界…………。

まあ、最後のもうでもいいんだけどさ、俺達がやらなくてもナギ達が　って結局レーネを救うから、結果は変わらないか。はあゝ、多いなあ。

だが、『救う』って決めたんだし、絶対に救ってやるよ。

心の整理も終えたときに、アルが何かを思って訪ねてきた。

「真紅狼、“造物主”について…………何か知ってるんですか？」

「…………いや、別に？」

突然のことで、ちょっと反応を返すのを遅れたが、不審に思われてはいないハズ…………

「今、間があつたの」

「ありましたね」

「「あつたな」」

「知っておるなら、話した方が身の為じゃぞ？」

「そうだぞ、真紅狼？」

「真紅狼さんは知ってるんですか？」

「どうなんだ？ 真紅狼？」

アル以外、全員に突っ込まれた。

上から、アリカ、アルマ、ナギとラカンと詠春、ゼクト、ガトウ、タカミチ少年、そして最後にキティだった。

こんなときだけ、息ピッタリだな、オイ！！

「ちなみにここで『知らない』って言ったら、どうなる?。」

敢えて聞いてみた。

超コワイけど……………

そしたら、アルマ王女からの返答が来た。

内容は……………

「そうですね。エヴァンジェリンさんとタカミチ君を除いた人達で貴方を襲います(ニコッ)」

「わーお……………(汗)」

「どうしますか?。」

「いや、しらん……………」
「ナギ、戦闘の準備です」……………よし、かか
ってこいや!!」

覚悟は決めた!

もうヤケクソだあ!!

「やってやるよ! かかってこいや!!」

この後、大規模戦闘となりました。

〈真紅狼 side out〉

結果、ナギ達には勝った。
でも、王女たちの魔力を込めたビンタには勝てなかった。
チクショウ……………（涙）

選択肢は慎重に選ぼう（後書き）

王家の魔力は強いんです。

ある意味、真紅狼よりも最強です。

次回は“造物主”^{レーネ}との関係とかその他色々を詰め込みます。

真紅狼とレーネ（前書き）

毎度、御感想有難うございます！
裂やん様

色々詰め込もうと思ったけど、無理だった。

真紅狼とレーネ

はい、どうにかナギ達には勝ったが姫二人にビンタをしこたま喰らって、両頬がメチャクチャ腫れている真紅狼です。

……………痛い。

涙が出てくるほど、痛い。

それに全身疲れて起きあがれない。

ということで、今現在、愛しの妻であるキティに膝枕してもらって
る。

キティはすごい御満悦の表情だ。

アリカ王女はなにやらキティを羨ましそうに見ているが、知りませ
ん。

ていうか、キティの両腿ひんやりしてて気持ちいい。

「では、真紅狼。話して貰いますよ？ 貴方と“造物主”ライフメーカーの関係を

……………」

「約束だからな。話すが……………ジャック」

「なんだよ、突然？」

「話の途中で茶化したりするなよ？ その瞬間、話を終わりにさせ
てもらってからな」

「……………分かってるって、俺でもそこまではしねえよ」

「本当にそうだな。さて、話すとするかねえ。俺と“造物主”レーネ

”の関係を……………」

【今から955年前だな。

俺がこの世界に来たのが20歳の時だった。

いや、正確には転生をしてきたと言った方が正しいか……

転生した後、俺は200年程この静かに暮らしていたんだが、そろそろこの世界を見て回ろうと、旅に出た。

その時の年は221歳でな。

色々回ってみたんだぜ？

当時のヘラスは連日お祭り騒ぎが起きていたし、グラニクスは商人たちの行き着が凄かった。

アリアドネーはあんま変わっていないな。メガロは、昔はあそこまです優雅で豪華な街になってはいなかったよ。

最後に訪れたのがオステイアだったんだが、適当にぶらぶらと歩いていたら今では“墓守り人の宮殿”って言われている場所に来ちゃってたな。

この場所がどこなのか、聞こうと思つて後ろに居る奴に声を掛けたのが……“造物主”^{レーネ}だった。

奴は最初は自分の事を俺は気が付いていなかったらしく思っていたんだが、俺は気がついていたんだよ。

そこで声を掛けたら、『何者だ？』聞かれてな……。

「名乗って欲しけりや自分から名乗れ」って言っただけで、再び問われたから、無視して通り過ぎようとしたら……突然抱きつか

れたんだぜ？

すげえビックリしたよ。

なんせ、『待つて~~~~！ 行かないで！ 行かないでくださ~~~~

い！！』だぜ？

いきなりのブレイクに驚いたね、アレは……………】

そこまで話すと、質問が飛び交う。

「……………真紅狼さん。貴方はこの世界の住人ではないんですか!？」

「エヴァには話したんだがな、俺はこの世界の住人ではない」

「……………ということは異世界人ということですか？」

アルがすかさず受け継ぎをする。

「まあ、そうなるかな。ちよつとした理由で俺は転生する前の世界に存在する最高神ジイサンに殺されたんだよ」

「……………神が人を“殺す”?!」

「いや、なんか、本来なら人を殺さないんだが、本当に稀に“超法規的措置”で人を殺すらしくて、それに俺は当てはまったらしくてな。殺された後に理由を教えてもらったんだよ」

「その理由とは？」

「詳しいことは知らないんだが、なんでも俺の体内に存在するナニカがとてつもなくヤバいらしいんだってさ。その世界ではなくて、この世界であれば、出てきても対処は出来るであろつと踏んだらし

く、こちらの世界に転生して来たんだよ。転生の際に体の構造が急激に変化してな、今はこうなってるわけ」

能力を貰ったと言うのは言わなくていいな。

【話を続けるぞ？

突然ブレイクした彼女の名前は“レーネ・アルカディア”と言っていた。

俺は気配を消して、後ろに居た時とは比べ物にならないほどの圧迫感を感じられなかった。

俺はこれは憶測としてだが、彼女の体にはもう一人の精神が宿っていて、そいつが本当の“造物主”^{ライフメーカー}だと俺は考えたわけだ。

まあ、憶測は置いといて……だ。

レーネと友人になった俺はそこから会話をした後、「旧世界」……つまり地球の行きたかったので“ゲート”を開いてくれと頼み、“造物主”^{レーネ}の魔力で向こうに渡ったんだよ】

「まあ、俺とアイツの関係はこんなモンだ……。それ以来一度もあってはいない。後、その時はまだ“造物主”の使徒みたいな奴ら

は居なかった」

「貴方の生い立ちは分かりました。次は ライフメーカー “造物主” について
なんですが…… “造物主” は女なんですか？」

「俺の見たところな。だが、ブレイクした彼女は今回の事にはおそろく関与していない筈だ。やったのはおそらくもう一人の方だな」
「もう一人と言う事は、憶測で真紅狼が言った…… 本当の“造物主” のことか？」

「ああ、そうだ。詠春。だが、これも先程言ったように『憶測』だからな……。違うかもしれないがな」

出来れば外れて欲しいものだ。

レーネをあのままにしてほしくもない。

『救う』と決めたのだから、それが間違っていると指摘を受けても、俺は決めたら後は行動に移すだけだ。

プライドとかそんなモノはない……

意地みたいなものである。

その時、ジャックが

「ん？ つまり、真紅狼はそのレーネって娘に気があ……」「こ
ぺっ！？」……」

グシャ！

ベキバキ！！

ゴゴォン！！

バリバリ……！！

ブォオン！！
ドガァーン！

しばらくお待ちください。
ただいま、処罰中でございます。

スゴイモノを見た。
だが、口には言えない。
改めて言うがスゴイモノを見たよ。
大事なことなので、二回言った。

「……………失礼しました」
「あ、うん。と言うわけだ。だから、“造物主”が出てきたら、まずは俺が敵対して、“造物主”からレーネを剥がすから、最初は任せてくれ」
「……………分かりました。最初はお任せします」
「すまないな……………」

関係を話し合った後、俺達は『完全なる世界』に反撃開始した。

真紅狼とレーネ（後書き）

次回、一回ぐらい間を挟んだ後、最終決戦です。

最終決戦は多分、三、四話ぐらいかもしれないです。

最終決戦、開幕！！（前書き）

挟もうと思ったけど、止めました。
一気に最終決戦だぜ！！

最終決戦、開幕！！

（真紅狼 side）

うい、真紅狼だ。

関係を話し合ってから、もう半年が経とうとしてるよ。

時間が飛ばし過ぎなのは、作者の都合だ。

まあ、多少説明すると……………

最初はナギ達は敵の事を“戦争があると儲かる者達”と考えていたが、俺とキティはメガロで会った奴らが本当の敵だと確信していた。そんなでもって、アルマ・アリカ王女と帝国の第三王女テオドラが、なかなか巧みな交渉術や話し合いで敵だと判断した者たちを俺達が片っ端からブツ飛ばしていた。

それから、ようやくナギ達は真の敵があのかざったらしい男どもだと判明したらしい。

そこから、その真の敵の情報を集めていると……………“ライフメーカー造物主”の使徒どもがちよくちよく襲って来やがったのさ。

だけど、最初の二、三回は俺の手で出オチにさせてやったけどな。

あと、愛しのキティと本契約した。

キティにしか話していかないけど、この世界の魔法…………つまり、『ネギま』の魔法は使えない』ということは、アーティファクトも使えないんじゃない？ という結論に行きあたった。

一応、俺がマスターらしいんだがキティがマスターの方が良かった気がする……………

ま、気を取り直して話そう。

キティのアーティファクトは『闇夜のドレス』というらしく、どう

やら身に纏うものらしい。

というか、発動すると既に身に纏っていた。

どんなモノなのかなー？と思って、ナギがふざけ半分で『雷の暴風』をキティに向けて放ったら、吸収して二倍の威力で返って来た。

ナギはまさか跳ね返るとは思っていなかったのか、防御する暇も緩和させる障壁も張れず、直で食らい、気を失った。

その後、色々と試してみたところ、ほとんどのモノが跳ね返されていった。

“ネギまの魔法”、“FFの魔法”、“青魔法”、“暗黒魔法”、“気”、“精霊砲”とかその他諸々も跳ね返していたが、魔法障壁を突破する魔法については無理らしい。

あと、呪いとか異常状態の魔法も倍にして返していた。補助魔法とか回復魔法、あと『闇の魔法』に関しては、キティ自身がOKを出しているのであれば、跳ね返らないらしい。便利だなあ。

そこから、俺達は再び奴らと戦いが始まった。

ラカンが言うには『映画なら三部作、単行本なら14巻位はいくなく』と感慨深く言っていたが、そんなに行くもんかね？

で、今現在、墓守り人の宮殿の目の前のテラスに居る。

「……不気味なぐらい静かなだな、奴等」

「舐めてんだろーよ。たいてい、悪の組織なんてそんなモンだ」

ナギとラカンはやっとした感想を述べていた。

俺は、先程から宮殿を見ている。

何故なら、“造物主”に望遠鏡で見られているからだ。

そして、口を動かした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後、“造物主”は視線を逸らしたみたいだった。

その時、ナギ達はアリアドネー乙女騎士団の団長がナギにサインを求めている。

キミたち余裕だね。

「アリアドネー、連合と帝国の連中が外の召喚魔や自動人形を抑えている間に俺達が突っ込んで、倒してくる。足止め頼んだぜ!!」

「はい!!」

「じゃあ……………いくぞ……」待て、ナギ……なんだよ、真紅狼!？」

「開幕戦の一発を俺がぶっ放してやるよ、お前等は使徒共とやりあうんだろ? なら、無駄な魔力の消費は抑えておけ」

「なら、真紅狼。ド派手なのを頼むぜ!!」

さて、アイツを召喚するか……………。

『幻獣の王よ! 今ここに来れ!! 汝の力を持って目の前の敵を悉く葬り去らん!! 来い、竜王 バハムート!!』

そう叫び、空が割れて、バハムートが出てくると思ったら……
金色の姿をしたバハムートが出てきた。

「げえ！？ バハムート“烈”が出てきやがった！？」
「おい、真紅狼。バハムート“烈”ってなんだ！？」
「うるせえ、ナギ！！ 今それどころじゃねえんだよ！！」 「ガシ
ヨンッ！」 ヤバイ！！」

何か代わりになる受け皿は……… あった！！

「バハムート“烈”！！ あつちに巨大な岩が何個か空中に浮いて
るから、ソレを受け皿にしろ！！」

『ゴオアアアアアアアアアア！！』

バハムート“烈”が移動している間に、俺は鋼系で近くに浮いてる
岩を何個も纏めて巨大な岩を作っ
た。

そこから、バハムート“烈”は後ろについてる、六つの端子を起動
させ、薄い膜を形成し、バハムート“烈”はゆっくりと口にエネ
ルギーを溜め始める。

「全員、聞け！！ 衝撃波に巻き込まれなくなったら、距離を取れ！！」

「どういうことだ？！」

「予想外のモノが来てこつちも困ってんだよ！！」

全員が距離を取ろうと動き始めた瞬間、バハムート“烈”は放った。

ダウンッ！

放たれた一撃は受け皿になった大岩の内部で急激に集束し始めて、内部のエネルギーによって、大岩に亀裂が見え始めていた。六つの端子は召喚魔の方に向いており、いよいよ発射されるらしい。

キュウウウウオオン・・・・・・

「往くぜ……………『エクサフレア』！！！！」

ドウオン！！！！

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

発射された瞬間、他の浮遊岩を吹き飛ばすほどの衝撃波が出た後、召喚魔だけではなく宮殿の入り口の三割近く掻き消し、一部が溶け

ていた。

シュウウウウウ~~~~

「すまん。マジで予想外なことが起きて俺も事態についていけない状況だ」

「もう何も言えねえよ……………。取り敢えず、全員行くぜ!!」

そうして、気まずいまま最終決戦の火蓋は斬り落とされた。

〈真紅狼 side out〉

〈造物主 side〉

私は、連中がそこまで来ていることが分かり、宮殿のテラスにて望遠鏡で見っていた。

そしたら、あの蒼騎 真紅狼はこちらに気が付き、望遠鏡越しに口パクで、こう言ってきた。

“ ちょっと、そこで待ってろや!! ”

…………… フフ、良いだろう。

十二分、相手をしてやろう。

その後、私は奥に引っ込んだ。

〈造物主 side out〉

さあ、ナギ・スプリングフィールドに蒼騎 真紅狼よ……
この世界の命運を掛けて勝負だ！！

最終決戦、開幕！！（後書き）

標準が外れていたから、宮殿全体は溶けませんでした但当たっていたら、“造物主”とアスナ以外は確実に溶けてます。

次回はどうか……なるのか、分かりません。

胎動

（真紅狼 side）

気まずい空気の中、俺達は宮殿内に突入した。

そこに待っていた者達は、“造物主”の使徒である連中だった。

「やあ。“千の呪文の男”に“紅蓮の殲滅鬼”また会ったね。ここいらで決着をつけようじゃないか」

メガロで会った男とその他数名はナギ達と戦闘に入った。

ガキンッ！

ザザザザザザア・・・

バリバリバリッ！！

ゴゴゴゴゴゴッ！！

ドオンッ！

「“紅蓮の殲滅鬼”、奥で主^{マスター}が待ってるよ。……………キミの大事な人もね」

「……………」

それぞれ自分の相手と対峙している中、俺達は奥に進んだ。

「エヴァ」

「なんだ、真紅狼？」

「……………ここから先は俺一人で進むから、エヴァはナギ達のサポーターに回ってくれないか？」

「なっ！？ ふざけているのか！？ 真紅狼」

「頼む」

「……………貸し1だぞ？」

「ああ、分かってるよ」

「……………真紅狼」

「ん？」

「絶対に戻ってきてね？」

そうキティが小さな声で言った後、唇にキスをしてきた。

「大丈夫だ。女神キティから加護キスを貰ったからな。……………じゃ、行ってくる」

その後、俺はトップスピードで“造物主”が居る所まで駆けた。ライフメーカーは後ろ姿で、静かに佇んでいた。

「よお、ライフメーカー」

「来たか、“紅蓮の殲滅鬼”……………いや、『蒼騎 真紅狼』よ」

「俺の名を知っているなら、自己紹介はいらねえな。取り敢えずデメエに一つだけ言っておきたいことがある」

「……………」

「アスナとレーネを俺に返せ」

「返して欲しくば、我を倒すのだな」

「上等だ、このヤロウ。綺麗に解体してやるよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガキンッ！

俺と“造物主”はお互いの得意な戦闘法で激突した。

＼真紅狼 side out＼

＼エヴァ side＼

真紅狼と別れた後、ナギ達の方に戻ってみると、ナギ以外はすでに戦闘が終わっていた。

「私のサポートはいらないな」

「おや、エヴァンジェリン。真紅狼はどうしたのですか？」

「真紅狼なら、「一人でやる」と言って、別れた」

「真紅狼、一人でか!？」

「無理じゃろ!!」

一人でやることに驚く、アル達だったが私は出来ると確信していた。
何故なら……

「それでも真紅狼はやるぞ」

「何故、そう言い切れるんですか？」

「真紅狼は“やる”と言ったら、必ずやる。真紅狼が私との約束を破ったことなど一度も無いからだ」

ガガガガガッ！！
バリバリッ！

『 ああっ！！！』
『 ぐうあああ！！！！』

ドガンッ！！！！

「今の声はナギですね」
「煙が晴れてきたな……………」

雷と砂の衝突により煙が上がったが、次第に晴れていきナギが白髪
のガキを首を掴みあげていた。

『 見事…………… 理不尽までな強さだ』
『 ハア…ハア… “黄昏の姫巫女”はどこだ？ 消える前に吐け』

その時だった。

バスンツ！！

自分の部下ごと、ナギの左の鎖骨辺りを強烈な一撃が貫いた。

「ナギイ！」

詠春はナギを守ろうと駆け寄り、ラカンとゼクトは放ってきた方を向くと、そこには

「馬鹿な！？ “造物主” だと！？」

「いかんツ！！」

『クラティステー・アイギス
最強防護！！！！』

ドゥン！！

ゼクトが誇る最強の障壁で私達を守ろうとし、ラカンも自身の両腕を出してライフメーカーの強大な一撃を防ごうとしたが、一瞬でゼクトの“最強防護”が砕け散り、ラカンの両腕が吹き飛んだ瞬間、私は死を覚悟した。

（真紅狼！！）

バシンッ！

何かが掻き消されるような音が聞こえたあと、ある男の声が聞こえた。

「アブね！！」

「……………え？」

「ちゃんと生きて帰ってくるって言っただろ？　まあ、まだ倒せていないがな」

『真紅狼！？』

そこには少しばかり服がボロボロになっていた真紅狼が私達の前に立っていた。

〈エヴァ side out〉

〈真紅狼 side〉

激突した俺と“造物主”はお互いに距離を取った。

距離をとれたことをいいことに造物主は、自身の後ろから幾つもの魔方陣を展開し、そこから岩も貫くほどの漆黒の魔力砲を俺に向けて放った。

キュンッ！　キュンッ！　キュンッ！

俺はその間を縫って行くようにかわしながら行くが、ほんの少し掠っている為、端がボロボロになりながらも、『七ツ夜』を右手に持ちながら、造物主に迫っていく。

（捕えた！！）

閃走・水月

一気に距離を詰めて、すかさず……………

閃走・六兎

「……………蹴り穿つ！」
「……………ぐっ！」

そのままサマーソルトを決めて上空で斬りながら、造物主を空中で掴み下に蹴り飛ばす。

「貴様！！」

「……………」

造物主は立ち上がった時、不意に動きを止めた。

「……………ふむ。負けたか、あ奴等から先に倒すか」

シュンッ……………

そう言った造物主はどこかに転移した。

どこに行きやがった？

『あ奴等』…………… ナギ達か！？

マズイ！！

俺も急いでナギ達の元に向かった。

外に出てみると、すでに造物主がナギ達に向けて、先程俺に分散して放った魔力砲を纏め上げた程の大きさであり、威力だった。

（くそっ！ 消すには使えない！！）

俺は移動しながら、眼を閉じた。

そして再び眼を開いた時には、紅から蒼に変わっていた。

（どこだ?! あの魔力砲の『点』は!!）

あと三秒も無いうちにナギ達にぶつかる強大な魔力砲の『点』を探すと、あった。

俺は素早くその『点』を突いた。

「アブね!!」

『真紅狼!?!』

「……………大丈夫か？」

「うん」

俺の可愛い可愛い妻^{キティ}を殺そうとしやがったな……………

ああ、さっさとレーネを助けて殺してやろう。

その時、俺に変化が起きていた。

髪の色が“黒”から端から少しずつ“紅”に変わっていた。

レーネの意識がまだ残っているなら……………

「レーネ!! 今助けてやる!! 俺の声が聞こえてるなら、ほんの数秒でいい! そいつの体を止めといてくれ!!」

「…………フハハハハハハ、あの娘なら私の奥底で閉じ籠めておる! 貴様の声な…………「ギシッ!?!」……………なっ!?! 右腕が!?!」

どうやら、僅かな意識だが聞こえていたようだった。

レーネが創ってくれた数秒を無駄にはしない!!

俺は『直死の魔眼』を強くして、造物主のある線を見た。

見る……………観る……………！ 視る……………！！

「視えた！！」

俺はレーネと造物主が重なっている肉体の『死の線』を見極めた。

タツ！ タツ！！ タツ！！！！

「
極彩と散れ」

「……………ぬううううう！！」

造物主はレーネの拘束に抗いながらも、動く方の左手で漆黒の魔力砲を空中にいる俺に放った。

グシャ！！

ブシャアアアアアー！！

「……………ッ！！」

横腹に入り、血が飛び散るがそんなこと気にもせず、刃を振り降ろし……………斬った。

バキンッ！

何か割れる音が聞こえた後、造物主は二人に分かれた。

俺は着地した後、素早くレーネを抱え込んでナギ達の所まで後退した。

造物主は、一人になってしまった為、宮殿内に逃げ込んだ。

ズシャアアアア……………

「アル！ 悪いがレーネを頼む！！ 俺は造物主を仕留めに行く！！」

「待てよ、真紅狼！ 俺も行くぜ！」

「なら、ワシも行こうかの。この中では一番軽傷だしの」

「勝手についてくればいい……………行くぞ！！」

俺達は宮殿内に入ると造物主をすぐに見つけた。

三人で迫っていたが、ナギとゼクトは怪我が痛みだして、入口付近で膝をついてしまったので、俺一人で造物主と対峙した。

「くっ！」

「決着をつけようぜ、造物主！！」
ライフメーカー

「……………あの娘」

「……………あ？」

「あの娘、確かレーネと言ったか？ 自分がやっていないとは言え、自分の発言で人が死ぬと言う表情は、とても愉快だったな」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

造物主は、真紅狼の髪が少しずつ“紅く”染まってきている事に気付かず、さらに真紅狼を怒らせていく。

「さらには、貴様と対峙した時には『真紅狼を傷つけないでええ！』と全くもって『恋する乙女』とは面白いものだな！」
「……黙れ」

この時、俺の体の中で何かが蠢いた。
そして、髪はすでに三分の四以上が“紅く”染まっていた。

舞台が変わって、エヴァ、アリカ、レーネ達……

真紅狼の体の中で何かが蠢いた瞬間を無意識の内に感じ取っていた。

「真紅狼、やめろ」
「真紅狼よ、それはダメだ」
「真紅狼さん……………目覚めちゃ……………ダメ……………」

二人が突然、“真紅狼”に向けて呟くのを聞いて、アルは理由を聞いてみた。

「どうしたんですか？ お二方？」

「分からん、だが……………」

「だけど、真紅狼さんの……………何かが……………目覚めそうなんです」
「なにかって何が？」

二人は答えなかった。

二人は必死に真紅狼を止めるという思いを祈ってた。

そして、再び真紅狼達側へ……………

「想いあった二人が敵対する時の気分はどうだった！？ 蒼騎 真紅狼よ！！」

その時、真紅狼の後ろの空間が割れ、そこから暗黒が周りを包み込んだ。

＼真紅狼 side out＼

胎動（後書き）

次回はアイツが目覚めますよ!!

と言っても、すぐに投稿するんですけどね（笑）

『天狼繋ぐ神滅の獄（ヴァナルガンド）』

バキンッ！

ジャララララー！！

バシャンッ……………

ベキンッ！

ジャララララ……………

ボチチャンッ！

バキ……………ベキ……………バキインッ！

ガキイン！

バキイン！

どこかから鎖の外れる音が聞こえた。

そして、この時、完全に真紅狼の髪は“紅く”染まった。

「造物主。お前はこの俺を起こすべきではなかった」

真紅狼が造物主の前からゆっくりと消える。

そして……………

『ウオオオオオオオオオオオオオツッ！！！！』

この戦場に居る者全てに、咆哮が聞こえた。

そして、造物主、ナギ達にエヴァ達、最後に一時的に共にしていたアルマ・アリカ王女は『真紅狼の心の心象風景飛』に飛ばされた。

バシャアアアアアアアー！……………

辺りは暗く、周りを把握できる物も無く、遠くからは水が流れる音だけが聞こえる。

アルビレオ・イマは魔法で明かりをつけた。

「アルマ・アリカ両王女！　こちらです！！」

「皆、無事……………とは言い難いの」

「むっ！　貴様等は！！」

「なっ！？　造物主だと！！」

造物主は攻撃魔法を放とうとしたが、発動どころか魔方陣すら出なかった。

「なんだと！？」

「……………！！　アル、目の前を照らせ！！」

「なにか見つけましたか、エヴァンジェリン」

「何かの建造物が見えた。あと、何かがこちらに向かって来てる。

それにいい加減に下を見る……………血の海だ」

エヴァによって気が付いた全員は驚く。

そして、エヴァが見つけた建造物を見て絶句する。

その建造物はどうやら、神殿みたいな造りになっており、奥の台座の前には両端に石柱が五本ずつ立っていた。

その建造物は人の骸で建てられていた。

石柱も奥にある台座も全て骸で建てられていた。

ボツ！　ボツ！　ボツ！　ボツ！　ボツ！

五本ずつの石柱に紅黒炎が灯る。

そして奥からゆっくりとこの世界の主がやって来た。

「なんだ……………これは……………？」

この世界の主は吼える。

そして来訪者達は、現実世界に戻った。

「なんだ、今は……………？」

エヴァは一人つぶやく……………

その時、目の前で造物主と先程見たモノが対峙していた。

紅き狼は吼える。

吼えた後、人の眼では追えないほどの速度で造物主に迫り、喰らい付こうとする。

ガチンッ！

だが、その噛みつきは外れるが、外れた時に発生した歯と歯の音が、人々の恐怖を呼びこむ。

造物主はありったけの魔力で魔法を放ち、紅き狼を倒そうとするが効いてる感じは見られず、むしろ吸収しているように見えていた。その為、造物主は“黄昏の姫巫女”の元に戻って、急いで『世界を無にする帰す魔法』………“リライト”を発動させようとして、撤退しようとした時、紅き狼の凶悪な爪が降りかかり、右腕の付け根ごと吹き飛ばした。

「がああああああ？！」

苦痛の声を上げながらも“黄昏の姫巫女”の元に向かう造物主。だが、目の前に紅き狼が大きく口を開け、全てを貫きそうな牙によって体を噛み千切られた。

グシャッ！

ブチブチブチ……………！！

ブシャアアーーーーー！！

「ぐああああー！！　ぐつ、いいだろう！！　私はこのまま消える
としよう。だが、忘れるな！　この世界には絶望と偽りしかない！
！　その時が再び訪れた時、貴様たちの苦痛と絶望の顔を見てやる
！！」

造物主は、そう高々と声を上げながら、魔力の渦に飲み込まれてい
った。

紅き狼は造物主が完全に消えたのを確認した後、エヴァの所まで疾
走した。

そして突然空間が割れ、紅き狼は戻っていった自分の安置場所に。
紅き狼が消えると同時に真紅狼が空から気を失いながら、降りてき
た。

『真紅狼！？』

真紅狼が降りて来た瞬間、「世界を無に帰す魔法」が発動し掛けよ
うとしたとき、
アルマ・アリカ王女に連合、帝国の全員が力を合せ、その魔法を止
めた。

戦争は100年を経てようやく

終戦した。

『天狼繋ぐ神滅の獄（ヴァナルガンド）』（後書き）

『天狼繋ぐ神滅の獄』^{ヴァナルガンド}の詠唱でも考えようと思います。

相当、時間掛かるとは思いますけど・・・

これにて魔法大戦の激動部分は終わりです。
次からは暗躍していた者達との戦いです。

あ、私3Gを購入しました。

怒り喰らうイビルジョーだろうが、ジンオウガ亜種だろうが、かか
ってこいや！！

終戦…………そして、崩落の危機（前書き）

毎度、御感想有難うございました！
ゆや様。

今回からはオスティア崩落→麻帆等に行くまでです。

終戦……………そして、崩落の危機

（真紅狼 side）

あの戦いからどれほど寝たか分からないが、ようやく俺は目が覚めた。

そして、最高神^{ジイサン}が俺を殺した理由がわかった。

あの狼が全てを教えてくれた。

そりゃ、あんなのが現代に出たら、国どころか世界が滅びかねないね。

しかも、信仰関係者には天敵だな。

いやはや、困ったね。全く。

「で、ここはどこだ？」

見知らぬ天井なんだが、上が凄い高い……………見えねえ。

「……………ここは妾の王宮じゃ」

「おや、アリカ王女……………久しぶり？」

「一週間で寝込めばそうなるかの……………」

一週間で寝ていたのかよ。

なら、日付の感覚が鈍るな、それは。

「……………お主を看病してくれた、二人に礼を言っておくのじゃぞ」

左右を見ると、キティとレーネが二人揃って腕を枕にしながら寝ていた。

「……心配かけたな、二人とも。」

俺は起きあがり、薄いシャツ一枚だったので上にコートを羽織った後、キティとレーネを順番にベッドの上で寝かせてあげた。

「……終わったな」

「……うむ」

アリカはどこかしら沈んでいる。

「アリカさんよ」

「な、なんじゃ?!」

「そんなに驚くこともないだろう? 何か俺に隠してない?」

「………なにも」

あ、これは絶対何かを隠してるな。

「いやいや、絶対に何か隠してるな?」

「別に何も無いと言っておる!」

「お兄さんに話してみ? それなりに解決策が見つかるかもしれな

「ゴリンツ!」……く、首が!」

ギュッ！

首を思いっきり回転させた後、後ろから抱きついてきた。

「……どうしたよ？」

「……すまぬがもう少し傍に居て欲しい……」

そこには普段のアリカ王女ではなく、ただの少女の様なこえだった。
というか、アリカ……お前、結構着痩せしてたんだな。
胸の感触がデカイ……！！

「そういえばさあ……」

「なんじゃ？」

「アスナは？」

「……」

「オイ、なんだ、その沈黙は？」

「……
真紅狼……！！」

アリカは黙った時、目覚めた二人がやってきた。

「真紅狼！ 心配したんだぞ……！」

「真紅狼さん、どうしてあんな無茶するんですか……！」

「いや、倒せたんだから……」

「「黙れ（つてください）！！」」

ええー

反論の余地なしですか？

そりゃ酷くね？！

「あと、あの狼と……」

「あの世界は何ですか！？」

「いや、また後でつてのは……」

「却下！！」

ええー

反論の（ry

「「事細かい説明をしろ（してください）！！」」

「するから、怒らないでください。ついでにアリカも聞いていけ、
気になってるんだろ？」

「……うむ」

「俺が神によつて殺されたのは、話したな？ どうやらアレが理由
みたいだ」

「あの狼と世界が？」

「違うぞ、レーネ。……いや、違わないかな。あの狼の真名がヤ
バイんだよ。エヴァは旧世界の出身だから分かんと思うが、旧世界
のある方面に“北欧神話”というのがあってな。神々の話が逸話と
して残っているんだが、その逸話の中にある生き物がエヴァ達が見
た狼なんだよ」

キティは“北欧神話”で勘づいたらしい。
理解が早くて有難い。

「じゃあ、真紅狼。あの狼はあの狼か?!」

「そうだ、“天を裂き、地を呑み込む化物”や“神を喰らうモノ”
と言われている者の名は……フェンリル神喰狼だ」

「フェンリル神喰狼……」

「そして、レーネ達が言っていた“世界”とは俺の心象風景が具現化したものだ」

「……具現化……ってことはアレがお主の心の風景と言う事か!？」
「そうなるかな。ま、そうなっちまったモンはしょうがないさ」

三人は黙ったままだった。

少し離れようと立ち上がるうとした時、突然、押し倒された。

「え、ちょ、なに!？」

「あの世界はもう……元には戻らないのか？」

「発現したしな、無理だろうよ。心の心象風景を具現化することを『固有結界』って言うらしいぞ? (Fateの知識は多少持つてるけど、確かそうだったよな?)」

「真紅狼さん」

「はい、なんでしょう? レーネさん」

何故か敬語になってる俺。

本当になんでだろうか？

「 900年前に貴方に会ったときに一目惚れして、ずっと貴方の事を想っていました」

あ、この後の事が予想できるって悲しいね。

「 愛してます。私と共に一緒に歩いてくれませんか？」

「あー……………（チラリ）」

俺は横目でキティの方を見たら……………

「私は別に構わないぞ？ 一人や二人増えたところで、そういうところもあってくれた方が自慢できるしな」

一体何を自慢するんだよ？ 何を。

「こんな俺でよろしいのであれば」
「構わないですよ、真紅狼」

とまあ、レーネとの結婚が決まった後、アリカは思い出したように言う。

「そうじゃ。これから終戦の式典を開くから、お主たちも来るようにの」

「式典って？」

「終戦の式典じゃ」

「俺は、いかねえよ？」

「何を言っておる、世界を救った英雄が……」「はい、ストップ」……なんだと？」

「あのな、俺は悪党……つまり、“悪”なわけ。『悪から英雄は生まれない』わけ、お解り？」

「だが……！！」

「くだい！俺はレーネを救いたかったただけなワケ。その結果が世界を救ったと言う事になるだけで、言わば“過程”の話なんだよ。これ以上は言わせんな」

「……分かった。お主たちを除いて、式典を始めるとしよう」

アリカ王女……じゃなかったな。……アリカ姫か。

なーんか、空気がピリピリしてんだよねー？

まあ、その内分かるだろ。

（真紅狼 side out）

（アリカ side）

真紅狼の様子を見に行くと、上半身を起こした状態で起きていた。真紅狼に現在の状況を伝えた後、外に出ることした。しばらくお互い黙っていると、突然、真紅狼の方から声が掛かって来た。

「アリカさんよ」

「な、なんじゃ!？」

ビックリした私は、声を上げて返事をした。
気付かれたのか!？

「何か俺に隠してない？」

そう言われた時、心が少し痛んだ。
だが、お主まで巻き込むわけにはいかない……
故に知らぬフリを突き通した。

「何もない」

そう言うと、真紅狼はしつこく聞いてきた。

“お兄さん”とか自分で言っておるが、お主は相当年を食っておろ
うが。

私は最後の名残として、顔を見られたくないため、顔を無理矢理正
面に向かせた後、後ろから抱きついた。

「……どうしたよ？」

「……すまぬがもう少しだけ傍に居て欲しい……」

この時の私は何故こんなことを言ったのか、分からなかった。少し経つと宮殿の方から、エヴァンジェリンとレーネが走ってきていた。

そして、あの狼と世界のことを話したあと、式典の話をした。

「俺はいかねえよ？」

そこから放たれる言葉は驚愕の一言だった。

理由は“自分が悪だから”というその場で考えたようなものだったが、無理に参加させるのも悪いと思い、その意見を尊重させた。

「……分かった。お主たちを除いて、式典を始めよう」

そうして、式典が始まり……………

「おい、アリカ姫さんよ」

「なんじゃ、ナギ」

「真紅狼はどうしたんだよ？」

「あ奴なら出ないそうだ」

『はあ！？』

「あ奴がいうには『悪から英雄は生まれない』だそうだ」

「あ。あー、そう言えば真紅狼達って、元はと言えば賞金首だった

な」

「単なる恥ずかしいだけじゃねえーのか？」

「まあ、彼らなりに思う所があるんでしょ？」

と、ナギ達は勲章式で小声で話していたが、妾は言いたかった。
だから……

「……………にて、勲章式を……………姉上、少しよろしいか？」……………どうかしましたか、アリカ？」

「ここに居る、アルマ女王の妹のアリカじゃ。終わる前に皆に話しておきたいことがある」

そういうと式典に来ている者達はざわつく。

「この勲章式にはまだ表彰されていない者たちが二人居る。じゃが、その者達はここに居る者たちみたいに世間的によく思われていない者達なのじゃ。その異名は“紅蓮の殲滅鬼”と“闇の福音”！！」

ざわっ！

式典の来訪者達は騒がしくなる。
群衆の声からは「“紅蓮の殲滅鬼”に“闇の福音”！？」、「闇の大魔法使いの二人が英雄だ！？」、「最高賞金首の二人が世界を

救ったなんて認められるか！！」といった批判の声が聞こえてくる。

「皆、静かにするのじゃ！！ 確かに二人は賞金首じゃが、この二人がいなければ、戦争は終わらなかったかもしれないし妾たちは死んでいたかもしれぬ！ 戦争を終わらせた二人を責めることは出来ないハズじゃ！ そして、この放送をどこかで聞いている二人は今ココに来て欲しい」

「式典が見える所に居る」と言っておったから、聞こえてると思うが……

（アリカ side out）

（真紅狼 side）

式典が始まって、耳を傾けているだけにしていたが突然、アリカ姫が俺達のことを言いだした瞬間、見てしまった。そして、来て欲しいと言ってきた。

「…………… ちょっとさあ、さっきの話を理解しているのか？ あの姫さんは？」

「だが、行かなければおそらく式は終わらないと思うぞ？」

「往くしかないのか？」

「だろうなあ」

「いいじゃないですか、真紅狼。貰えるモノは貰っておきましょう」

「レーネはこんな調子だし。行かなかつたら王家の魔力のビンタが飛んで来そうで怖いしなあ。アレ、痛いんだよなあ」

としみじみ呟く俺。

本当に痛いんだよ、アレ。

と言う事で、現在鋼糸で滑空中……

「……………来てやったぞ、王女。いや、姫よ」

「……………」

「来てくれたことに感謝する」

その時だった。

群衆の中から、一人の男が俺目掛けて大剣を振り降ろしてきた。

「家族の仇!!」

ブンッ！

俺は左に避けた後、その回転の勢いで右足を腹に放ち、蹴り飛ばした。

ドロッ！

「…………ぐう!?!」

……………ドスンッ

「家族の仇……か。逆恨みもいいところだな」

そついうと群衆は怒号を上げた。

「犯罪者がどの面下げて出てきた！」、「殺人鬼め！ 殺してやる！！」などと恨みつらみを言ってくる。

「だいたいよお、賞金稼ぎや傭兵つてのはな、常に死と隣り合わせのモノなんだよ。特に賞金稼ぎはな。賞金首を倒すつてことは、無傷や殺さずなんて出来やしねえんだから、基本的に殺すことが多い。だからな、常に『殺される覚悟』が必要なんだよ。それなのに自分達は人を『殺す覚悟』があるのに『殺される覚悟』は持っていない？ ふざけてんのか？ 失敗したら生きて逃してくれと思うってんのか？ あ？

しかも、先程の男が『家族の仇』つて言っていたけどな、そいつが殺されたのは“実力”がないから殺されたんだよ。“実力”があつたなら、俺を殺せたかもしれない、違うか？ だからな、そいつの親族に恨まれるつてのはお門違いなんだよ。多分そいつは、その事実から目を逸らしたくてそいつの家族を殺した俺を恨んだわけだ。だから最後に一つ言っておく。

『殺される覚悟』がない奴等は今すぐ賞金稼ぎや傭兵をやめろ。はつきりいつて迷惑だ。

…………… なんて、式典なのに説教なんかしなきゃならんだ」

だから、めんどくさかったんだよ。
こうなる予感があったから。

「皆、何か思う所があるかもしれんが、この者達も世界を救ってくれた英雄じゃ……」「形式的でいいぞ」……しかし！」
「どうせこの雰囲気の中、俺を英雄として認めたい奴なんて、一人もないしな」

そうして、俺の説教で式典の空気は壊されたまま終わった。
式典が終わり、レーネの所に帰ろうとした時、どこから「ズズンッ！」と鈍い音が小さな音で聞こえた。

「なあ、なんか地面が沈む音が聞こえないか？」
「私には聞こえなかったぞ？」

気のせいだと思っていたがその三時間後、事態が動いた。
真紅狼 side out

くアリカ side
式典が終わり、真紅狼と別れた後、遠くから崩壊の音が弱々しいがはっきりと聞こえた。

「始まったか………！」

「両殿下！」

「ガトウ、現在の状況はどうですか？」

「はい。式典をここの離宮に全国民を集めている為、迅速に避難を行えば、間に合いますがそれほど時間はありません！」

「……結論はやはり……」

「はい。このオステイアは……墜ちます!!」

「では、老人、女性、子供、病人は一人残らず助けなさい！多くの船を魔力消失が少ない場所に泊め、多くの国民を救うのです!!」
「ハッ!!」

ガトウとタカミチ君は走って現場に向かった。

「姉上」

「アスナを封印したときから分かっていたことよ、そうでしょ？
アリカ」

「……はい。私達も現場に向かいましょう!!」
「そうね」

真紅狼、もう会えないかもしれんな。

＼アリカ side out＼

……俺は人からの命令が嫌いなんだよ

終戦……………そして、崩落の危機（後書き）

レーネとの結婚です。

反省はしてるけど、後悔はしていない（キリッ！

名前の方ですが、“蒼騎　レーネ”になります。
そして、第二夫人です。

これから章のタイトルは『暗躍するモノたち』です。

MM元老院（前書き）

クリスマスに投稿しようと思ったけど、無理だったorz

毎度、御感想有難うございます！

GMS様！

今回はクリスマスに投稿できなかった分まで一気に投稿するぜー！
！！

MM元老院

（真紅狼 side）

式典も終わったので、こちらの隠れ家に一時帰還しようと思ったら、
どういうわけかキティとレーネから『魔法が使えない』と言ってきたので、俺も『ファイア』を唱えたが発動しなかった。

「……………これは魔力自体がねえな」

「真紅狼、これは『世界を無に帰す魔法』を抑え込むために“黄昏の巫女”を中心に『反転封印術式』を展開したんですよ」

「なるほど……………結果がコレか。アスナの“魔法完全無効化”によって『世界を無に帰す魔法』止めた代わりの代償がオステイア全体による魔力消失か」

だから、アリカはあんなにも沈んでいたのか。

世界を救う代わりに自分達の国を滅ぼしたってか？

……………ふざけるなよ、あのバカ！！

「……………どうする？ 真紅狼、移動方法がないぞ？」

「キティ。バカを言うなよ。魔力は消えても、俺には剋がある。鋼糸はバリバリに動いてるし、こいつで脱出だな。レーネにキティ、俺に掴まれ」

「「はい（うむ）」」

俺はまだ浮遊している岩に鋼糸を巻き付けて、次から次へと飛び移

っていく。

その時、ナギ達が使用しているオンボロ船があつたのでそこに着地した。

「ちょっと、邪魔するぜい」

「真紅狼！？　どうやってここまで来たのです？」

「企業秘密で。でさあ、アルマ・アリカの二人に通信つて繋がる？」

「今、ちょうどナギが話してますよ」

「よし、ちょっと割り込ませてもらうか」

そうして、俺は二人を甲板に置いて中に入った。

「真紅狼 side out」

「ナギ side」

俺達は姫さんに急かされて、オスティアを脱出したが、その後、いきなりオスティアが崩落し始めた。

「おいっ！　姫さん！！　これはどういうことだ！？」

『どうもこうもないですよ、ナギ。簡単なことです。世界を救うために私達の国を犠牲にしたのです』

「何故言わなかった！！？」

『貴方に言ったところでどうかなりますか？　この魔力消失という中、貴方は満足に空も飛べないのに』

「くっ……」

『貴方達にはまだ崩落していない地区に浮いている浮遊岩の破壊をお願いします。そして救助活動が終わり次第、ここから去りなさい』

そして背中を見せながら去ろうとした時、アリカ姫が声を掛けてきた。

『すまぬ、ナギ。これもお主たちの為じゃ』

「だがよ!!」

『最後に真紅狼に礼を言っておいてくれ。』
「感謝する、我が騎士よ」と『

まるで最後の別れみたいな言い方だった。

俺が何か言おうとした時、隣から予想外の人物の声が飛んで来た。

「ふざけてんじゃねえぞ、バカ姫!」

そこには蒼騎 真紅狼が居た。

「ナギside out」

「アリカside」

妾は真紅狼がその場に居ないことだと思って言葉をナギに託した。
その時………

『ふざけてんじゃねえぞ、バカ姫!』

「なっ!?! いつの間に………」

『「すまぬ」からだ。魔力が使えないから去れ？ 舐めてんのか、アンタは?!』

「だが、そうだろう？ お主も魔法を使う身じゃ。魔力消失現象の中では……って真紅狼はどこに行ったのじゃ?!」

『殿下、真紅狼ならその……そちらに向かいました』

「なんじゃと!? ……（コンコンッ!）……真紅狼!? と、とにかくお主たちは先に脱出するのじゃ!」

すぐに通信を終了した後、真紅狼達を中に入れた。

「何故、来たのじゃ!! あのまま脱出してればよいモノを!!」

「うるせえ!! 俺は他人のフリして命令されるのが一番嫌いだよ!!」

「アリカ姫! 大変です!! 貧民街スラムの避難が遅れてます!!」

「クルト! そのスラムはどこだ!!」

「えと、あちらの方角です!」

そう真紅狼に場所を伝え、真紅狼は甲板に出ようとしたので何をするのかを聞いた。

「真紅狼! 何をするつもりじゃ!?!」

「俺が島の墜落を限界まで持たせてやるから、その内にさっさと避難させろ! ある程度は付き合ってやる」

真紅狼はそう言って妾の制止を振り切り、甲板に出た後、何かが島

の下に張り巡らせた。

キュルツ！

ピーーーン！！

そうすると、ゆっくりと墜落し始めた島が止まった。

『おお！ 墜落が止まった！！』

「感心してる暇があったら、動きを止めるんじゃないか！ 一時的にしか止まれねえんだよ！！ さっさと動け、このボンクラ共が！！」

真紅狼の怒号で気が付いた者達は、急いで船の手配やら安全の確保などといった事務を迅速に行っていく。

真紅狼が頑張っているうちにエヴァンジェリンとレーネにある頼みごとをした。

『スラムの避難、完了しました！！』

「じゃあ、不時着させるぞ！！」

島を不時着させた真紅狼を呼び付けた。

「真紅狼！ ちょっと来てくれぬか！？」

「なんだ、アリカ姫？」

「……………すまない。『スリプル』」

「なっ！！？ エヴァ、おま……………え……………zzz」

真紅狼に不意打ちで眠らす魔法をエヴァンジェリンに放ってもらった。

ここまでしてくれた、それで十分だ。

「エヴァンジェリンにレーネよ。対呪紋を施した小さな船を用意した。それで真紅狼を連れて、去るのじゃ」

「……………いいのか？」

「構わん。真紅狼は多くの我が民を助けてくれた。それだけで充分じゃ。では、さらばじゃ」

「アリカさん。御武運を……………」

真紅狼は眠らせたまま、船に乘せられて姉上と妾が乗っている船から離れていった。

本当に最後まで感謝する。

〈アリカside out〉

〈真紅狼side〉

眠らせられた後、俺が気が付いた時にはすでにオスティアではなく、隠れ家のケルベラス大森林に居た。

「……………くそっ！」

「真紅狼、すまない」

「キティ……………アリカに頼まれたのか？」

「ああ。『スラムの避難が完了次第、船で撤退しろ』と頭を下げて言ってきた」

「あのバカ姫！ 何を考えていやがる！！ あのままじゃメガロの連中に拘束されちまうだろーが！！」

「昨日、大々的にニュースでやっていたよ。アルマ・アリカ両名が拘束された。」

「罪状は前オスティア王を殺したと言っていたが……………」

「MM元老院の情報改竄だな。罪をなすりつける気か……………。ところでレーネはどうしたんだ？」

「レーネなら今、ある魔法薬を造ってもらってる」

「魔法薬？ なんの？」

「私の身体が成長する薬だ。『そういう薬を造れないか？』と訪ねてみたら、“造物主”と分離した時に知識とか術式構成能力がレーネに与えられたみたいでな、その知識の中にあつたから、今創ってもらってる」

「ということは、キティは幻術いらずで大人姿になれると？」

「うむ！ 真紅狼、嬉しいだろうー！！」

「いや、嬉しいんだけどさあ……………」

分かつちやいないな、キティ。

「何か不満でもあるのか？」

「体が大きいとさあ、キティを抱き枕に出来ないじゃん？ それを思うとなんか複雑な気分で……………」

「なっ……………／／／」

うーむ。難しい選択だ。

だが、大きくなれるならそちらの方がいいかもしれないな。

「まあ、大きくなったら、なったらで楽しめばいいか」

「……………優しく頼む／／／」

顔を真つ赤にしながら、小さな声で呟く。

そつすると下の階から、『出来たー！ー！』と大きな声でレーネが魔法薬を持ってやってきた。

「出来ましたよー！ エヴァさん！！ あ、真紅狼。目覚めたんですねー！」

「取り敢えず、落ち着いてエヴァに魔法薬を渡してやってくれ」

「あ、はい。どうぞ、エヴァさん」

「ああ……………（ゴクゴク）」

「一応言っておきますが、そんなに早く効果は出ませんので。数年、数十年は掛かりますよ？」

「それぐらいすぐに経つさ……………」

「レーネに聞きたいんだが、レーネは不老不死なのか？」

「いえ、私は不死ではないですが、不老ですよ？ 若干、不死に近いですが……………」

「なら、共に居られるな。あと、ダイオラマ球って持ってる？」

「ええ。ありますよ。数個ですが……………どうするの？」

「この隠れ家を入れて、旧世界で別荘として使おうかと思って

な。というか、レーネは旧世界に行けるのか？」

「私は今は“造物主”では無いですからね。ちゃんと行けますよ」

「じゃあ、あちらでゆつくり過ごせるな。まあ、あのバカ姫から報酬を貰ってからだけだな」

そうして、ゆつくりと一年半が過ぎた。

〈真紅狼 side out〉

〈クルト side〉

あれから、一年半後が経ち……

僕は今、メガロメセンブリナに居ます。

オスティア崩落からずっとアルマ女王とアリカ姫のそばに付き添ってます。

オスティア崩落後、MM元老院でオスティアの民を各国に入れてもらう様に何度も要請していましたが、そのアルマ・アリカ様、両名がああ戦争の重犯罪者として仕立て上げられて、その三ヶ月後、二人の処刑が決まってしまったのです。

僕は一目散にナギ、そして真紅狼に連絡しました。

「ナギ！！ アルマ女王を救うんですよ！！ 一人の男として！ 貴方が救わなければ誰が救うんですか！？」

『……だが、姫さんは「多くの民を救え」って言ってたぜ』

「……っ！ 見損ないましたよ、ナギ！！ 貴方がそんな人だったなんて……！！」

『……クルト君』

「はい、何でしょう詠春さん？」

『真紅狼はなんて言っていた？』

「真紅狼さんなら、『一人助けないといけない奴がいる。そいつを助けてから向かう』とあと……」

『あと？』

「処刑場所をしつこく聞いていました。場所は“ケルベラス溪谷”だと言ったら、凶悪な笑みを出しながら通信を切りました」

その後、真紅狼さんとレーネさんにある調査をされたので、今も調査中ですがね。

「では、失礼します」

『ああ。知らせたことを感謝する』

通信を切った後、真紅狼さんとレーネさんの頼みごとの続きを始めた。

（クルトside out）

さて、封印された姫でも救出しに行くか……

MM元老院（後書き）

クルトが行っている調査とは、言わなくても分かりますよね？（チラッ・・・）

そして、エヴァ様が大人姿になります。
異論は認めない！

極彩と散れ

（真紅狼 side）

クルトからの連絡後からもう二カ月が経とうとしている。

キティはアレ以降、ちよつとずつだが身長が伸び始め、体型が大人の女になってきていた。

現在、俺達は……………

ゴオオオオオオオッ！！

「やかましいっ！」

ドンッ！

『キイイイイイッ！』

墓守りの人の宮殿内にいる。

つまり、旧オスティア王国にいる。

なんというか、墜落してから一年と十一カ月が経っているが、もはやダンジョン化してる。

進むたびに魔獣に出くわしたり、炎、水、風、土、氷、雷の上位精霊に出くわしたりとエンカウント率が半端ない。

……と、文句を言いながらも封印されたアスナの安置場所までやってきた。

「さて、アスナはどこだ？ レーネ」

「こつちですよ、真紅狼」

レーネの記憶を頼りにここまでやってきていた。
そうやって案内された後、目の前に封印されたアスナが居た。

「……………セイ!!」

ゴォン!

バキ……ベキベキ……バキンッ!!

カランッ! カランッ……

俺はアスナを封印している氷の中心に拳を叩き込んだ。
そこからひび割れていき、最後は綺麗に砕けた。

「アスナ、大丈夫かー?」

「シ……………ンク……………□……………ウ?」

「言葉が流暢に話せないのはしょうがないが、意識があるだけでもよかったよ。次は“ケルベラス溪谷”だな……………キティ、レーネ。行くぞ」

「「ああ（はい）」」

俺達は墓守り人の宮殿を後にして、一カ月を掛けてケルベラス溪谷に向かった。

あそこにはアイツが居るんだが、元気にしてるかな？

＼真紅狼 side out＼

＼アルマ・アリカ side＼

私達は今、監獄の中に居る。

「なんだよ。今日も食わなかったのか？ アンタ達に死なれちゃ困るんだよなー。しかし、いい気味だな。なんせアンタ等二人はあの戦争を引き起こした張本人達なんだろう？」

そう改竄された情報を信じて、私達の陰口をたたく衛兵が食事を下げた時、元凶がやってきた。

『あ、議員！ こんな辺境まで来て頂いて……！』

『うむ、御苦労さま。下がっててくれ』

『しかし！ 「大丈夫だ、話は付けてある」……分かりました』

その男はゆつくりと皮肉を言ってきた。

「最古の王家の末裔のお二人にこのような仕打ちは……誠心心が

痛みます」

「心に思っていないことをよくもまあ……………！」

「刑の執行は一ヶ月後に決まりました。最後に今一度お尋ねします。

……………黄昏の姫巫女に至る方法とその封印を解く方法を教えなさい

！！」

「…………………………………………………………………」

黙ってる私達に業を煮やしたのか、その男は私達の顔を叩き、そして髪を掴んで壁に叩きつけた。

「使えない女共め。いや、一ヶ月後には世界平和の礎として役に立ちましたな、これは失礼しました」

そうして元凶の一人は去っていった。

扉が閉まり、僅かな光が部屋を明るくしている。

「大丈夫？ アリカ」

「姉上こそ、大丈夫ですか？」

「……………悔しいわね」

「……………はい」

「そして、お互い後悔してるわね」

「…………………………！！？」

“何故それを！？”という表情だった。

「私は貴女の姉よ？ 妹が思ってることぐらいわからなきゃ」
「姉上には勝てないですね……」

そういう他愛の無い会話をしながら、一カ月は流れていった。

そして、一ヶ月後……

処刑当日……

「魔獣蠢く、ケルベラス渓谷。魔法が使えぬ、この谷底はまさに“死の谷”。古き残虐な処刑方法ですが、これedyやく魔法世界全土の溜飲もさがることでしょう」

ギチギチィ！

下では獰猛な魔獣共が、餌が墜ちてくることを待ちかまえていた。恐怖も無く、悲しさも無く、薄暗い王宮で妾たちは生まれて、そこからただただ奪われる日々を繰り返して来ていた。

「「歩け！」」

「触れないでちょうだい、自分で歩くわ」
「触れるな、下朗。言われなくても自分で歩く」

妾たちの死がこの世界の安寧をもたらすなら、潔く受け止めるが、最後に真紅狼に一目逢いたかった。
そして、妾と姉上は同時に落ちた。

「さようなら」

ナギ」

「さらばじゃ」

真紅狼」

……………落ちた後に気が付いたことがあった。
蠢いていた魔獣共の声が突然鳴りやんでいたのだった。
そして妾たちは何かに抱きかかえられていたのであった。

「オーイ、女王様、大丈夫ツスカー？」
「……………アリカ姫さんよ。まだアンタには死なれちゃ困るんだよ」

そこには、姉上にはナギが、妾には真紅狼が居た。

くアルマ・アリカside outく

く真紅狼sideく

上ではアリカとアルマ女王が立っているのが見える。
今、俺は、両名がこれから落ちるケルベラス溪谷の谷底に居るんだよ。

え、なに？ 死ぬ？ 死ぬわけないじゃん、何言ってるの？
ここにも俺の友人は居るんですよー？

しかも、とびつきりにヤバいのが。

ちなみに今、魔獣共は居ません。というか、俺の友人が全部喰っちゃってね、先程のは録音ですよ。

HAHAHA（。。）！！

「おい、真紅狼」

「なんですか？ 愛しのキティさん？」

「（スルー）ここには獰猛な魔獣共が居なかったか？」

「あー、俺の友人が喰っちゃったみたいだな。殲滅されました」

「……………ここから助けるのか？」

「うん。まあ……………アイツは呼び出すけどね。

ラヴィエン

デ！」

谷底に不自然な大穴からゆっくりと出てきたのは、長さなら“ジエ
ン・モーラン”を余裕で超える古龍種である。

「これから落ちてくる二人を助けたら、上昇してくれ！」

『オオオオオオオオアアアアアアアアアア！……！』

そして俺はアリカ姫を受け止めて、アルマ女王も助けようとしたら、
そこにナギが来ていた。

「よお、ナギ」

「真紅狼！？　ってなんだ、そいつ！！？」

「俺の友人の“大敵竜ラヴィエンテ”だ」

「……先程まで、**獰猛な魔獣達**が居ませんでしたか？」

「あー、それ録音。コイツが腹減った時に全部喰っちゃったみたいでね。いやー、困った困った」

「ナギ」

「なんだよ？」

「アルマ女王に個人的に言いたいことがあるんだろ？ このまま左に行けば谷から出られるから、行きな。こちらは俺が片付けておく」

「いいの
かよ？」

「いいさ。俺も個人的に用があつてな」

「サンキュー！」

そうやってナギはアルマ女王を抱えて谷を走って出ていった。

上ではラカン達が登場したのか、ざわつきが次第に大きくなってきている。

「反逆者だ！ 捕えよ！！」

「さて、と。キティ、レーネ、アスナ……そしてアリカ姫。ラヴィエンテの頭の上に乗れ。頼むぜ、ラヴィエンテ……」

オオオオオオアアアアアアアアアア！！！！

.....--!.

『な、なんだっ!?!』

地響きを起こしながら、俺達は登場した。

「ハロー、老害共」

『真紅狼!?!』

『紅蓮の殲滅鬼!?!』

おーおー、皆さん、驚いてちゃって。

「クルト!」

「はい、真紅狼さん。調べ終わってますよ!」

「これって生中継?」

「ええ。裏でどうにかすり変えました」

「よくやった!! ついでに絶望の鐘を知らせてやれ」

「はい! これを見ている皆さん!! ココに書いてあるMM元老院の数名は先の大戦の敵の組織、【完全なる世界】と深く繋がりを持っており、さらに戦争を引き起こした張本人達です!」

『バカなっ! デタラメを言うな!』

クルトは必死にこの場をごまかそうとする者達を無視して、話を続ける。

「その上! 全ての罪をアルマ・アリカ両殿下になすりつけてこの

二年間、のうのうと生きてきました！！ よって、アルマ・アリカ両殿下は完全な被害者であり、被疑者ではありません！！」

「はい、ご苦労さん、クルト。ということでMM重装兵団の皆さんは、今、書類に挙げた奴らを拘束してくれ。……………で、アリカ姫さんよ。アンタ所々、顔や体に傷があるんだが、誰がやった？」

「……………あの者じゃ」

そう言っ指を指した。

男は顔を背けた。

へえ、アイツがねえ……………

おっと、いけない。

取り敢えず、アリカ姫が指を指した奴以外はラヴィエンテによって消し炭にさせてもらうか。

「重装兵団の皆さんは、今、アリカ姫が指差した以外の連中をラヴィエンテの前に立たせろ」

『ハ……………ハッ！ おい、歩け！！』

数名は目の前の巨大なモノに恐怖し、逃げだそうと試みるが、手足を縛られている為、その場に転がってしまっている。

「そんじゃま、処刑だな。あ、これを見ているお子さん達は見ない方がいいぞー。酷いから。あと、全員左右に別れる、巻き添えを食らうぞ？」

……………よし、避難したな。んじゃ、ラヴィエンテ……………骨まで燃やし尽せ」

『オオオオオオ……………ゴアアアアアアアアアア！！！！』

ラヴィエンテは大きく口を開けて、超弩級戦艦並みのプレスを放ち、その数名は直撃した瞬間、一瞬で肉体は炭になり悲鳴が出せないほどの熱さで瞬く間に骨だけになっていた。

全員が骨だけになっても炎の地獄は収まることなく、さらに三分が過ぎた。

ようやく火も収まり、焼け跡には炭になった骨らしき欠片が、ちよつと残っていたが、風で全て吹き飛ばされた。

「さて、後一人なんだが……。ここからは個人的な恨みを晴らすから、子供には絶対見せるなよ。この中継を見ている連中ども。……覚悟はいいか？」

俺はいつの間にか、無意識の内に『直死の魔眼』に変わり、右手に“七ツ夜”を持ってそいつと対峙した。

（真紅狼 side out）

（エヴァ side）

数名が灰になり、最後の一人は真紅狼自ら、「処刑する」と言った。その瞬間、場の空気が急激に冷えた。

「……………なんだこの魂まで凍りつかせそうな殺気は……………！？」

重装兵団の連中はこの殺気に当てられて、失神していた。

ガトウ達を見ても、全員が冷や汗をかいている。
そして、真紅狼を見ると、髪の色が“紅”ではなく“蒼”になっていた。

『…………貴様の様な“悪”は、三流以下だ。俺が本物の誇り高い“悪”ってのを魅せてやる』

『ま、待て！！ 私はこの世界の為に……………！』

『この期に及んで、言い訳か？ つくづく無能だな、オマエ』

『わ、私は……………』

『もついい。喋るな』

そう言つて真紅狼は一瞬で姿を消し、屈んだ状態で一閃……………。

その時には、そいつの体は宙に浮き、仰向けの状態だった。

真紅狼はゆっくりと立ち上がり、刃を突き刺すように持ち代えた。

この時の時間経過がとても長く感じた。

一秒が一分に、一分が十分に、と。

真紅狼の拳動がまるで“コマ送り”の様に見えていた。

『くだらん』

貴様には来世すら与えん

故に“消滅”しろ』

真紅狼の目つきは冷酷で私ですら恐怖を覚えるほどの視線だった。

そして刃は振り降ろされ、そいつは体に刃が刺さった瞬間、消滅した。

『理解したか？　これが“モノ”を殺すってことだ』

その後、真紅狼の髪は“蒼”から“黒”に戻り、場を支配していた殺気も霧散し…………… 終幕を告げた。

（エヴァ side out）

（真紅狼 side）

俺は、消滅させた後、気にもせずのアリカ姫の元に向かった。
途中クルトには、放送を終わらせるように頼んでおいた。

「…………… アリカ姫さんよ。これで全て終わった。報酬を頂こう」

「…………… だが、すでに国はないから、賞金も払えんのじゃが……………」

「金銀よりもっといいモノを貰うから、いらん」

「金銀よりも…………… じゃと？」

「俺は…………… “アリカ”。アンタが欲しい」

「…………… なっ！！？　わ、妾じゃと！？」

「どんな報酬も払うと言ったのはアンタだぞ？」

「…………… う、うむ。だ、だが……………」

「アリカ姫、アンタ達が未だに民に対しての責任を背負ってるなら、俺が背負ってやるよ。だからよ…………… “姫”とか全てを脱ぎ棄てて、

“一人の女”として俺と共に過ごさないか？」

「…………… はい！」

アリカは恥ずかしそうに満面の笑みを見せた。

「しかし、妾を貰うか……とんでもない報酬じゃな」
「そりゃアリカ、お前。俺は悪党だぞ？ それぐらいの報酬じゃねえとダメだろ」

あ、そう言えば、あの時の事をちよろつと復讐しよう……

「しかしじゃ……………！ んううう？！？！？！？！？」

なんか戸惑った声が聞こえていたので、ついでに黙らせた。
……………
デープで。

ちよいと待つてね

「ぷはっ！ いきなり何をす、す、すするのじゃー！？」
「いや、あのときよくも眠らせるなんて真似してくれたから、その復讐を」

「鬼め」

「実際鬼だし」

「ケダモノめ」

「狼ですし」

「……………むう」

「あー、もう。可愛いなあ、アリカは」

最後に、魔法世界を見回った後、我が家に帰るとするかねえ。

「アリカやアスナ、レーネは魔法世界の見て回ったことがないんだっけ？」

「うむ」

「はい」

「……ウン」

「なら、キティ。また回りながら、ウチに帰るか」

「そうだな」

そうして、俺達はそのまま魔法世界を見て回りながら、麻帆良に帰った。

（真紅狼 side out）

やれやれ、長い旅になったもんだ……

極彩と散れ（後書き）

はい、アリカも回収完了！

そして、真紅狼のフォームみたいなもの（？）が追加。
“蒼”モード。

この時になる条件は、真紅狼が冷酷になるに連れ、髪の色が“蒼”になっていく感じです。

基本、その時には『直死の魔眼』を解放中です。

やっと訪れた平穩（前書き）

あけましておめでとございます。

五日に投稿すると言いましたが、我慢できずに投稿を開始します。

あと、毎度ご感想有難うございました！！

ゆや様、読むのはいいけど書くのは様

今年初めの投稿をどうぞ！！

あ、あと、今年も私、大喰らいの牙の作品をよろしくお願いします。

やっと訪れた平穩

（真紅狼 side）

魔法大戦の“後片付け”も終わった俺達は、魔法世界を見回った。というのも、終戦をしたとは言え、紛争などが絶えなかった為、俺達は見回りながら、紛争潰しを繰り返していた。

その為か、三年ほど魔法世界に居座った後、こちらに帰って来た。帰りはクルトに頼んだら、色々と手配してくれた。

その後、いったん麻帆良に帰った後、今度はこちらの世界一周をすることとなった。

ちなみに年は985歳だ。

もう少しで1000歳到達だよ。

キティは520歳、レーネは俺より年上で990歳、アスナは薬の関係とかで130歳、アリカは32歳だつて。

ちなみにアリカが『永遠に共に居たい』と言ってきたので、レーネに前から造つていてもらった“不老薬”を飲んでもらい、アリカも不老になった。

しかも、その薬には色々とその人好みのオプションが付けられるようになっていて、アリカには美貌を常に維持出来るオプションを付けていた。

あともう一つ付けていたが、それは何か分からなかった。

よくよく考えてみると、俺の『家族』は年の差が半端ねえな。

最大で958歳の差で、最低でも98歳の差………本当に恐ろしい。あと、報告することとは………キティの身長が伸びたこととアスナが口数は少ないが、ちゃんと喋れるようになったことだな。

キティは、132cmなのが140cmまで伸びた。
今まで伸びなかった分がココに来て急成長を遂げていた。
しかも、まだ伸びそうだった。

「　　というわけで、我が家に帰って来たのはいいんだが……………」
「　　真紅狼の言う通り、帰って来たのはいいな……………」
「　　麻帆良ってこんなバカでかい都市になっていたっけ？」

405年経った後に帰ってみると、エライ風景が変わっていた。
いや、マジで。

ヨーロッパを思い出しそうな、風景に街並みだった。
あの伝統ある日本はどこ行った？

「……………まあいいか。まずは家でゆっくりと寝る……………前に軽く掃除してからだな」

「真紅狼の家はどこにあるのじゃ？」

「ついてくれば、わかるさ」

街並みを外れ、ある場所まで整備された道を歩く。
そして、結界を解く。

「ようこそ、我が家へ。いや、この場合『ただいま』だな」

アリカ達は突然目の前に現れた屋敷に驚く。

「なっ！？ こ、ここが真紅狼の家じゃと！？」

「うわぁ……！！ 書物でしか見たこと無かつたんですが、“武家屋敷”ですね！！」

「……………大きい」

三人は驚いているが、これ母屋じゃないんだけどなあ。

「あー、驚いてる所悪いが、これは母屋じゃないぞ？」

「「えっ?!」「」」

「母屋は、この分家の裏にあるんだよ。そこが俺達の家になるんだよ」

「「これで分家……………?」「」」

俺は母屋に向かいながら、風を操って、家の中に被っている埃を飛ばしていた。

「ここが母屋だ。部屋は余ってるから、俺とキティ以外の部屋であれば、どこでもいいぞ」

「じゃあ、私は真紅狼の空いている隣の部屋にします!!」

「なっ、ずるいぞ、レーネ!!」

「はいはい、喧嘩しない。言っておくけど、奥の方だからな？」

「何故?」「」

「そりゃ、夜は色々（・・・）するからな。聞かれないようにしないといけないし……………」

アリカとレーネは『色々』の部分进行想像してるらしい。
可愛いことで。

「でも、もう一軒ぐらい造ろうかなーと思ってるんだよね」
「『まだ造るのか!?!?』」

これにはキティも驚いたようだった。

「いや、魔法とか使うからさ。そういうの専用部屋とか皆で寝れる『寝室』とかさ、造った方がいいかなと思って……色々と防備対策を仕込んでね」

たとえば、防音とか探査魔術を引いたりとか、魔法障壁に物理障壁を張ったりとか、その他諸々をしようかな……と。

「ま、取り敢えず、荷物を置いて今日は寝るか」
「『はい』」

五人仲良く寝ました。

（真紅狼 side out）

レーネside

次の日の朝、起きてみると……………

すでに、真紅狼の姿は無く、庭で武器の手入れなどをやっていた。

「真紅狼。お早うございます」

「お早う、レーネ。……………うるさかったか？」

「いえ、自然に目が覚めましたので……………」

「そうかい。朝食はもう少し待っていてくれ」

「……………はい」

返事をする、真紅狼は銃に剣や大槍といったものを綺麗に研いだり、ツヤを出す作業に戻った。

シャツ・・・シャツ・・・

キュッ！キュッ！

「うー、朝とはいえ寒いな」

「なら、隣に座って一緒に暖でもとりますか？」

「……………いや、後ろから抱きついてくれたら嬉しいかな」

「どうですか？」

「あ、うん。そんなカンジ」

体勢維持にちょっと疲れますけど、真紅狼の背中は大きくて暖かいです。

真紅狼の顔を覗き込むと、ちょっとニヤついていた。

どうしたんでしょうか？

「真紅狼、なんでニヤついてんですか？」

「……………え、俺ニヤついてた？」

「それはもう……………バツチリと！」

「……………内緒」

「教えてくださいよ」

「言ってもいいけど、恥ずかしい思いをするのはレーネだぞ？」

私が恥ずかしい思いをする？

そんな状況、今は無い筈ですが……………？

「レーネが後ろから抱きついてると、胸がイイ感じに潰されて、重量感を愉しんだ（キリッ！）」

「え？……………あ。それで真紅狼は先程、後ろから抱きついてくれて言っただけですか！！」

「あれ、恥ずかしがらないの？」

「むしろ、真紅狼が恥ずかしくなる状況じゃないですか？」

「役得だから、俺は恥ずかしくない！」

「そうですね。それにしても真紅狼はエロいですね」

「エロい俺は嫌いかな？」

「いえいえ、それも真紅狼として、私は嬉しいですよ」

「そいつは男冥利として尽きるね……………」

そうして、私達は自然とキスまで発展した。

んっ

真紅狼の唇はなんとも言えない至高の感触です

レーネ side out

アリカ side

部屋に陽の光が差し込んできた時に、妾は目を覚ました。

「……こちらの陽の光は力強いな」

エヴァンジェリンはまだ寝ていた。

吸血姫だから、朝は強くないのであろう。

真紅狼とレーネの布団は、すでに片付けられていて、ここには無かった。

時間は八時半だった。

朝食の準備でもしてるんだろうか？

居間に行こうとした時、向こう側から真紅狼がやって来た。

「……おや、起きたのか。おはよう」

「……あ、うむ。お早う、真紅狼」

「起きたばかり？」

「ほんの少し前だが、朝食か？」

「ああ、そうだよ。朝はちゃんと食べないと体が動かないからね」

「なら、頂こう」

「そうかい。キティとアスナを起こさない」と

そう言って、中に入って真紅狼は朝食を食べるかどうが、訪ねていた。

そして、戻って来た時にはアスナだけが起きていた。

「エヴァンジェリンは？」

「まだ眠いみたいだ。いらないうてさ」

「まあ、エヴァンジェリンは吸血姫だからの、仕方がない……………か」
「んじゃ、俺について来てくれ」

その居間に連れてこられた妾たちは先に起きていたレーネと共に朝食を頂いた。

「……………いただきます」……………

……………美味い。

くアリカ side outく

その一週間後、真紅狼はこの街にあった家を建てていた。

やっと訪れた平穩（後書き）

次回からは、世界一周です。

原作が始まる前にキャラ設定をまたやりますので、もうしばらくお待ちください。

京都にて再会……そして、フラグ？

（真紅狼 side）

はい、真紅狼だ。

あ、読者の皆さま、あけましておめでとうございます。

今年も『新 “ネギまと転生者”』をよろしく願います。

挨拶はしっかりとやらないとな。

で、今の状況だが、のんびりとした日常から一週間が過ぎた後に麻帆良に似合いそうな、屋敷をまた造った。

自身に『ヘイスト』を掛けて作業をしていたから、二倍のスピードで建設してたよ。

そして、昨日完成した。

かなり広い屋敷を造ってしまった、しかも三階建ての屋敷。

ゴメン、ミスった。

地下もあるから、合計五階建てだったな。

地下二階まであり、地上三階建ての屋敷だな。

もはや城だな、こりゃ。

三階は、俺、キティ、アリカ、レーネ専用の特殊部屋が七割ほど占めてる。

どういふ部屋かは皆さんの想像に任せるよ。

二階は、個人部屋がほとんどである。まだ何部屋か余ってるけど、問題は無いだろうな。

一階は、リビングや共有空間が主体だな。和室や母屋や分家に続く連絡通路がある。

地下一階は、全体が訓練場と魔法練習場だ。

地下二階は、温水プールといった娯楽施設と“別荘”の設置場所とした。

ちよつと張りきり過ぎた。

ちなみに全階にキッチン、リビング、トイレ、バスルームといったものはあるから、大所帯になっても大丈夫である。

まあ、なるはすがないがな……。

そして、昨日早速、三階を使ったのさ。

あんなイイ女達に誘われたら、断る方が失礼だと思うしね。

六時間耐久レースでした……耐えきったよ！！

そして予想外だったのが、レーネが最後まで耐えていたことだ。

いや、スゲーんだよ、レーネの体力。

さらに、キティは身長と共に体型も成長してるんだけど、俺の見立てではバストがまだ成長しそうな予感がある。

ちなみに今はDカップだった。

「……………シャワー浴びたし、昼食作るか」

軽く腹に収めようと、サンドイッチを作ることにした。

飲み物は珈琲に紅茶、オレンジジュースとテキパキと作っていく。
そしてほとんどが終わりそうだったところに、キティたちもシャワー
を浴びて来たらしかった。

「お早う、キティ、アリカ、レーネ」

「……お早う（ございます）」

「……真紅狼、お早う」

「お、アスナも起きたのか。軽く作っておいたから、食べたい人は
食べればいいし、飲み物だけでいいって言う人は、そこに珈琲、紅
茶、オレンジジュースがあるから各自淹れて飲んでくれ」

「……はい」

一時間後……

「食べたし、準備してくれ」

「どこに行くのか、真紅狼？」

「昨日言っただじゃん、キティ。世界一周するって」

「ああ！ 忘れていた………激しかったからな」

「でも、気持ちよかったんだろ？」

「………うむ／＼」

ああ、もう！

なんで顔を赤くしながら、頷くかな。

可愛いなあ！！

「最初はどこに行くんですか？」

「日本の文明の発祥の地でもある、京都に行こうかな」

「京都ですかー、お寺とかがいっぱいあるんですよー？」

「文化の地だからな、仏像とかもあるぞ」

「……すごい楽しみ」

「そうか、そりゃよかった。じゃあ、二時間後ぐらいに一階に集合でいいか？」

「……はい（うむ）（ああ）」「」「」

二時間後・・・

準備し終わった俺達は荷物を持って、外に出た。

「どうやって行くのじゃ？」

「まあ、見てなって………来い！ 『ケーツ・ハリー』！！！」

魔石を空中に投げ飛ばした後、空で一瞬光り、そのあと俺は四人を鋼糸で優しく包み、ケーツ・ハリーの背に乗せた。

「ケーツ・ハリー、しばらく移動として使わせてもらうが、頼むぜ」
『クルウアアアアアアア！！！』

「これが召喚獣ですか、私にも使えますかね？」

「それは試してみないと、分からないから………帰って来てからな」

「うわあゝ、楽しみです!!」

そうして、俺達は京都に向かった。

＼真紅狼 side out＼

＼???? side＼

俺達は今、詠春の故郷である京都に来ていた。

詠春の家に向かつてる途中で、空に大きな鳥みたいな姿が見えていた。

「でけー鳥だな」

「大きいわね……誰かが乗ってるようね」

「……どつかで見たことのあるような人の姿だな」

「街の外れに降りて来ているから、まず、詠春の元に向かった後、詠春に街を案内してもらいましょうよ、ナギ」

「そうすつか、アルマ」

取り敢えず、詠春の元に向かった俺達であった。

＼ナギ side out＼

＼真紅狼 side＼

ケーツ・ハリーを魔石に戻し、京都の地に降り立った俺達の目に入ってきた光景は雅だった。

「……ここが京都だ」

「あちらにはない美しさがありますね！」

「歴史を感じるな……」

俺の後に、レーネ、アリカと続いた後、アスナが左指を引っ張って来た。

グイグイ……

「ん？ どうした、アスナ？」

「……真紅狼。私を……鍛えて欲しい」

「突然、どうした？」

「私、助けてもらうばかりだし、自分だけ安全地帯にいたくないから……」

「だから、自分でも戦える力が欲しいと？」

「……そう」

俺は少し考えた。

鍛えて欲しいっていうには一切の妥協を無くしては鍛えるが、問題は再び“闘争の世界”に戻ると言う事だ。

アスナは、今まで人生を操られて生きてきた。

そんな辛い人生をもう歩むことなく、普通に安心して暮らしていけることが出来る。

それを捨ててまで、こちらに戻るといふのは……

だから、俺はアスナに聞き出すことにした。

「アスナ」

「……なに？」

「これから質問することには正直に答える」

「……わかった」

「平穩を捨ててまで、こちらに戻る為の『覚悟』は持ってるか？」

「……はい！」

「鍛えることになったときに、投げ出さず立ち向かう事が出来るか？」

「……はい！！」

「最後に……俺にオマエの“眼”を見せてみな」

俺はアスナの高さまで屈んで、“眼”を見た。
そこには、まっすぐに決意を決めた眼だった。

「分かった。鍛えてやるよ」

「……ありがとう」

「こちらの世界の魔法はエヴァ、レーネ、アリカに習ってくれ。俺は使えない体質なんだ、代わりに俺が使う魔法は俺とエヴァが教えるからさ」

「あ、真紅狼。私も真紅狼の魔法、習っても良いですか？」

「妾も教わりたいのじゃが……いいか？」

「いいぞ。あと、組み手の相手はイイ奴が居るから、紹介するまで待つてくれ。俺も出力落として、戦ってやるから」

「……まずは、体力づくりとか？」

「まあ、そうなるかな。何にしても、旅行中は体力づくりとかは出来るが、実践までは出来ないしな……」

と、大通りで少し喋ってる俺達を見てる大衆がすごい集まってる。

まあ、ほとんどが野郎ばっかだけどね…………。

十中八九、キティ達が目当てだな、こりゃ。

だって、通りに美女が三人…………しかも、その内二人は金髪でもう一人は銀髪、さらに三人ともスタイルもいい。

日本人でも、そうそうお目にかかれない。

その中心に居るのが俺だから、凄い嫉妬の視線が俺に集中してる。

「取り敢えず、見て回るか……………」

「…………はい……………」

そして、俺達が移動すると、その後ろにぞろぞろと付いてくる連中が数十人は居た。

ウザイ…………

まずは京都といったら、仁王門をくぐり清水寺に行き、その後二条城、金閣寺、銀閣寺、天龍寺、渡月橋、伏見稲荷、祇園と周り、一息付く為にキティ達を茶店に座らせて休憩してる間に、俺は詠春の家がどこか人に訪ねていた。

「…………ここからだと、嵐山方面に出た方が近いですよ」

「嵐山方面ですね。どうも、有難うございます」
「では、さいなら」

道を訪ねた相手が舞妓だった。

っていうか、歩いていれば舞妓に当たるって言うけど、マジだった。
ぶっちゃけ信じていなかったからなあ。

で、キティ達の元に戻ってみると……………

ガヤガヤ・・・

…………… またかorz

今度は野郎だけではなくて女性もいるし……………。

国民的アイドル並みの人の集まりだな、オイ。

しかも、勇者^{ナンバ}が居た。

見事にバツサリと切られているけどね。

ていうか、アレ……………断られた勇者^{ナンバ}共の山か。

あーあ、死屍累々だ。

「あー、すいません。通してくださいなっ！」

「真紅狼、遅いぞ」

「そりゃ悪かったな、エヴァ。詠春の家の方向が分かったから、行こうか」

「あ、待つてください。あと、お団子があと一つなので……………」

「なら、急いで食べなくていいぞ。ゆっくり食べな。喉を詰まらせたら大変だからな」

「で、なんでここまで人が集まったの？」

「妾たちが一息ついてきたら、向こうから若い男たちが数人来て、
『ねえ、キミたち。暇ならボク達と一緒に食事しない？』って言う
てきたから、妾たちが『断る（お断りします）』って言ったら、沈
んだ表情で去ってった。レーネは笑顔で言っておったな」

うわぁ……………容赦ねえ。

そりゃ、心が折れるな。

「そつから、何人もの若い男たちが次々と妾たちに声を掛けに来て
いたな」

ある意味、京都の男は勇敢だね。

「で、それが見物になったと言うわけか？」

「（ゴクン）……………そうなんですよー、私には真紅狼という愛すべ
き男性が居るのに、そこらへんの男に靡くわけじゃないじゃないですか
！」

レーネの発言で、おそらくレーネを狙っていたナンパ共は泣きなが
ら去っていった。

……………すげえ威力。

「「私達も同じだな」」

続いて、キティとアリカを（ry
うん、カオスだ。

「そろそろ落ち着いたか？ レーネ」

「あ、はい。大丈夫ですよ」

「なら、行くか。……すみませーん、勘定をお願いします」

代金を払って、詠春の家を訪ねようと思った矢先に聞き覚えのある
声が、向こう側から聞こえた。

「おー！ 真紅狼にアスナ、レーネじゃねえか！！？」

「ん？ わぁお、ナギにアルマか、久しぶりだな」

魔法大戦をかつて共にした戦友達だった。

（真紅狼side out）

（アルマside）

先程見かけた大きな鳥のようなシルエットを見た場所まで詠春に案内してもらってる最中に、道を歩いてる人達からある話題が聞こえた。

『武者小路通りの茶店で、凄い美女が三人もいる』

という話題だった。

「そこに行ってみる？ ナギ？」

「そうだな、詠春、案内を頼む」

「ああ、武者小路通りはこっちだ」

移動してみると、凄い人だかりだった。

ちょうどその時、集まっていた男性の三分の一が泣きながら去っていた。

そのあと、すぐに残りの男性も去っていき、その中心に居た人物達は予想外の人物達だった。

ナギは、すぐさま声を掛けた。

「おー！ 真紅狼にアスナ、レーネじゃねえか！！？」

「ん？ わぁお、ナギにアルマか、久しぶりだな」

かつての仲間である蒼騎 真紅狼と妹のアリカにアスナとレーネに……見知らぬ女性だった。

「お久しぶりね、アリカ、アスナ、レーネ。三人とも元気だったかしら？」

「姉上もお変わりなくて、何よりです」

「……元気だった」

「そちらも元気ですね！」

私はここに居る筈のエヴァンジェリンを探したが、どこにも見つからなかったので、聞いてみた。

「エヴァンジェリンは、どうしたの？」

「あー、姉上。驚かないで聞いて欲しいのですがいいですか？ 詠春にナギ、ガトウ、タカミチそしてアルとゼクトもいいか？」

「……ああ」「……」

「ここに居る、見知らぬ女性があのエヴァンジェリンだ」

「……」「……」は？」「……」「……」

えっと、あの小さな姿じゃなくて、この大きく成長したのがエヴァンジェリン？

「エ、エヴァンジェリンなの………？」

「ああ、私があのエヴァンジェリン・A・K・M・蒼騎だが？」

「……」「……ええええええええええっ！！？」」「……」

「真紅狼！ 本当ですか！？」

「我が妻のエヴァだが、なにか？」

「んなアホな！？」

「ガトウ、現実を受け入れるべきだと思うぞ？」

「それでも、受け入れられないモノがあるんです！！」

だって、あんなに可愛かったエヴァンジェリンがこんなにも大人姿でしかも凄いアダルトな雰囲気醸し出して、私よりもスタイ

ルよさそう。

アルビレオ・イマは何故かorz状態になっていたけど、放っておきましよう。

知らない方が得ですし。

ガトウは目が点になっていますし、タカミチ君は顔が赤くなっていた……若いですね。

ゼクトは驚いては居ますが、さほど表情に出していないので分からないですね。

ナギと詠春は、“空いた口が塞がらない”という状態だった。

「これから、詠春の家の方を伺おうと思ったんだが……大丈夫か？」

「え、あ、ああ。大丈夫だぞ、真紅狼」

「あまりにの衝撃的な事実に驚きを隠せないか？」

それは当り前でしょう。

五年も経たないうちに、こんなに成長してるなんて……。

そして、私達は真紅狼とたちを連れて詠春の家に戻り、門に入る前に真紅狼が制止した。

どうしたんでしょうか？

「アルマside out」

「真紅狼side」

詠春はどうやらこちらに帰って来てから、近衛家の御令嬢と結婚したらしく、今では“関西呪術協会”の長を務めているらしい。所謂、逆玉の輿だったらしい。

その総本山が実家らしく、山奥にあり門もかなり立派だった。

その門をくぐる前だった、茂みから子狐が顔を出していた。
人間が近くに居ても、逃げないので不思議がっていたら、どうやら
足を怪我しているらしかった。
動きが不自然だった。

「待ってくれ、詠春」

「どうしたんだ、真紅狼？」

「子狐が足を怪我してる。悪いがちょっと待ってくれ 『ケアル』
」

ポウウ・・・

俺は、傷を治し、持っていた包帯を巻いて処置をした。

「こんなモンかな」

「手際が良いのう」

「昔は怪我しまくったからな、包帯は常に持ってたよ。ま、習慣癖
だな」

ゼクトと話していた時に、いきなり晴れているのに雨が降った。

ザアアアアアアア・・・

どうやら俄雨だったらしく、すぐに止んだが、俺はある言葉が浮かんだので詠春に確認を取った。

「おい、詠春」

「なんだ、真紅狼？」

「単語でさあ、『晴れ』、『雨』、『狐』でなんか思い当たる言葉がなかったっけ？」

「多分、俺と真紅狼が考えているのは、同じことだと思っぞ？」

「だよなあ。出来れば外れてもらいたいんだが、一緒に答え合わせしてみるか？」

「ああ。……………じゃ、言っぞ？」

「『狐の嫁入り』」

見事に重なった。

その後、意味を聞いてくるナギ。

「意味は？」

「確か、メスのキツネがオスのキツネに嫁入り、つまり、結婚するっていう意味だった気がするな」

詠春がそこまで答えると、アリカ、キティ、レーネ、以外は素早く目を逸らした。

アスナはどうでもいいみたいだった。

「オイ、なんでエヴァ達以外、一斉に俺から目を逸らしやる？」

『いや、別に何も?』

「オマエ等、全員俺に喧嘩売ってんのか?」

『いや、別（ry』

「こつちを見るや、オマエ等」

その後も目を逸らしている為、キティ達に視線を向けると、全員そろって俺に向けて言った。

『真紅狼だから、しょうがないな（ですね）』

「その優しさにココロが沁みる……………」

満場一致の解答、本当にどうも有難うございました。
子狐を腕に優しく抱えながら、中に入り宴会をした。
（真紅狼 side out）

そうしながら、京都の夜を楽しんでいった。

京都にて再会……そして、フラグ？（後書き）

はい、フラグフラグ。

コメントに困った方は『真紅狼、故、仕方がなし』とでも言ってあげてください。

アスナの修行が開始します。

組み手の相手は、真紅狼やエヴァ、そしてある人（？）です。

ある人はもうしばらくすれば、出てくると思いますので予想してみてください。

では、失礼します。

酒を飲むと、人は変わる。(前書き)

毎度ご感想有難うございます！
読むのはいいけど書くのは様

酒を飲むと、人は変わる。

（真紅狼 side）

現在、宴会中……

状況を一言で言う………すごい……カオスだ。

“酒は人を変える”というが、変わり過ぎだろ、コレは。

ナギ達は酒を飲んでも変わってはいないが、問題は女性陣だった。

アルマは、飲んだ途端、スゲーエロい格好でナギに絡んでいる。

アリカもアルマ程ではないが、ちょっとエロい格好で俺に迫ってきたと思っていたら、酔いが完全に回ったのか、俺の膝を枕代わりに寝てしまった。

キティとレーネは酒に強かったらしく、普通に飲んでいたように見えた。………が！

よく見ると、キティは酒豪になり変わっている様に見えた。
拳句の果てには、アルまで絡んできて、外で戦闘してるよ。

結局のところ、レーネのみが酔っておらず、俺と共に二人で飲んだ。

アスナは、離れたところで黙々と京料理を楽しんでいた。
ガトウやタカミチが「綺麗に食べてる」と言っていたが、その辺の

マナーは俺達が教え込んだ。
ちゃんと箸を持ち、茶碗を持ってご飯や音を立てずに味噌汁を飲んだり、焼き魚を綺麗に剥いたりどう見ても上品な食べ方だった。
食べ終わった後、ガトウとタカミチに何かを聞いていた。

「真紅狼、もう一杯飲みます？」

「んゝ、半分ぐらいでいいや」

「分かりました……………入れましたよ」

「レーネは？」

「私はもういいです」

「そうか」

ゴクツ……

ほんの少し飲んだ時、風が吹き、その時桜の花びらが俺の杯の中に入った。

「わぁ！ 風流ですね」

「だな、京都の風は気が利いてるな」

「……………真紅狼、隣いいか？」

「ん？ ガトウか、どうしたよ？」

「お嬢ちゃんが俺とタカミチに“感卦法”のやり方を教えてくれた頼みこんで来たんだが……………」

……………なるほど、さっきのやり取りはそれだったのか。

しかし、感卦法か。
確かに俺達と戦い合うなら、その選択は間違っちゃいないな。

「悪いがコツだけでも教えてやってくれないか？」

「しかし、いいのか？ お嬢ちゃんはどうやく平穩を得られたのに、またこちらに戻るなんて……………」

「アスナ自身が決めたことだぞ、ガトウ。ならその意見を尊重させるのが大人つてもんだらう？」

「そうか、彼女自身が望んだことなら、教えてくるさ」

「おう、悪いな」

ガトウは再び、アスナの所に戻っていった。

次に詠春がやってきた。

「久しぶりだな、真紅狼」

「今度は詠春か……。しかし、驚いたな。オマエが結婚してたなんて」

「今は“近衛 詠春”になっている。よろしく頼むぞ」

「はいよ」

「いずれ、お義父さんも紹介するさ」

「別にいいだろう、そこまで紹介しなくても」

「魔法を知ってる人なんだよ」

「……………名は？」

「近衛 近衛門っていう人だ。東……………“麻帆良”という巨大な学園都市で学園長をやっていて、“関東魔法教会”の長でもあるんだ」

ふっん、“麻帆良”ねえ……………
麻帆良ア！？

「詠春、麻帆良に俺の家あるんだけど……………」
「……………本当か?!」
「つか、あの辺一帯の土地、全て俺のなんだけど……………」
「(。。(;)」
「……………」

お互い黙る。

「聞かなかったことにしろ」
「ああ、そうしておこう。その方がお互い幸せな感じがしてきた」
「真紅狼」
「おや、キティ、おかえり。……………アルは？」
「氷漬けにしてきた」

生きてるかな、アイツ
いや、ゼクトが居るし、大丈夫かな。
そう思っていると、御本人登場。

「真紅狼よ」
「おう、ゼクト。こちら側では辛いんだろ？」
「分かってるなら、いうな」
「そこでだ、アルとオマエに渡す物がある。……………レーネ」

「はいはい、準備出来てますよ」

レーネに取り出せたのは、ネックレスにもピアスにもなるアクセサリだった。

「これをやるよ」

チャリ・・・

ゼクトにアルの分まで渡してやると、ゼクトの調子が変わっていた。

「む、辛くない？　どついう事じゃ？！」

「あちら側の住人はこちらに来れないが、レーネが設計し、俺達で作成したそのアクセサリをゼクトやアルが付けると、こちらの世界でも普通に活動が出来るんだよ」

レーネにこちらに帰って来る時に、色々とおちらの訳アリ事情を教えてもらった。

魔法世界側の住人は、その世界を構成してる粒子があるからこそ、存在出来るが、地球にはソレが無い。

だから、こちらでの活動はかなりキツイが、今渡したアクセサリには“ケルベラス渓谷”でラヴィエンテが潜つてるときに見つけたので数個ほど貰い、特殊な鉱石を加工してある。

どうやら、その鉱石は無限にあちら側の粒子とエネルギーを生み出

す鉱石だった。

それをうまく俺が加工して、レーネ達が色んな術式を組み込んだことで完成した。

「コレさえあれば、アルがいちいち本に戻らなくてもいいぞ?」

「これはスマン、感謝するぞ」

「で、これからゼクト達はどつするんだ?」

「ワシとアル、ガトウ、タカミチは麻帆良に行こうかと思っておる。詠春の紹介状を持つての……」

「そこで隠遁生活を楽しむわけか……」

「いや、ガトウとタカミチは教師として働くらしいぞ?」

「出来んのかよ。まあ、俺達ももうしばらく世界を見回ったら家に帰るから、帰ってきたら伺うさ」

かつての仲間たちと今後の行き先を聞きながら、夜は過ぎていった。
真紅狼 side out

???? side

私は不覚にも猟師の罠に引っ掛かり、なんとか自力で抜け出すことが出来たが、足をやられてしまって、歩けずにその場に倒れ込んでしまった。

意識が遠くなり始めて、目が閉じかけた時に向こう側から足音が聞こえてきた。

ザッ・・ザッ・・ザッ・・

必死に目を開けてみると、私の前で止まったみたいだった。
足を見ると、靴だった。

その人は私を抱き上げた後、何やら淡い光で私の足を治癒し、包帯を巻いてくれた。

その場に放置ではなく、どうやら完治するまで面倒まで見てくれるみたいだった。

私ははじめてのことだった。

私を知ってる人間は、気味悪がって近づこうとしないし、時には嫌悪していた。

“化物”として罵られたこともあった。

でも、この人はそうじゃなかった。

怪我まで治してくれて、ちゃんと完治するまで最後まで面倒みてくれる人だった。

「（この人に生涯仕えたいなあ……）」

そう思ってしまった。

その為、この人の名前とかを聞こうと思い、言葉を聞いてると、情報が集まって来た。

「（東の麻帆良という土地に住んでる。名前は“真紅狼”……出来れば、名字も分かればいいですね）」

そう思っていたが、十分な情報が集まっただけでも良しとした。
そして、私は彼に優しく抱かれながら、その日を過ごしていった。
彼は色んな意味で暖かった。

~~~~~side out~~~~~

その後、奥の湖らしき場所から、何かの雄たけびが聞こえた。  
……あ、当初の目的を忘れてた。

酒を飲むと、人は変わる。（後書き）

また、真紅狼に妻が増えます。

コメントに困った方は『またか……いいぞ、もっとやれ!』でお願いします。

次回はもうわかってると思うけど、スクナさん登場。

自分で抱いた疑問を納得した時が、一番腹立たい！ b y真紅狼

く???? side

私は、誰よりも早くその雄叫びを発している場所に辿り着いた。

『 ウオオオオオオオオオオオオツツ!!!! 』

まだ、頭だけしかでてない。

封印し直すなら、今しかないわね。

そう思い、子ギツネから、本来の姿に戻った。

青いノースリーブ和服に狐耳、大きな尻尾、深みのあるピンクで髪止めは藍いリボンを付けていた。

だが、今は足に包帯を巻いている。

少しばかり、露出が高い。

青少年が見たら、思わず目を逸らすかもしれない。

閑話休題

封印力が弱まっているのか、ちよつとずつだが先程よりも出てき始めている。

「我、アマテラスの御魂において命ず、飛驒の大鬼神“リョウメンスクナ両面宿神”」

よ。今ここに再び眠りに……………「バチンッ！」……………きゃっ!？」

スクナの方を見ると、腕の一本が出ていて無理矢理結界を弾き飛ばしたようだった。

「やっぱり、怪我のせいでうまく力が出ない……………」

スクナは私を見た後、手を伸ばして来た。  
どうやら、私を捕獲するみたいだった。

私は、逃げようとするがスクナの腕は長く捕まりそうだった瞬間：

……

ガシンッ!!

目の前で、とても長い武器を持った人間とスクナの腕がぶつかった。

「……………大丈夫か？」

「え、あ、はい。有難う……………ございます」

「いきなりで悪いんだが、背を低くしてくれるか？」

言われたとおりに屈むと、その人間は持っている武器を下からかち上げて、一瞬だけスクナの腕を上空に飛ばした後、体を捻り、一回転しながら落ちてきたスクナの腕を横から思いつきり吹っ飛ばした。

ガンツ・・・  
ぐるん・・・  
ガアーン・・・・・・・・！！

「……………せい……………やア！！」

私は驚いた。

特殊な力を持つてるのは雰囲気的に分かっていたが、その人間がたった一本の武器でスクナの腕を受け止め、さらに吹き飛ばす技量などそうそうみられるものではない。

「さて、キミはだ……………れ……………な……………？！ 女の子？ それとも化生？」

「あ、私は“玉藻の前”です。タマモとお呼びください、『ご主人様』」

「！？！？？？！？？！？！？？」

その後、ご主人様のお仲間が続々とやって来た。

「タマモ side out」

「真紅狼 side」

俺達は宴会騒ぎだったが、奥の方から雄叫びが聞こえた瞬間、目が覚めて今は詠春が話してくれた『スクナ』が封印されている湖に向

かっている。

「あそこがスクナの封印場所だ！」

「顔が出てるぞー!!」

「真紅狼、見えるのか?！」

「まあな。…って、そのスクナの前に女の子がいるって言うか、あ、ヤバイ!!」

スクナの腕が女の子を捕まえようとしていた、女の子は足が悪いのか動きが遅かった。

俺は、高速移動をしながら、前田慶次の最終武器『豪炎轟如』（こうえんこうじょ）を右肩に担ぎながら、その少女とスクナの手の間に入り、受け止めた。

ガシンッ!!

ミシミシッ……

……っ!

こいつは……予想以上に力があるな。

先程の衝撃で腕と肩の骨が軋んだ。

俺は、怪我をしてる少女を屈ませたあと、スクナの腕を吹き飛ばした。

「……せい……やア!!」

ちょうどいい位置にスクナの腕が当たり、スクナは後ろに仰け反っていた。

その間に少女の安否を確認することにした。

………というか、しようとしたんだが、その少女は頭に狐耳が生えており、尻の部分には大きな尻尾が生えていた。

え、コレは                   どっちだ？

名前を聞こうとした時、少女から名乗ってきてくれた。

「あ、私は“玉藻の前”です。タマモとお呼びください、『ご主人様』」

今、なんて言った？

確か、“玉藻の前”って言ったよな？

“玉藻の前”って“白面金毛九尾の狐”が人に化けていたんじゃない？  
かったつけ？

「え、マジで？」

「マジですよ？」

即答された。

いやいやいや、ちょっと待て！？

この娘（狐）がああ九尾！？

.....

オイ、バカ作者、誰が上手い文字変換をしろって言った？

まあ、いいじゃないか。

というか、変換してたら出ちゃったからそのままにしたのさ。

もういい、喋るな、オマエ。

酷く……「ブチッ！」      バカ作者がログアウトしました

本当にあのバカ作者には困ったものだ。

つーか、この少女、よく見ると多分……いや、99%俺が巻いた  
包帯を足につけている。

ちなみに残りの1%は、外れて欲しい望みだ。

「確認するんだけどよ、タマモだっけか？」

「ハイ、なんですか？ ご主人様」

「タマモって、俺が足の怪我を治した子狐だったか？」

「ハイ、そうですよ。足の怪我、治して頂いて有難うございます

」

「望みは絶たれたか………！」

どうして、俺の周りには一癖も二癖もある女しか集まらないんだ？

ああ、俺がイレギュラーだからか。

納得してしまった自分が腹立たしい！



その後、キティ達が遅れてやって来た。

「真紅狼！……………何してるんだ？」

「自己嫌悪中……………」

「本当に何をしてるのじゃ、真紅狼は？」

「ところで、真紅狼。彼女は誰だ？」

皆、タマモに注目している。

「えっと、彼女は“玉藻の前”らしいです」

『……………は？』

「“白面金毛九尾の狐”だってさ」

『……………マジで？』

「マジで」

『ハアあああああああああああああ！？！？？』

「ご主人様、この者達は？」

「俺の友人と妻たち」

「……………結婚してたんですか？」

「まあ三人もいるけど、法とか知ったこっちゃねーな」

「（つまり……………私が求婚しても構わないってことよね）」

ゾクッ！

なんだろう、今、背筋に悪寒が走った気がする。  
特に女性関係の様な気がする。

グオオオオオオオオオオ！！！！

あ、スクナの事すっかり忘れてた。

「取り敢えず、アレをなんとかしてからにするか……」  
「そうだな。で、詠春、封印出来るのか、アレは？」

遅れてやってきたナギが相槌を打つ。

「ある程度、弱めれば応急処置は出来る筈だ……」

「んじゃ、各々適当にやってくれ。俺は休む」

『ちよつと待て！』

「なんだよ、文句あるのか？」

「大いにあるわ、ボケ！」

なんだよ、老人（笑）をもつと労われよ。

「あ、あと、アリカ、エヴァ、レーネそしてタママもやらないから」

「真紅狼よ、なぜやらのじゃ？」

「あの程度ならゼクト達でも封印出来るって」

そう言い合っていると、スクナの雄叫びがまた聞こえた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』

「あー、もううるせえな、アイツ！！」

俺は『豪炎轟如』を担ぎ、それに魔力を纏わせて、本来の超刀の長さで重さを二倍にして、スクナと少し距離を開けて立った。そこから俺は跳躍し、一回転しながら威力を高めた『豪炎轟如』をスクナの頭の真上に叩き落とした。

ドゴンッッッ！！！！

B A S A R A

K・O！！！！

『ゴオオッ！！！！？！！？……………オオオオオ』

そして、スクナは頭を垂らしながら、動かなくなった。

……………アレ？ これはもしかしてくたばった？

いや、でもまだ頭は出てる……………、気絶か？

「……………詠春、なんかさっきの一撃でスクナが気絶したみたいだから、今の内に封印してくれ」

「ええー。あんなに苦労したスクナを一撃で気絶とか、どういう性能してるんだ、アイツは？」

詠春はぶつくさいいながらも総本山から応援を呼び、スクナの封印を再びした。

「ご主人様は凄いですねー！！」

「うむ。真紅狼に不可能はないな」

「真紅狼だからな」

「そうですね。真紅狼ですし……………」

上から、タマモ、アリカ、キティ、レーネの順だったが、この四人が呟きながら納得していると、ナギ達も妙に納得していた。俺は、すげー納得いかねえんだが、どうしたらいいんだ？

この後、俺達は屋敷に帰り、タマモは自己紹介した。

「真紅狼 side out」

「タマモ side」

スクナの封印もし終わったところで、屋敷に帰った後、ご主人様から「簡単に自己紹介してくれ」と言われたので、パパッと紹介した。

「一つ聞いていいでしょうか？」

「なんですか、髪を結ってる…………男性？」

「今の間に疑問が浮かび上がりましたが、気にせずに聞きますが、アナタはなぜ真紅狼を『ご主人様』と呼ぶんですか？」

「それは、私を助けてくれましたし、この人の背中を見て『生涯を掛けて仕えたい』と思ったからですわ」

「……………そ、そうですか」

遠まわしに『結婚してください』って言ってるようなものだったが、恥ずかしくは無い。

というより、先程の発言により色々な表情が見れていた。

白いスーツのダンディなおじさんは、『なんで真紅狼ばかりモテるんだ!?!』といい、それをなだめようとする若い男性、赤毛の青年と銀髪の女性は『またかー』という表情だった。

白髪の少年(?)と先程、私に質問した男は少年は何も言わず、もう一人の方は『フフ……………真紅狼はロリコンですね』といい、ご主人様は『ロリコン好きの teme にだけは言われたくねえ!!!』と言いつ返ししました。

で、最後にご主人様の妻たち……………まあ、私もその中に入るんですが……………、その人達は呆れることも怒ることも無く、普通にしました。

……………この人達凄いです。

「ご主人様!」

「ん?」

「命が尽きるその日までよろしくお願いします?」

「おーう」

私はこの瞬間、ご主人様の四番目の妻となった。

＼タマモside out＼

俺の嫌な予感……特に女性関係は外れたことがないんだけど、  
ういう事なの？

自分で抱いた疑問を納得した時が、一番腹立たしい！ b y 真紅狼（後書き）

はい、増えた増えたwww

タマモはF a t e / E X T R Aのキャス狐です。

……………可愛さにやられてしまったのさ。

詠春が呟いていましたが、あれは所謂“スタイリッシュ補正”がかかっているから凄いです。

それと真恋姫で『まじ恋』の話をIF話しましたが、書きたくなってきたので書こうと思います。

形になるまで待っていてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7264y/>

---

新 “ネギまと転生者”

2012年1月10日15時49分発行